

# 後の業平文治

三遊亭圓朝

鈴木行三校訂編纂

青空文庫



え、此の度はたびはほま譽れ高き時事新報社より、何か新作物を口演致す  
 ようとの御註文でございますから、嘗て師匠のえんちよう圓朝がかつさい喝采  
 を博しました業なりひらぶんじ平文治の後篇を申し上げます。圓朝師が在世中、  
 数百のにんじようばなし人情し噺を新作いたしました事は皆様が御承知であり  
 ます。本篇は師がぞんし存しようちゆう生中、すじく筋々を私にお話しになりました  
 た記憶のまゝ儘を申上ぐる次第であります。そも私がわたくし師匠の門に入り  
 ましたのは御維新前まえで、それからえんきつ圓橘となりましたのが明治二

年の五月でございませう。まだ其の頃は圓朝師も芝居掛り大道具と  
いうので、所謂いわゆる落語と申しましては一夜限りあるい或は二日続きぐら  
いのもの、其の内うちで永く続きましたのが新皿屋敷しんさらやしき、下谷義賊したやぎぞくの  
隠家かくれが、かさねヶ淵ふちの三種などでございませう。それより素話すばなしに  
なりましてからは沢さわの紫むらさき（粟田口あわだぐち）に次ついででは此の業平文治でご  
ざいませう。その新作の都度つづ私わたしどもにも多少相談もありましたが、  
その作意の力には毎度ながら敬服して居りませう。師匠は皆様みなが御  
存じの通り、業平文治は前篇まえだけしか世よに公おおにいたしませぬが、  
その当時むかし私は後の文治の筋すべ々々を親おしく小耳こみみに挟はさんで居りました。  
即ちすなわ本篇ほんが師匠の遺稿いこうにかゝる後のちの業平文治でございませう。さ  
て師匠存生中府下の各寄席よせで演えんじ、または雑誌にて御存じの業平

文治は、安永の頃したやおなりかいどう下谷御成街道の角に堀丹波守ほりたんばのかみ殿家来、三  
 百八十石浪島なみしまぶんご文吾という者の倅せがれでございまして、故ゆえあつて父文  
 吾の代より浪人となり、久しく本所ほんじよなりひらばし業平橋に住居すまいいたして居  
 りましたが、浪人でこそあれ町地面屋敷等もありまして、相応  
 の暮しをして居りました。で、業平橋に住居して居りました処か  
 ら業平文治といひますか、乃至ないし浪島を誤つて業平と申しましたか、  
 但たゞしは男の好よいところから斯かく綽名あだないたしたものは確しかと分りま  
 せぬ。併しかし天性弱きを助け強きを挫ひぐの資性に富み、善人と見れ  
 ば身代しんだいは申すに及ばず、一命いちめいを擲なげうつてもこれを助け、また悪  
 人と認まむれば聊いさゝか容赦なく飛菟とびかつて殴り殺すという七人にんりき力の  
 俠客きやうかくでございませう。平生へいぜい荒々しき事ばかり致しますので、

母親も見兼て度々意見を加えましたが、強情なる文治は一向肯入れませぬ。情深き母親も終には呆れ返つて、「これほど意見しても肯かぬ気性の其方、行く／＼は親の首へ繩を掛けるに相違ない、長生して死恥を搔こうより寧そのこと食事を絶つて死ぬに越したことはない」と涙を流しての切諫、それを藤原喜代之助が見兼て母に詫入れ、母は手ずから文治の左の腕に母という字を彫付け、「以来は其の身を母の身体と思つて大切にいたせよ」と申付けまして、それからというものは一切表へ出しませぬ。さア今まで表歩きばかりしていた者が、俄に家にばかり居るようになりましてから、少しく身体の具合が悪くなりました。母も心配して、気晴しに参詣でもするが宜いと云われて、母と同

道で本所の五つ目の五百羅漢らかんへ参詣の帰り途みち、紀伊國屋友之助の大難を見掛け、日頃の氣性直ぐすに助けようとは思いましたが、母の手前そういう訳にもまいりませぬから、渋々しぶくわがや我家へ帰り、様子を尋ねますると、友之助という者が大伴蟠龍軒おおももばんりゆうけんと賭碁かけごを打つて負けましたので、女房お村を奪とられた上に、百両の証文が三百両になつてゐるといふ、友之助は斯かくと聞いて大いに怒り、大伴に向つて悪あつこう口いたしましたので、蟠龍軒は友之助を取つて押え、高手小手たかてこてに縛り上げて割下わりげすい水の溝どぶへ打込んだといふ話を聞き、義憤むらくと発して抑え難く、ついに蟠龍軒の道場へ踏ふ込み、一味加担の奴ばらを打殺し、大伴だけ打漏うちもらして、窃ひそかに自宅へ帰つたといふ処までが、故圓朝師の話でございませぬ。これ

より私が予て聞きおぼえたる記憶を喚起して、後の文治の伝記わたくしかなねを伺います。さて其の翌日は安永五年の六月三十日でございます、蟠龍軒の道場にて何者にか数多あまたの者が殺されたという届とゞけいで出がありますから早速北割下水蟠龍軒の道場へ御検視が御出張になりまして吟味いたしましたが、誰が殺したのか一向分りませぬ。其の頃八丁堀の町与力こぼやしとうじゆうろう小林藤十郎という人は、「これは多分蟠龍軒のためさん／＼」恥辱を受けた友之助の仕事であろう」と疑いましたが、誰たれあつて文治の仕事と心付く者はございませぬ。まして百日あまり外出いたしませず、また近所の者は日頃文治を蔭かげでさえ呼棄てにする者はないくらいな人望家じんぼうか、子供に至るまで、業平の旦那、業平の旦那。と敬つて居おるのでありますから、

文治と疑う者のないのも道理でございませう。その明る日、小林藤十郎殿は本所の名主の家へ出役いたし、また其の頃八丁堀にて捕者の名人と聞えたる手先二人は業平橋の料理屋にまいりました。

## 二

手先の林藏りんぞうと申します者が立花屋たちばなやへ参りまして、

林「親方ア宅うちかえ」

主「これは親分さん、さアどうぞ此方こちらへお上りなさいまし、おい、お火を持って来い」

林「親方、今日来たのは外ほかじゃアねえ、少し大切だいじな事があつて来たのだから不都合のねえように云つてくんなよ」

主「へえ大切な御用と云うのは何事ですか」

林「奥に友之助が隠れているな」

主「えっ」

林「やい親おやじ爺、とぼけるな、それだから予あらかじめ不都合のないようにしろと云つたんだ、二三日ち前から緑みどり町ちようの医者でいりが出入でいりをしているが、ありやア誰が医者にかゝっているのだ」

主「えっ……」

林「この親爺、何処どこまでとぼける積りだ、えゝ面倒だ、金藏きんぞう踏ごん込め」

金「やい友之助、御用だ」

主「もしく親分え、そんな無慈悲な事を為すつちやア困るじやアございませんか、友之助は身体中疵きずだらけでございますぜ」

林「うむ、少しは疵も付いたろう、自業自得じごうじとくだ、誰を怨むうらとこ

ろがあるか、神妙にお繩を頂戴しろえ、これ友之助、大切な御用

だぞ、上かみへお手数てすうの掛らねえように有ありてい体に申上げろよ」

友之助は何なんの為か更に合点がてんが行ゆかず、呆氣あつけに取られて居ります

と、林藏は屹きつと睨にらみ付けて、

林「やい友之助、貴様は十五日の晩には何処どこにいた」

主人は横よこ合あいから、

主「親方、大切な御用とは何どういう筋かは知りませぬが、友さ

んは十四日の夕景、蟠龍軒一味の者にさん／＼な目に遇いましてな、可愛相かわいそうに身体も自由にならないで、私わたくし方しかたへ泊りました、で、十五日には外へも出ませず、終いちんち日こい此処こゝにうむく呻うなりながら寝て居りました」

林「黙れ、貴様に尋ねるのじゃアねえ、これ友之助、貴様は十四日は割下水の蟠龍軒の屋敷で、少しばかり打ちようちやく擲ちやくされたのを遺恨に思つて、十五日の晩に其の仕返しを為しようと云う了りようけん簡かんで、蟠龍軒の屋敷へ切込きりこんだらうな」

友之助は恟びつくり首むたを擡もたげて、

友「なゝなゝ何を云いなさる」

林「いやさ友之助、どうせ天の網のがを免のがれる訳にやアいかねえ、

あの手際は貴様一人の仕業じやアあるめえの、相手は何者だ、男らしく有体に申上げた其の上でお慈悲を願うが宜いぞ、己たちも悪くは計らわねえ、ぐずぐずすると却つて貴様の為にならねえぞ

友之助は怪訝な面持にて、

友「へえ、あの蟠龍軒めが何うぞしましたか」

林「友、しらばつくれるな、あの時アたしか三人だったなア」

友「あなたの仰しやることは何が何だか一向分りませんが」

林「ふむ、貴様は往生際の悪い奴だな、よし此の上は手

前の身体に聞くより外はねえ」

主「え、親分、一体これは何ういう訳ですか」

林「汝の知った事じやアねえや」

主「それでも斯こ様な大たい病びょう人にんを何なうななさる積つりで」

林「おい金藏、この親おや爺ぢも腰こし繩なわにしてくれえ、兎とも角かくも玄関

まで引ひいて往いくから……」

この玄関と申ましますのは、其その頃ころ名主なぬしの邸やしきを通とほ称せう玄関と申ましたのでござごいます。

主「親分おやぢ、なんで其その様な足腰あしこの立たたないものをお縛おりななさるののです、私わたくしア名主なぬし様さまへ引ひかれるような罪つみを犯かした覚おぼえはござごいません」

林「往いく処ところへ往いけば分わららア、黙もくつていろ、金藏きんざう、この近所きんじよに駕か籠屋ごやがあるだたらう、一い挺ちよう雇よつて来きい」

やがて友之助ともすけと立花屋たちばなやの主人あにを召捕めしとつて相あい生おい町ちようの名主なぬし方かたへ

引立てひきたて、まいました。玄関には予かねて待受まちうけて居りました小林藤十郎、左右に手先はべを侍ちたおらせ、友之助を駕籠はべから引出して敷台うに打倒ちたおし、

小「京橋銀座三丁目紀伊國屋友之助、業平橋 立花屋源太郎たちばなやげんたろう、町役人」

一同「はゝア」

小「友之助、其の方は去る十五日よの夜、大伴蟠龍軒の屋敷へ踏ふ込み、家内の者四人、蟠龍軒舎弟しゃてい蟠ばん作さくを殺せつが害がいいたしたな、何なんらの遺恨あつて、何者を語らつて左様な無慙むざんなる事を致したか、さア後あとで不都合ふとごのなきよう有体に申立てろ」

立「まあ怪けしからぬ仰せでございます、余計な事を申すようで

「ございますが、友之助は御覧の通り疵だらけ、十四日夜はさんぶ  
 〃打たれて動きが取れませず、私<sup>わたくしかた</sup>方へ泊り込んだのでござ  
 います」

小「黙れ」

林「さア友之助、とても免<sup>のが</sup>れるものじゃアない、只今日那のお  
 尋ねの通り有体に申上げろ」

友之助は暫<sup>しばら</sup>く考えて居りましたが、

友「へえ、大伴の屋敷へ切込みまして、家内四人の者を殺<sup>せつがい</sup>害  
 いたしましたるは全く私<sup>わたくし</sup>に相違<sup>ちがひ</sup>ございませぬ、へえ遺恨あつて切  
 込みました」

立「これく友さん、血迷つちやアいかねえ、お前は十四日に

……」

林「黙れ、其の方の口を出すべき場合でない、さア友之助、貴様一人の仕業しわざでないと言ふことは分つて居るお、何者を同道してまいったか、一つ白状して後あとを隠しては何なんにもならんぞ」

友「どの様な御吟味を受けましても、外ほかに頼んだ者はございませぬ」

三

林藏は少しく気を焦立いらだちて、

林「これ汝われがな、私わたくし一人の仕事でございますなどとしらを切つ

ても、うむそうかと云つて済ますような盲目じやア無え、よく考  
 えて見ろよ、手前てめえのような瘦男やせおとこに、劍術遣いつかの屋敷へ踏込みふんご  
 三四人の人殺しが出来る仕事かえ、さアいよく申上げねえか、  
 旦那に申上げて少し叩いて見ようか」

友「何なんと云われても私わたくし一人の仕業に相違ちがいません」

立「もしく友さん、お前何どうしたんだ、気が違やアしねえか、  
 旦那様え、なか／＼此の人一人でそんな事の出来る訳はございま  
 せん、全く大疵のために気が違つたに相違ちがいません：おい友  
 さん、確しつかりしなよ」

林「え、黙れ、旦那様、此奴こいつはなか／＼一筋縄じやア白状しま  
 せんぜ、一つ叩きましようか」

小「まア林藏待て、下手人げしゆにんは友之助と決つて居るから追つて又取調べるであろう、何しろ三四さんしの番屋へ送つて置け」

この三四の番屋と申しますのは本材木町三四丁目の町番屋にて、この番屋には二階があつて常の自身番とは違い、余程厳しく出来て居ります。町番屋とは申しながら重おもに公用に使つたものでございます。尚なお小林藤十郎殿は林藏に向いまして、

小「これ林藏、立花屋源太郎の縄を解いて家主いえぬしへ引渡せ」

林「はゝア、おい差配人さはいにん、不都合のないように預かり置け、友之助立てえ」

其の儘駕籠まに乗せて本材木町の番屋を指さして出て往ゆきました。お話別れて、此方こちらは文治の宅、母は九死一生で、家内の心配ひとか一

方ならず、折おりから訪きたれ来る者があります。

「え、頼む」

森松「やアこれは、何方どなたかと思つたら藤原様、どうも大層お立派で……お萱かや様も御一緒ですか宜ようおいで、ございます」

藤「お母ふくろさま様は」

森「いやもう、お悪いの何なんのじやアございません、何どうも今の様子じやおむずかしゆうございますな」

藤「なに、むずかしい、そんなら少しも早く奥へ」

森「どうか此方こちらへ……旦那え、藤原様と御新造ごしんぞ様がおいになりました」

文「お、そうか、さア此方へ、やア何どうも暫く、お萱か、よく

おいでだ」

両人「お母様が大層お悪いそう、さぞ御心配でございましたよ」

文「はい、有難う、今度は些とむずかしかりょうよ」

藤「それは何うも、併し私どもの顔が分りましたようか」

文「いや少しは分りそう、兎も角も此方へ……お母様、藤原

氏がまいりました、お母様、分りましたか、お萱も一緒に……」

藤「伯母様、藤原喜代之助でござる、お萱も一緒に、分りましたか、大層お痺れ……」

と申しますと、病人に通じたものと見えて、「おゝ」と少し起上ろうと致しますから、

藤 「どうか其の儘にして」

母 「永いことお世話になりました、此の度はもうこれがお訣わかれで、お萱は御存じの通り外ほかに身寄もなき不束者ふつゝかもの、何うぞ幾久しゆう、お萱や見棄てられぬように気を付けなよ、それでも文治の嫁が思ったより優しいので、何どの位安心したか知れません、もう是で思い残すことはありません」

此の時台所の方に当つて頻しきりに水を汲んでは浴あびせる音が聞えまする何事か知らぬと一同耳をそばだてますると、

「南無大聖不動明……のうまく……む……だあ……」

文治はそれと心付きまして、手燭てしよくを持って台所の戸を明けますと、表は霏みぞれまじりに降ふりしきる寒風に手燭は消えて真黒闇まつくらやみ。

文「誰だえ」

一向答えがありません。一生懸命ぎあくと寒水を浴びては

「南無大聖不……」

文「おい、誰か提灯ちようちんを持って来てくれ」

藤原が提灯を持ちまして袖そでに隠し、燈火の隙間すきまから井戸端いどばたを見

ますると、お浪なみが単物ひとえもの一枚たすきに襷たすきを掛け、どんどん水を汲くみでは

夫國藏くにぞうに浴せて居ります。國藏は一心不乱まなこに眼を閉じ合掌して、

「南無大聖不動尊、今一度お母上様はうえさまの御病氣をお助け下さり

ませ」

文「これ其処そこに居おるのはお浪じゃないか、國藏待て、その親切

は千万せんばかたじ辱けないが、まあく此処こゝへ来い、お浪や早く國藏に着

物を着せてやれ、森松、國藏夫婦は何時の間に来たのだ」

森「へえ、藤原様のおいでの少し前、いつもは蔵前の不動様へ  
まいるんですが、今夜は御門が締りましたそうで」

文「うむ、毎夜此の通りか、寒中といい況まして今夜は此の大雨  
に……國藏、お前の親切は千万辱けないがな、命数は人の持つて  
生れたものじゃ、寿命ばかりは神にも仏にも自由になるものじゃ  
アない、神様や仏様は人の苦しむのを見て悦びなざる筈はずはないが、  
人が物を頼むにも無理むり力ぢからを入れて頼んだからつて肯きくものでは  
ない、お前も同じ人に生れていながら、この寒さむ空ぞらに垢離こりなど取  
つて、万一身み体たに障さわつたら、それこそ此の上もない不孝じやない  
か、お前の親切は届おいて居る、もうく止としてくれよ」

## 四

文治は國藏夫婦の水垢離みづごりを諫いさめて居りますると、妻のお町が泣  
声にて、

町「旦那様ア、お早く〜」

文「なに、お母様つかさまが息を…」

と病間に駈戻り、

文「お母様、お母様、ほい、もういかんか」

町「お母様ア、お母様ア」

文「これ〜お町、そう泣なき悲かなしんでも仕方がない、もう諦め

ろ」

萱「伯母様え、伯母様え、もう是がお別れか、伯母様え」

藤「お萱、そう呼ぶものではない、文治殿、さぞく御愁傷でござりましょう」

文「いや永い御苦勞を掛けました、あゝ何うも、思えば私も不孝を尽しましたなア」

お町を始め一同顔を揃えて言葉もなく、鼻詰らして俯向く折から、表の方で慌だしく、

「森松々々」

森「おうい、豊島町の棟梁か」

これは亥太郎という豊島町の棟梁でございます。

亥「おゝ亥太郎だ」

森松が立つて戸を明けますると亥太郎は息急いきせきながら、

亥「森松、お母ふくろさま様は」

森「たつた今……」

亥「えッ、亡なくなりなすつたか、道理で新しい草鞋わらじが切れて変だと

思った、えゝ間に合わなかつたな」

森「昨日きのうからむずかしいから、お前さんの所へ知らせに往いくと

な、今朝早く成田へ立つたと云うことだから、こいつア必てつきり定お

百度だろうと後あとから往こうか知らんと思つたが、家うちが無ぶにん人で困つ

ているのに何なんほ信心だからと云つて、出先から成田へ往つたら又

旦那に叱られるだろうと、こう思つて止したのが結句幸いであつ

た、今も國藏くにい兄が成田様の一件で小言まじりに一本やられたところだ」

亥「己おら了な、昨夜ゆうべの内にお百度を済まして、何どうやら気が急せか  
れるから、今朝はやだち早立にして、十八里の道を急ぎ急いでもう些ちつと  
早くと思つたが、生憎あいにくの大雨で道も撈取はかどらず、到頭とうとう夜半よなかにな  
つちまつた、あゝ何うも胸がドキ／＼して気が落着かねえ、水を  
いっぺえ  
一杯くれねえか」

森「おゝ気の付かねえ事をした」

文「やア亥太郎殿か、成田へお出で下すつたそうで、母のため  
に毎いっも変らぬ御親切、千万辱けのう存じます、母も只たつた今往生い  
たしました、さア何どうか直すぐに奥へ往つて見てやつて下さい」

亥「え、皆様御免なせえ、え、お母様ふくろさま、なぜ私わっちが……旦那御免なせえよ、こんな時にやア何なんと挨拶あいさつして宜いいのか私わっちにやア分わねえ」

藤「これは亥太郎殿、藤原喜代之助でござる、あなたの御親切で伯母も誠に宜よい往生を致なしました、人の寿命なばかりは何なんとも致なし方がありません」

亥「旦那御免なせえ、私わっちやア物心をおぼえて此この方かた、涙といふものア流したことが無なえんですが、いつぞや親子てえものは斯こうく、いうもんだと、此方こちらの旦那に意見いされてから、此の間親父の死んだ時にやア思しわず泣なきました、今日で二度目にでござんす、御免わねえ」

とわツくと泣出しました。時に文治は、

文「いつも変らぬ御親切、有難う存じます、さぞお腹が減りま  
したろう」

亥「なアに、さしたる事ありません」

文「お昼食は何方でやって来なすつたね」

亥「なアに昼食なんざア、実は十八里おつ通しで」

文「やツ、それはく昼食も喰べずに十八里日着とは、何うも

恐入りましたなア」

亥「云われて始めて腹が減った、そんなら森松、握飯でも呉れ

や」

森「さア大変だ、昼間からの騒ぎで飯を炊くのを忘れたア」

町「いゝえ、私が炊いて置きましたよ、さア亥太郎さん召上れ」  
 亥「こりやア勿もつたい体ねえな、やい森公、貴様は相変らず馬鹿だ  
 な」

森「こりやア己の十七番だ」

亥「それも違つてらア、馬鹿野郎」

それから手を分けて仏の取とり片かた付づけをいたしまして、葬式はいよ

く明後日と取極めました。藤原喜代之助は明日御登城のお供が  
 ありますから、夜よの中うちに屋敷へ帰りまして、翌朝重役へ、

藤「明日お供を致します筈でござりますが、親しんせき戚せきに忌中これ  
 あり、如何いかゞ致さしましょうや」

と伺い出でますと、何どういう都合でござりますか、藤原は明

後日葬式を菩提寺まで見送ることが出来ませんので、その翌晩通夜をいたし、翌早朝葬式を途中まで見送つて、自分は西丸下へ帰り、お葬式は愛宕下青松寺で営みまして、やがて式も済みましたから、文治は※※のまゝ愛宕下を出まして、亥太郎、國藏、森松の三人を伴い、其の他の見送り人は散り／＼に立帰りました。丁度江戸橋へ掛つてまいりますと、朝の巳刻頃でございませうが、向うから友之助が余程の重罪を犯したものと見えて、引廻しになつてまいります様子、これは友之助の罪状が定つて、小伝馬町の牢屋の裏門を立出で、大門通から江戸橋へ掛つてまいりましたので、角の町番屋にて小休みの後、仕置場へ送られるのでございます。

## 五

文治が先に立つて江戸橋へ向つて参りますと、まつさき真先にかみのほ紙を立て、り幟すてふだを立て、り續いて捨札すてふだを持つてまいりますのは、云わずと知れた大罪人をお仕置場へ送るのでございます。文治は何気なく正面から罪人を見ますと、まご紛う方かたなき友之助ですから、はて不思議と捨札を見ると、「京橋銀座三丁目当時無宿友之助二十三歳」と記してありまして、「右の者さ去んぬる六月十五日日本所北割下水大伴蟠龍軒方へ忍び込み、同人舎弟を始め外ほか四人の者をせつがい殺害致しそうろうものなり候者也」と読むより、左さなきだに義氣に富みたる文治、血

相を変えて引廻しの馬の前に寄付きよりつ、罪人の顔を見ますと、今度

は俯向うつむいていまして少しも顔が見えませんが、友之助に相

違ありませんから、文治は麻あさがみちも※※「#」は「なが」は底本では「なだ」と誤記

長

大

小だいしようのまゝ馬の轡くつわに飛付く体ていを見るより附添つきそいの非人ひにんども、

「やいゝ何を為しやがる、御用だゝゝ」

亥「やい乞食こじきめら、静かにしろえ」

非「やア豊島町のがむしやらだぜ」

と怯ひるんで居りますところへ、与力が馬上にて乗付けまして、

与「これゝ其ほうの方は何をなするのか、御用だ、控えろ」

と制する言葉いきおいに勢を得て、非人どもが文治つぎのを突退つぎのけようと致し

ますると、國藏、森松の兩人が向う鉢巻かたはだぬ、片肌脱かたはだぬぎ、

兩人「この乞食め、何を小癩こしやくなことを為しやがる、ふざけた事をすると片ツ端ぱしから打殺ぶちころすぞ」

さア江戸橋魚市うおいちの込合こみあいの真最中まつさいちゆう、まして物見高いのは江戸の習い、引廻しの見物山の如き中に袴着かみしもけたる立派な侍が、馬の轡ゆんでに左手を掛け、刀の柄つかへ右手を掛けて、

文「さア一步も動かすことは成らぬ、無法かは知らぬが、此の友之助は決して罪人ではない、その罪人は此の文治だア」

与「これなんく何なんであろうと此の通り当人が白状の上、罪の次第が極きまつたのじゃ、今となつては致し方がないわ、其処そこ退ひけツ」

文「いかさま無法ではござるが、狂人ではござらぬ、一寸ちよつとも放すことは出来ませぬ」

と七人力の文治が引留めたのでございませぬから、如何とも致し方がございませぬ。馬上なる友之助は何事か夢中で居りましたが、暫くして漸くようや我に返りまして、

友「え、旦那様でござりますか、お久しくござります」

文「友之助、よく生きていてくれたなア、貴様が此の様な目に逢うとは夢にも知らなんだ、さぞ難儀したろうな、此の文治は自分の罪を人に塗付け、のめく生きて居おるような者ではないぞよ、目指す相手の蟠龍軒を討洩らし、心当りを捜す内、母の大病に心を引かれ、今日きようまで惜おしからぬ命を存ながらえていたが、もうお母様つかさまを見送ったからにやア後あとに少しも思い残すことはない、此の上は罪に罪を重ねても貴様を助けにやア己おれの義理が立たない、さアお役や

くにんしゆ  
 人衆、お手数てかずながら此の文治に繩を打つて、友之助と共に奉行

所へお引立て下せえ、それとも乱暴者と見倣みなし此の場に切捨てる  
 というお覚悟なら、遺憾ながら腕の続く限り根限りこんお相手致しま  
 す、如何いかに御処分下さるか」

と詰寄せます。橋の上から四辺あたりは一面の人立ひとだちで、往来が止  
 つてしまいました。

甲「こゝは往来だ、何を立っていやがるのだえ、さアく歩け  
 歩け」

時に亥太郎國藏の両人口を揃えて、

「静かにしろ、ぐずくすると打殺ぶちころすぞ」

野次馬「やア豊島町の乱暴棟梁だ、久しく見掛けなかつたが、

また始めたぞ」

流石さすがの与力も文治と聞いて怖気おじけつ付き、一先ひとまず文治と友之助の両

人を江戸橋の番屋へ締込みましたが、弥次馬連は黒山のようでございます。表に居りました亥太郎、森松、國藏は躍起やつきとなつて、

「此奴こいつら何が面白くつて見に来やがった、片ツ端から将棋倒しにしてしまふぞ」

と有ありあわ合せたる六尺棒をぐんぐんと押振廻おつぷりまわして居ります。飯

の上の蠅はい同然、蜘蛛くもの子を散らしたように逃げたかと思つと、また集つてまいります。其の中うちに与力の家来は斯かくと八丁堀へ知らせ、また一方は奉行所へ訴えますと、諸役人も驚いて早速駈付けました。時に表に居りました亥太郎、國藏、森松の三人は自身番

へ這入りまして、

亥「え、お役人様、蟠龍軒の屋敷へ踏込んで四五人の者を殺したのは私です、何うぞ私を縛っておくんなせえ」

森「亥太郎兄か、そんな事を云つちやア困るじゃねえか、お役人様、そりやア私の仕業で」

國「馬鹿をいうな、お前たちは此の騒ぎで血迷うたか、己がやツつけたんだ」

文「一同静かにしろ、兎も角も御用の馬を引留めました乱暴者は私でござります、お手数ながらお引立の上、その次第を御吟味下さいまし」

出張の役人は文治を駕籠に乗せ、外一同は腰繩にて、町奉行石

川土佐守 役宅へ引立て、其の夜は一同仮牢かりろうに止め、翌日一人  
 々々に呼出して吟味いたしますると、何れも私が下手人でござる、  
 いや私が殺したのでござると強情を云いますので、誰が殺したの  
 かさっぱり分らぬように成りました。取敢えず文治には乱暴者と  
 して揚屋入あがりやいりを仰付けおおせつ、其の他の者は当分仮牢留置とめおきを申付け  
 られました。

六

さて明治のお方は、昔の裁判所の模様は御存じありますまい  
 が、今の呉服橋内うちにありまして、表から見ますと只の屋敷と少し

も変つた処はありませぬ。只だ窓々に鉄網かなあみが張つてあるだけの事、また屋敷の向う側の土手に添うて折曲おりまがつた腰掛こしがありまして、丁度白洲しらすずの模様は今の芝居しげのよう、奉行うしろの後には襖ふすまでなく障子はまが箝はまつていまして、今の揚弓場ようきゆうばのよう、横に細く透といていゝる所ところがあります。これは後うしろから奥おくの女中方のぞが覗のぞく処ところだと申しませぬが、如何いかゞでございませうか。白洲には砂利すざりが敷敷いてあつて、其の上ひさしは廂もつを以もつて蔽おほい、真中まんなかは屋根無なしでございませぬ。正面むしろに蓆むしろの敷敷いてある処ところは家主いえぬし、組合くみあひ、名主なぬし其そのの外引ほかひきあひ合あひの者ものが坐すわる処ところでございませぬ。文治ぶんぢは今日けふお呼よび出しになりまして、奉行うしろ石川土佐いしかわとさ守御しゅご自身の御吟味ごぎんみ、やがてシツしつくくという警蹕けいひつの聲こゑが聞きえますと、正面むしろに石川土佐守肩衣かたぎぬを着きかけて御出座ごしゆざ、その後うしろにお刀さきを捧た

げて居りますのはお小姓でございます。少しく下さがつて公用人が麻袴で控えて居ります。奉行の前なる畳の上に控えて居りますのは目安めやすかた方の役人でありまして、武士は其の下の敷台の上に麻袴大小なしで坐るのが其の頃の扱いでございます。一座定まつて目安方が名前を讀上げますと、奉行もまた其の通り、

奉「本所業平橋当時浪人浪島文治郎、神田豊島町惣兵衛店亥太郎、本所松倉町源六げんろくたな店國藏、浪人浪島方同居森松、並に町役人、組合名主ども」

と、一々呼立て、後のち、

奉「浪島文治郎、其の方儀去さんぬる十二月二十一日、江戸橋に於て罪人友之助引廻しの際、一行を差止め、我こそ罪人なりと名告なの

り出で候う由なるが、全く其の方は数人の人殺しを致しながら、  
 今日まで隠れいるとは卑怯な奴じゃぞ、併し上に於ては吟味の  
 末、友之助が自身白状致したに依つて、仕置を申付けた次第であ  
 るぞ、上の裁判に一点の曇りは無いわ、何故今日となつて左様な  
 事を申出でたか、徒らに上を弄ぶに於ては其の分には捨置かん  
 ぞ」

文「恐れながら文治申上げます、不肖なれども理非の弁えはご  
 ざいます、お上様を弄ぶなどは以ての外ほかの仰せでございます、  
 かく申す文治、捨置きがたい仔細あつて蟠龍軒を殺害せつがいいたすの  
 覚悟にて、同人屋敷へ踏込み候ところ、折悪しく同人を討洩らし、  
 如何にも心外に存じ候ゆえ、一時其の場を遁れ、たとい何処の果

に潜むとも、おのれ汝生かして置くべきや、無念を霽はらして後訴のちえ出で  
 ようと思ひ居ります内、母の大病、めゝしくも一日々々と看病に  
 其の日を送り、命数尽きて母は歿みまかりましたゆえ、今日母の葬式を  
 済まし、ひとなか一七日経ちたる上は卑怯未練なる彼の蟠龍軒を捜し出  
 して、只一打ひとつうちと思ひ詰めたる時こそあれ、どういう了簡で濡ぬれぎ  
 衣ぬを着たかは存じませぬが、江戸橋にて友之助の引廻し捨札を  
 見れば、斯こうく云々うんぬん、よしや目指す敵は討ち得ずとも、我に  
 代つて死罪の言渡しを受けたる友之助を助けずば、武士の一分いちぶん  
 相立ち申さず、お上へ対し恐おそれ多おほい事とは存じながら、かく狼ろ  
うぜき藉いたし候段、重々恐入り奉ります、此の上は無実の罪に伏ふく  
 たる友之助をお助け下され、文治に重罪を仰おおせつ付け下さいますよ

う願ひ奉ります」

奉「フウム、然しからば其の方が……」

時に横よこあい合より亥太郎「恐れながら申し上げます」

役人「控えろ」

亥「えゝ、こりやア私わっちの……」

役「黙れ」

亥「控えろたつて残らず私の仕業で」

役「控えろと申すに何を寢言を申す」

亥「だつて皆みんなな己が為したんでえ、お奉行様、この亥太郎を御処

分下せえ」

國「恐れながら國藏申上げます、その六月十五日夜は私わしが切込

みまして殺したのでござんす、何うぞお仕置き下さいますよう」

森「兄イ、何を云うんだ、蟠龍軒の家へ切込んだのは誰でもねえ、この森松がやつつけたんで」

亥「やい、森松、國藏、何を云やがる、お奉行様、此奴らア気が違つたんです、私に相違ございません」

役「其の方ども控えろ控えろ」

つくばいの同心は赤房の十手を持って皆々の肩を突きまし

たが一向に聞入れませぬ。お取上げがないので三人とも立上つて頻りに罪を背負おうと焦つて居ります。時に文治が、「これ一同静かにしろ」と睨み付けられてピタリと止つて、平蜘蛛のようになつて居ります。

文「恐れながら文治申上げます、此の者どもが御場所柄をも弁  
 えおおごえず大お声ごえに罪を争います 為て態いたらく、見るに忍びず、かく申す文  
 治までがお奉行職の御面前にて高こうせい声せいを発したる段重々恐れ入り  
 ます、尚なお此の上いちごん一言ごん申し聞けとう存じます故、御免を願ひ奉  
 ります」

奉「ウム」

文「これ一同よく承まわれ 一いちにん人ならず三四人を一時いちじに殺すと  
 いうは剣法の極意ごくいを心得て居らんければ出来ぬことじゃぞ、技倆わざ  
 ばかりではなく、工夫もせねばならぬ、まして夏の夜よの開放あけはなし、  
 寝たというでもなし、さア貴様たちは何どうして切込んだか、その  
 申し口によつては御検視に御吟味をお願い申そうが、何うじゃ」

森「何うでも斯うでも其の時ア夢中でやツつけた」  
 と臆おくめん面もなく自分の身に罪を引受けようと云う志は 殊しゆしやう勝しやう  
 なものでございます。

七

文治は少しく声を荒あららげ、

文「これ森松、夢中で人が殺せるか、貴様の親切は辱かたじけないが、  
 人に罪を背負しようて貰もろうては此の文治の義理が立たない、控えてく  
 れ、お役人様、恐れながら申上げます、全く此の文治の仕業に相  
 違ちがひございませぬ、お疑たれいが有りますなら誰と誰を切りましたのか、

一々御吟味の程を願ひ奉ります」

奉「亥太郎、森松、國藏、其の方どもが上かみを偽る段不届であるぞ、五十日間手錠組合預あずけを申付ける、文治郎其の方ことは吟味中あがりやいり揚屋入を申付ける」

左右に居ります繩なわとり取の同心が右三人へ早繩を打ち、役所まで連れ行きまして、一先ひとまず繩を取り、手錠を箝はめ、附添つきそいの家主五人組へ引渡しました。手錠と申しますと始終箝めて居おるように思おほしめ  
召ほす方もあるか知れませぬが、そうではございませぬ。錠の封印へ紙を捲まき、手に油を塗つてこれを外はずし、只吟味に出ます時分又自分で箝めてまいりますだけの事でございます。こゝに松平右京殿、御下城の折柄おりから駕籠訴かごそを致した者があります。これは御登

城の節よりかお退りさがを待つて訴える方が手続が宜しいからであります。お駕籠先の左右に立ちましたのはお簾すだれさき先すだれさきと申します御家来、または駕籠の両側に附添うて居りますがお駕籠脇かごわき、その後あとがお刀番でございませぬ、これは殿でんちゆう中ちゆうには御老中いえどと雖もお刀を佩さすことは出来ませぬ、只脇差ばかりでございませぬ。それ故お刀番がお玄関口にてお刀を預り、御退出の折に又これを差上げます為にまいりますので、事によるとお増ましども供と申して一二人余計連れてまいる事もございませぬ。其の昔、駕籠訴をいたします者は何いずれも身軽いでたに出立ちまして、お駕籠脇すきうかぎの隙を窺い、右の手に願書を捧げ、左手ゆんででお駕籠に縋すがるのでございませぬから、時に依ると簾を突つきやぶ破やぶることがございます。大概お簾先が取押えて、押えの者を

呼んで引渡してしまいましたが、屋敷へ帰りましてから其の書面は封の儘に焼棄やきすて、当人は町人百姓なれば町奉行へ引渡すのであります。実は願書は中を入替えて焼棄するのでございますから、御老中へ駕籠訴をするのが一番利き目めがあつたそうでございます。右京殿が御下城の折に駕籠訴を致しましたのは、料理店立花屋源太郎でございます。さて源太郎は隙うかゞを覗めつて右手に願書を捧げ、

源「お願いでございます、お願いでございます」

と呼よわりばながらお駕籠の簾に飛付きました。

供「それ乱心者が、願いの筋あらば順序を経て来い」

と寄つてたかつて源太郎を取押え、押えの侍に引渡してしまいました。右京殿は御帰邸のちの後、内々ないくその願書を御覧になりました。

て、

右京「これ、喜代之助を呼べ」

近習「はゝア、喜代之助殿、御前のお召でござる」

喜「はゝア」

右「喜代之助、近う進め」

喜「はゝア」

右京殿は四辺あたりを見廻し、近習きんじゆに向い、

右「暫く遠慮いたせ」

お人払いの上、喜代之助にお向いなされ、

右「喜代之助、そちを呼んだのは別儀ではないが、今日予が下城の節、駕籠訴いたした者がある、それは本所業平橋の料理屋立

花屋源太郎と申す者であるが、そちは浪人中業平橋辺に居ったそ  
うじやのうあの辺の事はよう存じて居ろう、いつぞや閑ひまの折に文  
治という当世に珍らしい侠客があると云ったのう、その文治と申  
す者は一体何どういう人間か」

喜「申上げます、彼は母の命の親とも申すべきもので、近年まれ稀  
な侠客でござります」

右「フーム、侠客か、一体文治の平生へいぜいの行状は何どんなものじ  
や」

喜「御意にございます、先ず本所にて面前にては申すに及ばず、  
蔭よびにても文治と呼よび棄すてにする者は一いち人にんもござりませぬ、皆文治  
様々々と敬うやんで居ります、これにて文治の人となりうやもを御推察を

願います」

右「して、そちの母の命の恩人と申すは」

喜「左様でござります、手前が浪人中、別に一文の貯たくわえあるでは無し、朝から晩まで内職をして其の日くくの煙を立てゝ居りました、それが為に手前は始終不在勝でございまして、家内の事は一切女房に任せて置きましたのが手前の生涯の過あやまち失でございませ、女房のお淺と申します者が、手前の居ります時はちやほや母に世辞をつかいます故、左程邪じゃけん慳な女とも思いませんのだが、不在を幸いに只たつた一いちにん人の老母に少しも食事を与えませず、ついには母を乾ほしころ殺そうという悪心を起して、三日半程湯茶さえ与えず、母を苦しめました」

右「フーム、世には恐ろしい奴もあるものじやの、そちは何か、内職から帰つてそれを知らなかつたのか」

喜「何なんとも恐入つた次第でございますが、母は当年七十四歳、手前などと違い余程覚悟の宜よい母でございまして、食を絶つて死のうという覚悟と見えまして、只病氣とのみ申し打うち臥ふしたまゝ一い言ちも女房の邪慳ごんなことを口外致しませぬ故、一向心付かんで居りました」

右「そちも不覚であつたの、それから何どう致した」  
と膝つを突き付け、耳そをぼだだと居まります。

喜代之助は其の当時の事を想い起したものと見えまして、口惜くやし涙に暮れながら、

喜「悪事というものは隠す事の出来ぬものと見えます、母は手前にさえ一言も話さぬ位ですから勿論もちろん隣家の者などに話す気遣いはございませぬが、何時いつしか隣家の者が聞付けて、お淺さんも邪慳な事をなさる人だ、あのような辛抱強い年寄を、何が憎くつて乾殺そうという了簡になったのだらう、お気の毒な事だ。と云つてお淺の不在を窺うかがい、親切にも粥かゆか何かを持参致しました所へ、生憎あいにくお淺が帰つてまいりまして、烈火の如く憤いきどおり、いきなり其の食器を取つて母の眉間みけんに打付け、傷を負わせました、其の時文

治殿は何処どこで聞付けましたか其の場に駈付けてまいりまして、義理ある親を乾殺そうとは人間業でない、此の様な者を生かして置いては此の上どんな邪慳な事を仕出来しでかすかも知れぬと云つて、お淺を取つて押えて口を引つ裂き……いや私わたくしが其処そこへ歸つてまいつて手討にいたしました」

右「ふうむ、文治が其の毒婦を殺したのか」

喜「いゝえ私が……」

右「おゝ其方そちか、それは何方どちらでも宜よい、文治という奴は余程義侠の心に富んだ奴と見えるな、定めし劍術の心得もあろうな」

喜「はい、真影流しんかげりゅうの奥許おくゆるしを得て居りまして、なか／＼の腕利うできでございます」

右「天あつぱれ晴な腕前じやの、それで七人力あるのか」

喜「御意にございます」

右「以前もとは堀家の浪人と申すが左様であるか」

喜「御意にございます」

右「よし／＼、それで文治の素すじよう性並びに日頃の行状は能く相

分つた、少し思う仔細があるから、内ない々々にて蟠龍軒と申す者の

素性及び行状を吟味いたすよう取計らえ」

喜「畏かしこまりました」

それから段々蟠龍軒の身の上を取調べますと、法外な悪党と

いう事が分りましたので、事細かに右京殿へ言ごんじよう上しよういたしまし

た。それと同時に此方こなたは文治の身の上、石川土佐守殿は再応文治

をお取調べの上、口証こうしよう爪印つめいんも相済みまして、いよく切腹を  
 仰せ渡されました。併しかし其の申渡し書には御老中お月番つきばんの御印  
 形が据すわらなければ、切腹させる訳にはまいりませぬ。町奉行石川  
 土佐守殿は文治の口こうき供きょうばかりではございませぬ、幾枚も一度  
 に持参いたしましたすると、正面に松平右京殿その外公用ほか人御着席、  
 それより余程下さがつて町奉行が組下くみした与力を従え、その口証を一々  
 読上げて、公用人の手許迄差出します。御老中はお手ずから印形  
 の紐ひもを解くのが例でございませぬ。其の紐の長さは一丈余もありま  
 して、紐の先を御老中が持つて居りますと、公用人が静かに印形  
 を取出して奉行に渡し、奉行がこれを請取うけとつて捺おすといおきてう掟おきてです  
 から中々暇が取れます。其の内にお退ひけの時計が鳴りますと、直ぐ

印形の紐を引きますから、捺しかけても後は次のお月番へ廻さなければなりません。それが為<sup>ため</sup>に命の助かつた例もございます。だん／＼捺してまいりまして愈々<sup>いよく</sup>文治の口供に移りますと、まだ公用人が手を掛けませぬ内に御老中が頻りに紐を引きますので、奉行は捺することが出来ませぬ。再びお印形をと心の中に促しながら公用人の顔を見ますと、公用人も不思議に思いました御老中のお顔を見上げました。けれどもお駕籠訴の一件がありますから、右京殿は不興<sup>ふきようげ</sup>氣に顔を反<sup>そむ</sup>けて居りますので、何が何だか一向訳が分りませぬ。暫く無言で睨<sup>にら</sup>み合つて居ります内に、ちん／＼とお退のお時計が鳴りました。右京殿は待つていたと云わぬばかりのお顔にて印形を手許に引寄せ、其の儘すつとお立ちに相成り、

続いてお附添一同もお立ちになりました。余儀なく奉行も涉々立  
 帰りましたが、何故なにゆえに御老中が斯か様な計けいらいをするのか一向分り  
 ませぬ。何か仔細ある事と土佐守殿も智者ちしやでございますから、其  
 の後外御老中のお月番の時は、文治の口供を持ってまいるのが見  
 合せまして、又々右京殿お月番の時に、前の如く文治の口供を持  
 参まゐりましたすると、矢張前の通り手間取つて居りますので、到とうと  
 頭う印形を捺おすことが出来ませぬ。はて不思議な事と処分に困つ  
 て居りますと、時のお月番右京殿より、「浪島文治郎事業こと平文治  
 儀は尚なお篤とくと取調ぶる仔細あり、評定所ひようじょうしょに於おいて再吟味おおせ  
 付つくる」という御沙汰になりました。この評定所と申しますが、  
 は、竜たつの口の壕ほりに沿なまこかべうて海鼠壁なまこかべになつて居おる処でござい  
 ますが、

普通のお屋敷と格別の違いはありません。これは天下の評定所でございませぬ。これは天下の評定所でございませぬ。御老中は勿論將軍家も年に二度ぐらいはお成なりになるといふ定じょうれい例れいでございませぬ。即ち正面すなわの高座敷たかざしきが將軍家の御座所でございまして、御老中、若年寄わかどしより、寺社奉行、大目附おおめつ、御勘定奉行ごかんじょう、郡奉行こおり、御代官並びに手代てだい其の外与力に至るまで、それ／＼席を設けてあります。業平文治が数人の者を殺しながら、評定所に於て再吟味になると云うのは全く義侠の徳でございませぬ。

月番御老中を始め諸役人一同列座の上、町奉行石川土佐守殿がお係でございまして、文治を評定所へ呼込めという。

同心「当時浪人浪島文治郎、這入りましょう」

と白洲の戸を明けて、当人の這入るを合図に又大きな錠を卸しました。文治は砂上に畏まって居りますと、町奉行は少し進み出でまして、

奉「本所業平橋当時浪人浪島文治郎、去ぬる六月十五日の夜同所北割下水大伴蟠龍軒の屋敷へ忍び込み、同人舎弟なる蟠作並びに門弟安兵衛、友之助妻村、同人母崎を殺害いたし、今日まで隠れ居りしところ、友之助が引廻しの節、自分の罪を人に嫁するに忍びず、引廻しの馬を止め、蟠龍軒の屋敷に於て数人の家人を

殺害いたしたるは全く自分の仕業なりと、自訴に及びたる次第は前回の吟味によつて明白であるが確しかと左様か」

文「恐れながら申上げます、再応白白いたしましたる通り全く文治の仕業に相違ごございませぬ」

奉「うむ、何なんらの遺恨あつて切殺したか其の仔細を申立てえ」

文「申上げ奉ります、大伴蟠龍軒なる者が舎弟蟠作と申し合せ、出入町人友之助を語らい、百金の賭碁を打ち候由、然しかるに其の勝負は予かねて阿部忠五郎と申す碁打と共謀して企たくみたる碁でございませぬ、友之助は忽たちまち失敗いたしました、然しかし百両というは大金、即座に調ちようだつ達でも出来兼できかねます処から、予ての約束通り百両の金の抵かた当たに一時女房お村を預けて置きました、それから漸ようやく百両の金

を算段して持参いたし、女房と証文を返してくれと申入れました  
 処、その証文面の百めんという字の上に三の字を加筆いたし、いや百  
 両ではない、三百両だ、もう二百両持つて来なければ女房を返す  
 訳には行かぬと云つて、只百両の金を捲まきあ上げてしまひました、余  
 りの事に友之助が騙かたりめ泥坊めと大声を放つて罵りますと、門弟  
 どもが一同取つてかゝり、友之助を捕縛ほぼくして表へ引出し、さん／  
ようちやく打擲した揚句あげくの果はて、割下水の大溝おおとぶへ打込み、木刀を以もつて  
 打つやら突くやら無慙むざん至極な扱い、その折柄おりから何十人という多く  
 の人立でございましたが、只氣の毒だ、可愛相だというばかりで、  
 もとより蟠龍軒の悪人なことは界限かいわいで誰知たれらぬ者もございませ  
 ぬ故、係り合つて後難こうなんを招いてはと皆逡巡しりごみして誰一たれいちにん人止め

る者もございませぬ、ところへ丁度わたくし私が通りかゝりましたから、  
 直ぐさま飛懸つて止めようかとは存じましたが。予て左様な処へ  
 口出しは一切いたしませぬと誓いました母と同道のこと故、急立せきた  
 つ胸を押おししず鎮め、急ぎ宅へ歸つて宅の者を見届つかに遣わしましたる  
 所、以前に弥増いやす友之助の大難、最早すてお棄置き難しと心得、早速蟠  
 龍軒の屋敷へ駈付け、只ひたすら管詫入り、せめて金だけ返してやつて  
 くれと申入れましたる所、私に對して聞くに忍びぬ悪あつこうぞうごん口雑言、  
 其の上門弟ども一同寄つて群たかつて手当り次第に打擲いたし、今で  
 も此の通り痕あとがございますが、眉間みけんに打うちきず疵を受けました、其の  
 時私は蟠龍軒を始め一同の者を打うちはた果そうかとは思いましたが、  
 予て母の意見もあります事ゆえ、無念を忍んで其の儘帰宅いたし

ました、然しかる処母が私の眉間の疵を見まして、日頃其方そちの身体は  
 母の身体同様に思えと、二の腕に母という字を入いれずみ墨して、あれ  
 程戒めたのに、何故眉間に疵を負うて来たかと問詰いちごめられて一  
 言んの申訳もございませぬ、母の身体同様の此の身に疵を付けて  
 は第一母に対して申訳なく、二つには彼あのような悪漢を生け置く  
 時は、此の後のちどのような悪事を仕出来しでかすかも知れぬ、さぞ町人  
 方が難渋するであろうと思ひますと、矢も楯たても堪たまらず、彼等の命  
 を絶つて世間の難儀を救うに若しかずと決心いたし、去さんぬる十五日  
 の夜、御法度ごはつとをも顧かえりみず、蟠龍軒の屋敷へ踏ふんご込み、数人の者を殺せつが  
 害いいたし候段重々恐入り奉ります」

奉「蟠龍軒が悪人ならば上かみに於て成敗いたす、悪人だから切殺

したと申すは言訳にはならぬぞ」

文「恐入ります、言訳にならぬは承知の上、如何様とも御処分  
を願います」

奉「其の夜如何致して忍び込み、如何にして殺害いたしたか、  
詳しく申立てえ」

文「其の夜の丑刻頃庭口の堀に飛上り、内庭の様子を窺い  
ますると、夏の夜とてまだ寝もやらず、庭の縁台には村と婆の両  
人、縁側には舎弟の幡作と安兵衛の兩人、蚊遣の下に碁を打つて  
居りました、よつて私は突然女ども兩人を切らば、二人の奴ら  
が逃げるであろうと斯う思ひまして、心中手順を定め、堀よ  
り下り立ち、先ず庭に涼んで居りました村と婆を後へ引倒し、逃

げられぬように手早く二人の足に一刀を切付け、それから縁側の  
兩人を目がけて其の場に切伏せ、当の敵たる蟠龍軒は何処いずくにあり  
やと間まご毎々々々を尋ねますと、目指す敵かたきの蟠龍軒は生憎あいにく不在と承  
知いたし、無念遣やる方かたなく手向う門人二三を打懲うちこらし、庭に残し  
て置きました村と婆を切殺して其の儘帰宅致しました、このお村  
という奴は顔に似合わぬ毒婦にて、二世にせを契つた夫友之助を振捨  
て、蟠龍軒と情じょうを通じて、友之助を亡なき者にせんと企たくみたる女  
でございます、いつぞや私を取つて押え、痰たんまで吐きかけた恩知  
らず、私の遺恨とは申しながら、今に残念に思うて居ります」  
と、一点の澱よどみもなく滔とう々と申立てました。

十

時に石川土佐守殿、

「其の方の心しんてい底はよう相分つたが、左様の義侠心を持ちながら何故其の場を逃にげ退きしぞ」

文「恐れながら申上げます、逃げたとはお情ないお言葉でござります、たとい敵かたきの片割かたわれ数人を切殺すとも、目指す敵の蟠龍軒を討洩らし、其の儘相果て申すも残念至極でござります故、瓦をめぐり草の根を分けても彼を尋ね出し、遺恨を霽はらした其の上にて潔く切腹いひぎよいたそうか、斯かくては卑怯ひきようと云われようか、寧いっそ此の場で切腹いたそうかと思案にくれて居りますところへ、何処どこで聞

付けましたか下男森松が駈付けまして、母の大病直ぐ帰るようにと急立せきたてられて、思わず帰宅つかまつしました、ところが案外あんがいの大病、母の看護に心を奪われ、思わず今日こんにちまで日を送りましたる次第、心から女々しき仕打を致しました訳ではございませぬ、文治の心底、御推量下さらば有難き次第に存じ奉ります」

奉「ふうむ、確しかと左様か」

文「恐れながら一言半句いちごんはんくたりとも上かみを偽いつはりるような文治ではございませぬ、御推察を願います」

奉「うむ、同心、源太郎を引け」

同心「は、つ、業平橋 三右衛門店さんうえもんたな 源太郎、這入りませえ」

奉「源太郎、其の方儀、去る十四日御老中松平右京殿御下城の

折、手続きも履ふまずお駕籠訴申上げ候段不届ふであるぞ」

源「恐入ります、併しかし手前は町人の事にて何なんの弁わえもきまございませぬが、何の罪もない者に重罪を申付くるといごう御法ほうがございましようか」

奉「黙こんにちち今日其の方に尋ぬるは余の儀ではない、友之助が北割下水にて重傷を負い、其の方宅へ持込まれたと云うは何月何日じや」

源「御意にございます、それは六月十四日の夕刻とおぼえて居ります」

奉「確しかと左様か」

源「はい」

奉「其の時浪島文治郎は其の方宅へまいったか」

源「はい、もう其の日の暮くれがた方かたでございましたが、急いで手前の宅へまいりまして、友之助は何処どこに居おるかと申しますから、奥に寝たきり正体もございませんと申上げますと、誠に気の毒な事をしたと申しながら奥へまいって、何どういう訳こんにちで今日こんにちあのような目に遇あつたか、事の概あらし略りゃくは聞いて来たが、一通りお前の口から聞かしてくれと申しまして、あの悪党の蟠龍軒が無慈悲な為され方を聞いて居りました、そう云う訳では聞き棄ずてならぬ、これから蟠龍軒の処へ往つて掛合かけあうて来ると申しますから、手前は彼あのような悪人にお構きいなさるなと強たつて止めましたが、日頃の御氣象、お肯入ききいれもなく其の儘おいでになりました、其の時は何うい

うお掛合をなすつたか知りませんが、遇つたら聞こうと思つて居りますと、其の翌晩、蟠龍軒の屋敷に四人の人殺しがあつたといふ評判、只今承われれば文治様の仕業だと申す事ですが、全く蟠龍軒の屋敷の者を斬殺ざんさつしましたのは、諸人しよにんの為でございませぬ、何卒お命だけはお助け下さいますようお願い奉ります」

と文治のあさましき姿を見ては、水みづ漬つばななを啜すつて居ります。

奉「それに相違ないな」

源「御意にございませぬ」

奉「文治郎、源太郎、追つて呼出すゆえ神妙に控え居おろうぞ」

同心「立ちませえ」

是にて吟味落着致しまして、諸役人評定の上、文治儀は死罪一

等を減じて、改めて遠島を申付けるといふ事に決定いたしました。総じて罪人に仕置を申し渡しますのは朝に限ったものですが、尤も牢名主へは其の前夜、明日は誰々が御年貢といふことを知らしたものでございます、そうすると牢名主の指図で、甲の者がお召になります時は、外の罪人二人と共に髪を結わせ湯を使わせますから、事実誰がお召出しになるのか分りませぬ。銘々慾がありませんから自分であるまいと思つて居ります。さア其の日の朝になりますと、当人へ今日お年貢といふ事を申し聞けるや否や、すぐ切繩きりなわと申しまして荒繩で縛つて連れて行かれるのでございます。此の時は何様な悪人でも、是が此の世の見納めかと萎れ返らぬ者はありません。其の昔罪人は日本橋を中央として、東国の者な

らば小塚原へ、西国の者ならば鈴ヶ森でお仕置になりますの  
 が例でございませう。で、鈴ヶ森へ往く罪人ならば南無妙法蓮  
 華經、また小塚原へ往く罪人ならば牢内の者が異口同音に南無  
 阿弥陀仏を唱えて見送ったそうでございませう。さて文治遠島の次  
 第は重役は勿論、右京殿家来藤原喜代之助も其の前日聞知しまし  
 たが、当番の都合にて直ぐ様文治の留守宅へ知らせる事が出来ま  
 せぬ。漸く其の日の夕方文治の宅へまいりまして、

喜「え、頼みます」

町「はい……おや藤原様でございませうか、さア何うぞお上り下  
 さいまし、まア暫くでございませう、何うぞ此方へ」

喜「存外御無沙汰いたしました」

町「手前の方でも御存じの通り種々いろく心配がございますので、

思いながら御無沙汰いたしました」

という声も涙声、母には死なれ、頼みに思う夫は揚屋あがりや入り、後あとに残るのは其の身一人ですから、思えばお町の身の上は気の毒なものでございます。

十一

喜代之助は云い出しにくそうに、

喜「さて、今日きょう参りましたのは、えゝ……いや、どうも誠に御無沙汰いたしました、就つきましては……」

町「もし藤原様、あなたは文治の事でお出いで下すつたのではございせんか」

喜「さゝ左様」

町「さア何どうなりました藤原様え……藤原様、文治が命に別状でもありはしませぬか、ねえ藤原様」

喜「いえ、お命に別条はござらぬが、只たゞ……」

町「藤原様、何どうぞお早く仰しやつて下さいまし、もし文治が遠島にでも……」

喜「左様、これが愈いよ々み明日ようになりました」

町「えッ、いよ〜……」

喜「はい」

と暫く二人は俯向うつむいたまゝ思案に暮れて居りましたが、やがて

お町は心を取直しまして、

町「藤原様え、明日みょうにちは何時頃いつごろ出帆しゅつぽんいたすのでございましてよ

う、たしか万年橋まんねんばしから船が出るとか承わりましたが左様でござい  
いますか」

喜「左様、あなたも嘸さぞ御心配なすつたでしようが、明日こそは

お目に懸れます、併しかわたくしし私はお役柄の御近習ごきんじゆゆえ、役目に対して

残念ながらお目に懸ることが出来ませぬ、あなたはお名残なごりのため

お出でなさいまし、御近所まで私が御案内いたしましょう」

町「はい、何どうも致し方がございません、一目ひとめ……えゝ、もう

止しましょうよ」

喜「そりやまた何故なぜですか」

町「何故あなたつて貴方、叱られますもの」

喜「あゝ成程日頃の御気性をよく御存じでございませぬ、併しかし是が一生の……」

町「左様でございませぬ、会つて話は出来ませんでも、せめては……いや思い切りませう、事に依よると生涯離縁するなどと……もうく諦めませう」

と云う声さえも涙でございませぬ。

喜「それは御ごもつとも尤ともですが、併し……はてな、何どうしたら宜よかろうか知らん」

と俱ともに涙に暮れて居りますと、表ほうの方に

「お頼み申します」

町「はい、何方どなたで……おや亥太郎さんでございますか、さアお上りなさいまし」

亥「えゝもう此処こゝで宜よろしゆうござります、御新造ごしんぞ様永々お世話になりましたが、明日私あしわやア遠方あちへまいります、また長ながえことお目にかゝれません、へえ、ご、ご御機嫌よう、左様なら……」

町「あゝもし亥太郎さん、まアお待ちなさい」

亥「えゝ、もう」

町「まアく、少しお待ちなさい、お顔色もお悪い様子で、何か変事でもございますか」

亥「いゝえ別に」

また、表の方で、

「へえお頼み申します、國藏でございます」

亥「やア國藏か」

國「やア棟梁か、へえ御新造、御機嫌宜しゅうござんす、棟梁にも宜い処でお目にかゝりました、まア当分お目にかゝれませんから、随分御機嫌よう、へえ左様なら、お暇を……」

亥「おい／＼國藏待て、変なことを云うじゃねえか、己も実は此方へお暇に来たんだ、お前は何処へ往くのだ」

國「え、中々遠方でござんすまア当分お別れだ」

亥「手前は明日万年橋へ……」

と云いかけて暫く四辺を見廻し、

「國藏、貴様も遣<sup>や</sup>付ける積りか」

國「棟梁、お前<sup>めえ</sup>も」

亥「ウム、己も決心した」

國「そんなら頼もしい」

と眼と眼で示し合<sup>あ</sup>わして、

兩人「御新造様、御機嫌よう」

町「まあくお二人ともお待ちなさい、今<sup>いちご</sup>一言<sup>ご</sup>仰<sup>おつ</sup>やつた万年

橋<sup>はし</sup>というのは」

二人「実は命を棄てましても」

町「まあお二人とも」

喜「こらくお二人ともお控えなさい」

二人「これはく藤原様、お前めえさんのお蔭様で旦那も命が助かりました、有難うござんした、さア直ぐお暇致しましょう」

喜「まアお二人とも少しお待ちなさい、え、只今お二人がお蔭で旦那の命が助かりましたと仰しやつたが、その次第しだい柄は御存じで仰しやつたか」

亥「そんな事を知らねえで済みますものか、ねえ、いろくお前めえさんのお骨ほね折おりで助かつたこたア蔭ながら……なア國藏、お礼を申さねえ日は無ねえなア」

喜「それほど文治殿の助かつた事を喜びながら、その文治殿に恥を搔かせる積りかな、それとも殺す気かな」

亥「こりやア妙な事を仰しやいますねえ、旦那を殺すの恥を搔

かせるのとは何なんのことでござんす、此方こちとらア自分の命を棄て、  
も旦那を助ける覚悟だ、又一旦思い込んだ事こたア一寸も後あとへ退ひかね  
え此の亥太郎でござんすぜ」

喜「然しからばお前さんは其の恩人の文治殿を、明日みょうにちの遠島船  
の出帆の場に切込み、同人を助け出して上州じょうしゅうあたりへ隠かくそう  
という積りでござろうな、それとも違ちがいましたかね、何どうでござ  
りますな、さア其の文治殿は悪人でござるか、乃至ないし泥坊どろぼうでござ  
るか」

亥「えッ旦那、妙なことを仰しやいますね、誰が悪人と申しや  
した、泥坊なんぞ為するような旦那で無なえと云うことは誰でも知っ  
てるじゃアござんせぬか」

喜「さア其<sup>そこ</sup>処<sup>こ</sup>です、文治殿こそは日<sup>に</sup>本<sup>っぽん</sup>に二三とあるまじき天<sup>あ</sup>  
つばれ晴<sup>は</sup>名<sup>な</sup>士<sup>し</sup>と心得<sup>こころえ</sup>ますが、何<sup>ど</sup>うでござるな、その日本名士が上州あ  
 たりごはつとの長脇差や泥坊が、御法度<sup>ごはつと</sup>を犯<sup>とが</sup>して隠<sup>かく</sup>れている汚<sup>よご</sup>れた国へま  
 いますか、よもや文治殿はそんな拙<sup>つたな</sup>い者<sup>もの</sup>ではありませんまい、よ  
 しまた往<sup>ゆ</sup>くとしても、生涯<sup>さんちゆう</sup>山<sup>さん</sup>中<sup>ちゆう</sup>に隠<sup>ひそ</sup>れ潜<sup>ひそ</sup>んで、埋<sup>うも</sup>れ木<sup>れぎ</sup>同然<sup>どうぜん</sup>に  
 世<sup>よ</sup>を送<sup>おく</sup>るような人物<sup>じんぶつ</sup>とは些<sup>ち</sup>と肌<sup>はだ</sup>が違<sup>ちが</sup>いましたようぞ、左程<sup>さほど</sup>逃げたき  
 文治殿ならば、友之助<sup>ともすけ</sup>が無実<sup>むじつ</sup>の罪<sup>つみ</sup>に服<sup>くわ</sup>したのを幸<sup>さい</sup>いに、のめく  
 と宅<sup>たく</sup>に居<sup>ゐ</sup>て知らぬ顔<sup>かほ</sup>をしていましょう、友之助<sup>ともすけ</sup>を助<sup>たす</sup>けようが為<sup>ため</sup>に  
 自<sup>みづか</sup>分の一命<sup>いちめい</sup>を差<sup>さ</sup>出して明白<sup>めいぱく</sup>に上<sup>かみ</sup>のお裁<sup>さい</sup>きを仰<sup>おほ</sup>ぐくらの名士<sup>めいし</sup>、そ  
 んな端<sup>はし</sup>たない者<sup>もの</sup>ではござりませんな」

と云<sup>い</sup>われて亥太郎<sup>がいだう</sup>と國藏<sup>くにぞう</sup>は眼<sup>まなこ</sup>ばかりパチく／＼や／＼居<sup>ゐ</sup>ります。

藤原喜代之助は尚なおも言葉を継いで、

「こゝで文治殿が一度逃出せば、生涯悪人の汚名を負わなければ成らぬ、そんなむずかしい事を云つても分りませんが、天てんも網恢うかい々疎そにして洩そらさず、其の内に再び召捕めしとられたら、いよく国こくちゆう中へ恥さくらを曝さらさなければ成りますまい、只今お町殿へ明あ日のことを申上げ、お別れに只たつた一目お逢いなされてはと申入れすましたが、文治殿の平常ふだんの氣象を御存じゆえ、此の場合未練がましく別れにまいつたら、定めし叱こらられましよう、お目に懸かりたいは山々なれども、ジツと堪こらえてまいりますまいと、流石さすがは文治殿

の御家内だけ……女ですら斯かよう様でありますのに、あなた方は只文治殿の事のみを思い、お心得違いをなさいましたなア、さア分りましたらお止とゞりなさい、如何いかゞでござるな」

これを聞きました兩人は頭を下げ、只男おとこなき泣なきに齒はぎしりして口もきかれませぬ。

喜「まだ御合ごがてん点てんなさいませんか」

兩人「それじやア旦那にお目にかゝる事は出来ませぬか」

喜「いゝえ、何どうしてあなた方も明日あしたは是非お見送りを願います、まさか私わたくしは役人でござるから、よし義の為にもせよ、一旦罪人と極きまつて遠島申付けられた者に逢うことは出来ませぬ、是非ともあなた方はお出で下すつて、私の申した事を文治殿へ宜しく申も

うしつた  
伝 えて下さい」

両「よく分りました、じやア仰せに従つて諦めましょう、けれども御新造様も私どもと一緒に、お別れに只た一目お逢いなせえまし、此の世の名残りに往かつしやるのに、何ほ御氣象の勝れた旦那だつて、人情を知らねえ事アありますめえ、何とも仰しやる氣遣はありやアしませんや、ねえ旦那」

喜「如何にも……就てはお町殿、せめて遠目でなりとも」

町「万年橋とやら申す橋より船までは余程離れて居りますか」

國「へえ、僅か半丁ばかりしか離れて居りません」

町「それでは其の橋の上から旦那の心付かぬように、余所ながらお別れいたしましょう」

喜「成程、それが宜よろしゆうござろう、各々おの／＼文治殿には見知られぬよう気を付けてやって下さい」

両「承知いたしました」

お話分れて、本所大橋向うの万年橋、正木まさき稲荷いなりの河岸かしは、流るざい罪人にんの乗船のりふねを扱つかいまする場所ばしょでござります。尤もつとも遠島とんしまと申し

ますのは八丈島、三宅島みやけしまにて、其の内佐渡うちざとは水搔みずかき人足にんそくと申しまして、お仕置うちの中なかでも名みやう目もくは宜よいのでござりますが、囚め人にんの身みに取とつては一番つち辛いつら処ところでありますから、滅多なげに長生ながいき

する者はございませぬ。今文治が遠島と極つりましたのは三宅島でございませぬ。いよく船が万年橋から出るといふ前夜まへよになつて、

親戚こきゆう故こ旧きゆうの人ひとに知らせますので、当日は親類縁者こきゆうは申すに及およば

ず、友人達は何れも河岸に集つて身寄の囚人を待受けて居ります。其の内に追々囚人が送られてまいります、中には歩けませんで畜に乗つて参る者もございます。文治は成るたけ人に逢わぬように、俯向いて目立たぬように小さくなつてまいりましたが、國藏が早くも見付けまして、

國「やア旦那々々」

文「國藏か、よく来てくれたな、皆んな達者で居るだろうな」  
 國「へえ、皆な達者ですが、旦那、何故私を代りにやってくれねえんです、やい森松、早くお町様をお連れ申せ」

文「こりや國藏何故に町を連れて来たか、此の姿を女房に見せて己に恥を搔かせるのか、此処へ連れて来ると女房も貴様も離縁

してしまふぞ、此の文治は予て切腹と覚悟して居つたところ、上  
 のお慈悲で助けられ、生恥いきはじを曝さらすことかとなるたけ人に姿を見  
 られぬよう心して来たのに、未練にもお前達まで集まつて此の文  
 治に恥の上塗うわぬりをさせる了簡か、近寄ると生涯義絶するぞ」

國藏びつは恟り驚いて、

國「何時いつに変わらぬ旦那の氣象、悪い気で来たのじや無ねえから勘  
 弁して下せえ、やア森松、御新造を橋の上に置いて手前てめえばかり来  
 い」

森「だつてそりやア無理というものだ、御新造様、旦那があゝ  
 云つても生涯のお別れですから、彼處あそこまでお出でなせえ」

町「いゝえ、私わたくしは此處ここでお顔を拝見してお別れいたします、日

頃の御氣象はよう存じて居ります」

と橋の上にて手を合せたまゝ、声も出さず、涙一滴流しもせず、一心に夫の無事を祈つて居ります。森松は氣の毒に思ひまして、

森「御新造様、たとい叱られてもお側へ往つて一目お逢いなせえまし」

町「未練がましく近寄れば必ず離縁されるに相違ござりませぬ、  
私わたしやアそれが辛つろうございますから」

國「やア森松、もう時間が切れるぞ、早く〜」  
時に獄ごく丁ていの横目よこめと申す者が、

「さア〜限りはねえ、早くしろ〜、長くなると為に成らねえぞ」

と一々囚人を集めて居ります中に、ブウ〜という法螺貝の音、横「さア〜此奴らこいつア何時いつまで居やがるんだ」と追々囚人を引立て、船に乗込まして居ります。

十三

見送つて居ります國藏、森松の兩人は

「旦那ア、旦那ア、御新造を始め後あとのこたア御心配なさいますな」

と男泣に泣出す途端に亥太郎が駈付けてまいりまして、

亥「森松、國藏、旦那は何処どこに居るんだ」

國「あゝ亥太郎兄イか、旦那は彼処へ」  
あすこ

亥「ど、ど何処に」

森「もう船に乗つていらア」

亥「やア旦那、一寸待つて下せえ、遅かつた」  
ちよつと

役「これく控えろ、もう時間だ」

亥「時間も糸瓜もあるものか、ぐずくすると打殺してしま  
へちま  
ぶちころ

うぞ、誰だと思ふ、豊島町の亥太郎だぞ」

役「やアまた亥太郎めが来やがつたな」

亥「やかましい、旦那、何うも飛んだ事になりましたなア」  
ど

と鬼を欺く亥太郎も是が一生の別れかと、わツとばかりに泣出  
あざむ

しました。附添の同心も予て亥太郎の事は承知して居りますから、  
かね

同心「やア亥太郎が始めて泣きやアがったぜ、大きな口だなア、其の癖手放しで泣いて居やがらア、アツハ、ハ、ハ、さアくもう宜よかろう」

亥「え、未まだ何なんにも云やしねえ、ぐずくしやがると死者し狂にものぐるいだぞ、片ツ端から捻ひねり殺すからそう思え」

文「これく亥太郎殿、お上かみの御法を犯しては成りませんぞ、何事も是までの因縁と諦めて、随分達者にお暮しなさい」

亥「お前さんばかり口がきけて私わっちにやア少しもく、く、口がきけねえ、旦那、達者でいて下せえよ」

此処こゝへ大橋の方から前橋まえばしの松屋新兵衛まつやしんべえが駈付けてまいりまして、人ごみで少しも歩けませぬ、突退つきのけ撥返はねかえし、或あるいは打たれ

或は敲かれ、転がるように駈出しましたが、惜いかな罪人はあら  
 まし船に乗って、今一度の貝の音でいよく出帆するのでありま  
 す。新兵衛は大声を挙げて、

新「業平橋の旦那ア、業平橋の旦那ア」

役「これく静かにしろ、控えろ」

と突退けますので、此方から潜って往こうとしますると又突退

けられます。向うに亥太郎と文治の姿が見えながら近寄ることが

出来ませぬ。新兵衛はふと一策を案じて懐中から金入を取出し、

物をも云わず つかみだ「#」つかみだ」は底本では「つかだ」と誤記 出 しては横目

や同心に水向け致しまするが、同心どもは金の欲しいは山々なれ

ども、仲間 ちゆうげん や重役の前を憚 はゞか 顔と顔を見合せて居ります。

気が急せかれます故、新兵衛は突いきなり然いちぶぎん一分銀を一掴みパラ／＼と撒まきつ付けますと、それ金が降つて来たと、餓が虎この肉を争う如く金を拾わんと争う間を駈抜けて文治の前へまいりまして、

新「旦那様、お情ないお姿におなりなさいましたな」

文「新兵衛殿、ようお出で下された、かく成り果はつるも自業自得、

致し方がござらぬ、最早出帆の時刻、お役人にお手数てすうをかけては相済まぬから、早くお帰り下さい」

役「其ほうの方は何者じや、控えて居れ」

新兵衛はホロ／＼涙を流しながら、

新「旦那様、これが一生のお別れかと思うと、何どうも此の身体が……申上げたいことは山々ございますが、何から申上げて宜し

いやら……これはお餞別せんべつでござります、何うか御受納下さいませよう」

と五十両の小判を文治の懐中へ入れようと致します。側に居ります同心は一応検あらためて罪人に渡しまするが掟おきてでございますから、横よこ合あいから手を出して取ろうと致しますると、亥太郎が承知いたしませぬ。

亥「やい同心、刃物や火道具じゃア有るめえし、引ひツ奪たくるには及ぶめえ、何なんだと思おもう金じゃアねえか、さア己おれが検おれめて見せてやろう、此の通りだ、何も不都合はあるめえ、旦那、お懐ふところへ入れませよ」

文「新兵衛殿、何よりのお餞別、何時いつに変わらぬ御親切、御恩誼ごおんぎ

は決して忘却致しませぬ」

と言葉の切れぬ中うちに法螺貝ほらがいの音ブウくく。文治が船に足を掛けるや否いなや、はや船は万年橋の河岸を離れました。船中に居ります罪人は何いずれも大胆不敵くせものの曲者くせものでありますが、流石さすがに面おもてに一種うれいの愁いを帯おび、総立そうだちに立上りまして、陸おかを見上げる体ていを見るより、河岸おに居る親戚故旧の人々はワツくくと声を放つて泣叫ぶ。その有様さながかなえは宛さら鼎なべの沸わくが如く、中にもお町は悲哀胸に迫つて欄干つかに掴つかまつたまゝ、忍しのび泣なをして居ります。さて三宅島は伊豆七島うちの中でありまして、最も罪人の沢山たくまいる処ところであります。先まず島へ船が着きますると、附添つぎの役人むらだいじんは神着村かこうづきむら大尽だいじん佐治右衛門さじうえもんへ泊るのが例でございます。此の島は伊豆七島の内で横よこ縦たて三里、

中央に大山おおやまという噴火山がありまして、島内は坪田村つぼた、阿古村あこ、神着村、伊豆村、伊ヶ島村の五つに分れ、七寺院ありて、戸数千三百余、陣屋は伊ヶ島に在りあまして、伊豆国いずのくに韭山郡にらやまぐんだい代官だいかん太郎左衛門ろうざえもんの支配、同組下五ヶ村名主兼勤けんきんの森大藏もりだいぞうの下役したやく頭ら平林勘藏ひらばやしかんぞうという者が罪人一同を預かり、翌日罪状と引合せて、それ／＼牢内に入れ置く例でございます、文治を乗せたる船が海上つゝが恙なく三宅島へ着きますると、こゝに一条の騒動しゆつ出来たいの次第は次回に申上げます。

## 十四

護送役人の下知げじに従いまして、遠島の罪人一同上陸致しますと、  
 凶らずも彼方あなたに当りパツパツと砂すなけむり煙けたを蹴立あまたつて数多の人  
 が逃げて参ります。村方むらかたの家々にては慌あわて、戸を閉じ子供は泣  
 く、老人は杖つえを棄て、逃にげるといふ始末で、いやもう一方ひとかたならぬ  
 騒さわぎでございます。何事か知らんと一同足を止めて見ますると、  
 向うから罪人が四五十人、獲物えもの々々たずさを携たずさえ、見るも恐ろしい姿で、  
 四辺あたりに逃まどげ惑まどう老若男女ろうにやくなんによを打うちたく、蹴け飛ばとすやら、容易  
 ならぬ様子であります。中には刃物を持つて居おる者もあります。  
 此方こなたは数十人の役人、突つく棒ぼう刺さ又また鉄てつ棒ぼうなどを携たずさえて、取押とえ  
 ようと必死しにものぐるいになつて働いて居りますが、何しろ死者狂の罪人ども、  
 荒れに荒れて忽たちまち役人やくたも三四人打倒うちたおされました。一同何どうなる

ことかと顔を見合せて居りましたが、追々けがにん怪我人は増えますばかり、義氣に富みたる文治は堪え兼て、突いきなり然一本の棒を携え、黒くろろけむり

煙の如き争鬪の真只中まっただなかに飛込んで大音だいおんを挙げ、

文「まあく〜待て、何事かは知らぬが控えろく〜」

と仁王立におうだちに突立ちつったました。此の態ていを見るより先に立ちたる大

の男が、

「やい、汝わりやア何者か、邪魔をしやアがると打殺すぞ」  
うちころ

死者狂いの四五十人が異口同音に、「それた畳め、殺せ」とひしめ犇く勢いきまじい凄まじく、前後左右より文治に打ってかゝりました。

文「よし、拙せつしや者の止めるのを肯きかぬのか、さア来い」

と二打三打打合ふたうちみうちいましたが、予かねて一人でも打据うちすえる気はござ

いませぬ、受けつ流しつ数十人を相手に程よくあしらつて居ります。 「えゝ、こんな奴を相手に手間取るは無益だ」と一人の罪人は烈はげしく打合う其の中を搔かいくぐ潜ひそつて通り抜けようと致しますから、文治は飛退とびのきながら、その一人を引留め、「まあゝ待つた」と声を掛ける途端に、また其の他たの者が逃出そうと致しますから、飛鳥ひちようの如く彼方あなたへ駈あけ此方こなたに戻つて一々引留める文治が手練てだれの早業はやわざに、さしも死者狂の罪人も一步も進むことが出来ませぬ。隙すかさず文治は立直りまして大音を張上げ、

文「どういう訳でお前達こぞが挙こぞつて騒さわぎ立てるかは知らぬが、見れば喧嘩けんかのようでもなし、御法を破るからにやア何か仔細しじゆがあるう、何どうじゃゝゝ」

罪人「やい、汝わりやア何者だ、死者狂いの己おらを何故止めるか、ふざけやアがると其の分には棄置すておかねえぞ」

文「まアく静かにしろ、己おれはの、只たった今此の島に流罪の身になつて来た罪人だ、仔細を聞いた其の上で共々とも、味方になつてやろう、業平橋の文治という者だ」

と聞いて囚めしゆうど人は顔と顔とを見合せて、少しく怯ひるみました様子でございます。先に立ちたる二三の者は、

「やア旦那様か、始めてお目にかゝります、予かねてお名前なめえは聞いて居りましたがあなたが業平の旦那様ですか、道理で腕こてに応こたえがあると申した、仔細ほかというは外ほかでもない、少し訳があつて此の島の取締り役人を敲たたき殺し、一同死ぬ気でございます」

文「その又取締が如何いたした」

罪「日頃罪人一同の喰物の頭を刎ね、剩え年に二度か三度の

お祭まつりび日に娑婆飯しゃばめしをくれません、余り無慈悲な扱いゆえ、三人

の総代を立て、只管ひたすら歎願たんがんいたしました処が、聞入れないのみ

か、上役人かみやくにんの扱いに不服を唱えるとは不届ふとぎせんぼん千万な奴だと云

つて、その三人を庭の樹きの枝えだに縛り上げ、今日で三日半ほど日乾ひほし

にされて居ります、たとい悪党にもせよ其の三人を助けなきやア

浮世の義理が立ちません、何うぞ業平の旦那様、此の儘我ら一同

をお通しなすつて下せえまし」

文「ふうむ、そうか、そりや宜よくない話だ、そういう訳わけなら斯か

く申す文治が一身いっしんに引受けて、お役人にお詫わびをして見ようから、

「まあ暫く静かにして下さい」

一同「旦那、そりやア兎とても駄目でござんす、訳を云つたところか兎ても分る奴じやアありません、いつその事に」

文「まあ〜待ちなさい、兎も角も己おれが往つて詫びて見る、己が挨拶をするまでは決して手出しをしては成らんぞ、悪あつこう口しても棄置かんぞよ、いよ〜肯きん入れなければ兎も角も、血氣はやに逸つて心得違いをいたすまいぞよ」

と一同を制して、其の中の重立おもだちたる一人いちにんを案内に立たせままで立つて居ります。そんな事に恐れる文治ではございませぬから表に一同を待たせ置き、身に寸鉄も帯びず、泰然たいぜん自若じじやくとして

只一人たむひとり玄関指してまいりますと、表に居ります数多あまたの罪人が、

「旦那、危ねえ、危ねえ、抜いてらく、そうれやつつけろ」と  
 気早きははやな連中は屋敷の内へ飛込もうと致します。

文「これく無礼を致すな、己にも心得があるから暫く静かに  
 している」

やがて文治は抜刀を携えたる若者の面前に膝を突いて一礼いた  
 しますと、

役人「やいく貴様は何者か、ぐずくすると打切ぶっきるぞ」

文「はい、私わたくしは只今江戸表より流罪になりました囚めしゆうど人でござ

ざります、只今一同の囚人の大騒ぎを見るに忍びず、一旦鎮め置  
 きまして段々仔細を聞きましましたところ、囚人ありがちに有勝ありがちの食料の

こと、棄置かれませんかゆえ、お役人様へお目通り歎願いたしとうござります、宜しゅうお取次を願います」

と落着き払って述立てました。

## 十五

文治の言葉を聞いて役人は目に角を立て、

役「何だなん新入しんいりの囚めしゆうど人だ、生意気な奴だ、打据うちすえるぞ」

文「これはしたり、囚人一同の者に代り申上げます事故ゆえ、御無礼ごれいの段は御容赦下さいまして、一度はお聞濟ききずみの上、お頭かしらさま様に拝顔かなの適かないまするようお取計とりはからいを願います」

役「小癩こしやくな奴だ、新入の癖に一同の総代とは何事だ、えゝ面倒だ、切殺せ」

と一人の役人が抜刀を振上げました。此の時に奥に居りました平林が、「これゝ少し待て」と玄関正面に立上り、文治を眼下みおろに見下しまして、

平林「其の方は何者か」

文「恐れながら申上げ奉ります、手前は江戸表本所業平橋の浪人者でござります、此の度たび流罪申付けられ、只今御島内へ到着いたしました者でござります、もとより島内の御様子を知らう筈はずもございませぬが、数多あまたの罪人どもが死者狂いの大騒ぎ、何事やらんと取押えまして様子を承わりましたる所、何かかみお上よりのお手当に

就つきましたして不服を抱いだき、大勢徒党いたしましたる様子、以もつての外ほかの事、不届至極と一応取鎮め置きましたして、歎願にまかり出でた次第でござります、承われれば罪人の内三人の総代をお留置とめおきに相成り候由、非道のおん事も是れ有るまじくとは存じますが、残り一同の罪人どもは、何どのような扱いを受けて居おるかも知れぬと心配いたして居りますに依よつて、何卒なにとぞお留置に相成ります三人の総代をお免ゆるし下さいますよう、さすれば一同の悦いかび如何いかばかりかと存じます、併しかし一旦騒さわぎ立ち候う段は如何にも不届至極の振舞でございます故、御法に照しての御処分は余儀なき次第でござい  
ます、くれ／＼もお慈悲を以もつて偏ひとえに御勘弁の程を願い上げ奉ります」

平「して只今其の方が申したお上よりのお手当とは何事じゃ」

文「はゝア、手前は只今島に着きましたばかり、一向島内の御法は弁えませぬが、何か一箇年に両三度罪人どもへ娑婆飯とか申して米の御飯を下され候由、僅かの事を楽しみに歲月を送ります無気力の囚人ども、お助け下され候わば一同悦ばしく存じます、此の儀偏えにお汲取り下さいますよう」

平「黙れ、それはな、上のお慈悲を以て下さる事ではあるが、本年は囚人どもが平生の不届少からぬに依つて、白飯のお手当がないのじや、虫けら同然の其の方どもとは云いながら、人間の皮を被つて居るからにやア少しは考えて見るが宜い、然るに上のお慈悲なきは身に罪ある故と知らず、徒党を組んで乱暴いたす

とは容赦ならぬ曲者ども、いちにん一人も免すゆることは相成らぬ、皆殺しに致すから左様心得ろ」

文「お言葉に背そむくは恐入りますが、平生不屈の事がございますれば、それ／＼御処分かた方もございましょう、お手当を減ずるといふは如何いかゞかと存じます、お慈悲を以てお改め下さいますようにれ／＼も願ひ奉ります」

平「うるさい、いや、貴様も同類だな、者ども縛り上げえ」

文「かくの通りお役人様方ぬきみ抜刀の下に居りますこと故、縛られて居おるも同様、此の上お縄を頂戴いたしますとも決して厭いといは致しませぬが、何卒なにとぞ右の願きゝずみいお聞き濟ずみの上にて……」

平「成らぬ、それ打て」

下役「はっ」

と抜刀ぬきみを鞘さやに納め、櫛棒かしばうを持ちまして文治の脊中せなかを二つ三つみ打ちましたが、文治は少しも動く気色けしきもなく、両手を支ついたまゝ暫く考えて居りました。何思ふいけん不図ふと起き上りまして、又打ち来きたる利腕きこうでをピタリと押え付け、

文「無法なことを為なさいますな」

役「あいたゝゝ、あいたゝ」

見るより平林は烈火の如いきどおく憤り、

「それ、その悪党を切つてしまえ」

役「畏かしこまつて候」

と抜刀ぬきみの両人、文治の後うしろより鋭く切掛きかけました。其の時早く文

治は前に押えた腕を振上げ、同役二人が振下す刀の下へ突付け  
 ました。はつと思つて二人が退る途端に身を交して空を打たせ、  
 素早く搔潜つて一人の利腕を振上げ、尚お一人が、「小癩な  
 ことを為やがる」と横合より打込み来る其の間に、以前に振上  
 げたる下役の腕を反して前へ突放したから耐りませぬ、同役同志  
 鉢合せをして二人ともに打倒れました。残りし一人が又々抜刀  
 を取直し、「無礼なやつ」と打掛る下を潜つて一当て当てますと、  
 脂を嘗めた蛇のように身体を反らせてしまいました。此奴容易な  
 らぬ曲者なりと、平林は手早くも玄関の長押に懸けてありました  
 鉄砲へ火繩を挟み、文治へ筒口を向けましたから、文治は取つて  
 押えた兩人を玉除に翳し、

文「さア打つなら打つて見ろ」

と袖下に忍んで様子を窺うかがつて居ります。流石さすがの平林も如何いかにとも詮せん方かたなく、踵きびすを反かえして奥の方へ逃込みました。何をするか知らぬと思う間もなく、三日半も干乾ひぼしにして庭樹にわきの枝に縛り付けてあつた囚人しゅうじん目がけてズドンと一発放つや否や、キヤツという叫び声。最早これまでなりと文治は飛鳥の如く飛上り、平林が振上げて居ります鉄砲の手元へ潜り付き、一当て急所へ当て、倒れるを見向きもせず、吊し上げたる三人の縄を解きき、疵きずを檢あらためて見ますと、弾丸たまは外それたものと見えて身体に疵はありませぬ、尤もつとも鉄砲の音に胆きもを消したものと見えて、三人とも氣絶して居ります。

## 十六

樹きの枝に縛り付けられて居ります三人の囚めしゆうど人は氣絶して居おるので、文治は冷れいすい水を吹掛けて介抱して居りますと、後うしろの方に当つてわア〜という騒がしい声、振向きますと、表に待たして置いた罪人の内七八人の逸はやりお雄おが踏ふんご込んでまいりまして、最早もはや平林を刺さしころ殺してしまいました。文治は恟びつくりして、

文「え、これ何事じゃ、役人を殺すくらいなら今まで苦勞は致さぬぞ、最早これまでなり」

と身支度して切腹の様子でございます。

一同「旦那、何を為なせえます、あなたは何も知らねえ事、素もと／＼

々、こちとらが始めた仕事です、たとえど仮令何の様な事が有ろうとも決して旦那に御迷惑は掛けません、さア斯こうなるからは仕方がねえや、遣やる所まで遣やつ付けろ」

文「此の上尚お徒党を組んで乱暴な振舞をしては上かみの御法に對して済むまいぞ、先まず一同控えろ」

一同「何なんの、何どうせ晩おそかれ早かれ命ねの無え身体だ、それ遣付けろ」

文「まあく暫く」

と制して居ります処へ、江戸より送りの役人を始め地じやくにん役人一同表の方へ駈付けてまいりました。切腹と覚悟したる文治は、諸役人の姿を見るより門外に飛出し、後あとに続く罪人一同を制しなが

ら、ピタリと両手を支<sup>つか</sup>えて、

文「え、恐れながら文治申上げ奉ります、只今不法の振舞、皆私<sup>わたくしわが</sup>が仕業でござります、御吟味の上お仕置を願います」

時に江戸役人は、

「其の方共一同静かにいたせ、文治とやら、只今不法の振舞は其方<sup>そちいちにん</sup>一人であると申すか」

文「御意にござります」

役「然<sup>しか</sup>らば其の方を召連れ吟味致さねばならぬ、一同の者、文治の吟味中、謹んで居<sup>お</sup>ろうぞ、立ちませえ」

と文治一人<sup>いちにん</sup>人を連れて役所へまいりますと、続いて地役人一同も引上げました。これは江戸役人の頓智<sup>とんち</sup>で、死物狂いの囚人を残

らず召捕めしとろうと致しますと、どんな騒動を仕出来しでかすかも知れませぬ故、一時其の場を治めるために態わざと文治一人いちにんを引立てたのでございます。さて江戸役人島役人立会いにて、文治を白洲へ引出し、吟味いたしますと、全く平林が非道の扱いに堪たえ兼て、囚人一同徒党を組んで暴れ出したという事が分りました。そればかりではございませぬ、平林という奴は誠に横おうちやく着な奴で、平生罪人の内女の眉目みめよ好き者がありますと、役柄をも憚はゞからず妾しやうにすると、現に只今でも一人ひとり困ひとい者にして男児を設けたということではございます。それに引換えて文治の罪状送おくりがき書を見ますと、下しものような裏書うらがきがあります。

「右の者思おぼしめし召有これあり之候そうろうに付、遠島中軽々しく取扱しい申す

まじく候事、町奉行公用人某印」

としてあります。さア其の頃の事でございますから、町奉行公用人の裏書は中々幅の利いたものでございます。一同顔を見合せましたまゝ別に評議もいたしませぬが、以心伝心で文治に十分の利を持たせ、結句平林は自業自得、殺され損ということに落らくちや

着くいたしました。尚なお別席なに於て諸役人一同評議の上、文治を

呼び出して、「今日こんにちより右平林の後あと役やくは其の方に申付けるによ

つて役宅すまに住すまい、不都合なきよう島内しゅうじん囚人の取締しゆじんを致せ、下役人

一同左様心得ませえ」との有難き言渡きくずみしてございます。文治は恐

入つて両三度辞退きくずみいたしましたがお聞きくずみ濟ずみがございませぬから、

余儀なくお請け致しました。文治は上々の首尾にて白洲を引取り、

どうなる事かと心配して居りました徒党の 囚人一同に向いまして、

文「各々方お悦び下さい、拙者は軽くつて切腹、重くつて縛り首と覚悟してお白洲へまいりしところ、上のお慈悲を以て罪をおゆるし下されたのみか、勿体なくも平林殿の後役を不肖文治に仰付けられました、一同左様心得ませえ」

一同夢かとはかり暫し呆氣に取られて居りましたが、

一同「え旦那、貴方へお取締役を申付けたのでござんすかえ」

文「如何にも」

一同「それじゃア嬉しいなア、流石にお役人様にやア眼が有らア、時に私どもが徒党の罪は何うなつたのでござんすか」

文「そち達は好んで徒党いたした訳でない、平林の非道に堪<sup>た</sup>えて兼て起つた事ゆえ、今度に限り其の罪を宥<sup>ゆる</sup>すとの事じゃ」

と聞くより一同雀<sup>こおどり</sup>躍して、

「えつ無罪、え、も勿<sup>もつてえ</sup>体ねえ、旦那様お有難う存じます、天<sup>てんと</sup>

道<sup>うさま</sup>様は正直だなア」

と一同手を合せ大声を上げて泣出しました。文治も共に涙に暮れて居りましたが、稍<sup>や</sup>あつて声を和<sup>やわ</sup>らげ、

文「え、各々少し文治がお前達にお頼みがあるが、快く聞<sup>き</sup>濟<sup>す</sup>んでくれるか」

一同「そりやア旦那様、何事かは存じませんが、私<sup>わっち</sup>どもの命を助けて下さつた恩人の仰しやること、何事によらず承<sup>うけ</sup>わりましよ

う」

と一同静まり返つて居ります。

十七

文「うむ、聞濟んでくれるか、頼みと云うは外ほかではない、只今御吟味中に一寸ちよつと小耳はさに挟んだ事だが、先役人せんやくにんの妾めかけに子供が有るそうじゃな」

と云いかけますと、三四人の荒くれ男が思い出したように立上り、面相変えて駈出しました。

文「これく待てつ」

三人「何なんですか」

文「何なんだじやない、仮令たと夫は非道な扱いをしたにもしろ、女子供に罪はない、その婦人と子供に少しでも手を出す者は棄置かぬぞ、夫が殺されて見れば嘸さぞその女子供が難儀するであろう、義として助けなければ成らんから、拙者を其の妾の宅へ案内してくれぬか」

一同「えつ、旦那、あんな奴を助けるのですか、私わっちやア面つらを見るのも小憎らしい」

文「いや、坊主が憎けりや袈裟けさまでというのは人情だが、そこが文治が一同への頼みじや、何どうか気を鎮めて聞済んでくれ」

×「然しかし旦那、彼女あいつめ以前江戸にいる時分にやア、同じ悪党仲

間で随分助け合つたものですが、此の島へ来て平林の妾になつてからは、一緒になつて非道なことを為<sup>し</sup>やがつて、義理も人情も知らねえ悪婆<sup>あくば</sup>でござんすぜ、何<sup>ど</sup>うで生かして置いたからつて為になる奴じゃアありやせん、寧<sup>いっ</sup>そ今から往つて是までの意趣<sup>いしげえ</sup>返しに：  
…」

一同「そうともく遣<sup>やつ</sup>付けろ」

文「それをする位なら、こうして一同へ手を下げて頼みはせぬ、まア己に任してくれえ」

×「旦那の仰しやる事だから一言<sup>いちごん</sup>でも背<sup>そむ</sup>きたかア無<sup>ね</sup>えが、本当に彼奴<sup>あいつ</sup>ア憎らしいからなア」

文「それだから頼むのじゃ、何<sup>ど</sup>うぞ其の宅へ案内してくれ」

× 「別段案内にやア及びますめえ、先刻二三人廻して縛つて……」

文「何だ、縛り上げて置いた、無法なことをするなア、そんなら仕方がない、兎も角此処へ連れて来てくれぬか」

暫く経ちますると、「助けて〜、何うかお慈悲を〜」と叫び狂う婦人を連れてまいりました。数多の罪人が揃つて居りますのを見て、その婦人は色を失つて居ります。文治は遠くより声をかけまして、

文「これ〜手荒いことをするな、是れへ〜」  
お瀧という妾は恐る〜文治の傍へ坐りました。

文「お前は何という名じゃ」

瀧 「瀧と申します」

文 「今日のことは嘘さぞお前も立腹したであろうが、何事も成行なりゆきじや、諦めなさい、さて今日の始末は定めてお聞及びであろうが、お前が夫の平林氏うじが非道の扱いに堪兼たえかねて、一同の囚めしゆうど人が徒党を組んで既すでに屋敷へ押懸けようと云うところを、此の文治が止めたが、つい過あやまつてお前の夫を殺してしまったのは誠に気の毒の事であつた」

一同 「なアに、そりやア己おいらが殺したんだ」

文 「まあ、静かにしてくれ、さア私わたしやアお前のためには夫の仇あだ、その仇の此の方がお前を呼付けて斯かよう様なことを申したら定めし心外に思うであろうがな、何事も是までの因縁と諦めて、一時いちじ

此の場の治まりの付くよう勘忍してくれ、然し其の子供が成長して私を仇と狙うなら、其の時は又快く打たれてやろう、それまでは何事も私に任せてくれんか、その内子供が十五歳になつて親の後あとやく役を継ぎたいという志があるならば、必ず譲るよう計らつてやろう、それ故お前も昔は音に聞えた悪党、残念では有ろうが善くく謹しんで赦免の日を待つが宜よかろう、何どうだ」

瀧「えゝ、お有難う存じます、私わたくしは決して貴方あなたをお怨うらみは致しませぬ、何どうぞお慈悲をお願い申します」

文「よし、そういう了簡なら、お前の身は此の文治が引受けて助けてやる、これ一同、此の後ごこの婦人に対して少しにても無礼を致すと其の分にやア棄置かんで、さアお瀧殿、平林の屋敷の有あ

りがね  
 金は勿論、衣類其の外入用の品は何なりと持つて行きなさい」  
 もう是までの運命かと半ば諦めて居りますお瀧は、文治の情で  
 一命を取留めた其の上に、只今の情厚き言葉に悪婆ながらも感じ  
 たものと見えまして、

瀧「お有難うございます」

と泣伏して居ります。罪人どもは、

「旦那、金や衣類を遣るなんて、そりやア余りお慈悲が過ぎら  
 ず、せめて其れだけは……」

文「あゝ、そうく、気の毒ながら米は其の儘文治が受取りま  
 す、明日は後役引受の祝いとして、一同の者へ赤飯を振舞  
 っつてやるぞ」

いや罪人どもは赤飯と聞いて悦んだの何のなん。

一同「へえく／＼お有難う存じます、旦那様、寿命が延びます、  
辱かたじけなく存じます」

文「一同今日は是にて引取りませえ」

とそれ／＼役人へ引渡しました。いやもう囚人しゅうじんどもは明日あすの

赤飯を楽しみに喜び勇んで引取りました。思えば罪のないもので  
ございます。此のお瀧と申します婦人はもと八丁堀べっとうちの碁打阿部忠  
五郎という者の娘でございます。是にてお話が一寸ちよつとあと後へ戻りま  
す。

え、大伴蟠龍軒は丁度秋のことでございしますが、自分の屋敷に居りまして、手を拍ち、

蟠「これくお瀧か、一寸お出で」

瀧「はい、何ぞまた旨い仕事でもありませんか」

蟠「いやお瀧今日は御殿女中になつて貰わにやアならん」

瀧「おや、御殿女中とは俄の出世だねえ、まア」

蟠「旨くやると今日こそ金になるぞ」

瀧「そりやア有難いね」

蟠「緑町の口入屋の婆アを頼んで置いたが、髪は奥女中の

椎茸鬘しいたけたばに結つてな、模様ゆの着物も金欄きんらんの帯も或る屋敷から借

りて置いた、これ／＼安兵衛、緑町の婆アが来たら是れへ通せ」

安「へえ、婆アは先刻さつきから仲の口で独ひとりごと語を言ったり居眠りをしたり、欠伸あくびの十もした時分で」

蟠「そうか、此処こちらへ通せ、お、婆アか、久し振ぶりだな、何時いつも達者で結構々々、何うだ近頃は金かね儲もでも有るかな」

婆「いゝえ、此の頃じやア金儲かねもけどころじやアございません、

不景気なせいか田舎から奉公人が皆無かいむ出て来ませんし、また口も好よい口がございませんで困り切つて居ります、私わたくしどもで此の商売を始めてから斯こんな商売の閑ひまなことはござんせんねえ」

蟠「時に婆ア、手前てまえは始終屋敷方がたへ奉公人を入れて居おるが、大名や旗はたもと下へ女を出すにやア、髪はどんな風に結うかな、定めし

そう云う女中の髪ばかり結う者もあるうな」

婆「そうね、只の髪と違つて御殿女中の椎茸髷は六むすかしいんですよ、幸い此の婆アは年来結いつけて慣れていますから、旗下は斯こう大名は斯うと、まア婆アぐらいに結ゆいわけ分るものは有りませんね」

蟠「お前は一体器用だからな、婆ア少しお前に頼みがある、今日はまア緩ゆつくり遊んで往ゆくが宜よい」

婆「有難う存じます」

蟠「こりやア誠に少しばかりで気の毒だが、これで酒の一口も飲んでくれ」

婆「まア、何どうも済みませんね、毎度有難う存じます」

蟠「礼にやア及ばねえ、頼みというのは外ほかじゃねえがな、此女これを今度或る大名へ奉公に出すのだが、余り下方しもがたふう風も安ツぽい、手数であろうが御殿風に髪を直してくれまいか」

婆「そんな事なら何なんの造作ぞうさも有りませんが、少し道具が入りますから、一寸宅へ帰つて持つてまいりましょう、奉公先はお大名ですか、お旗下ですかえ」

蟠「大名よ」

婆「それなら其の様に道具を持つてまいりましょう」

蟠「宅へ帰るのは宜よいが、己の宅で斯こうく斯こう様なんて事を云つちやア困るぞ」

婆「へへへ、そんな入らざる口をきくような婆アじやアござい

ません、何か外ほかに御趣向が……」

蟠「いや別に」

婆「そんなら一寸往つて参じます」

蟠「なるたけ急いでな」

と出て往ゆく婆を見送りまして、

蟠「お瀧ッ」

瀧「はい、今日は何んな狂言をするんですかね」

蟠「これは何処どこ其処そこの御殿女中でござると云つて、それ彼あの松

平の屋敷へ往つてな、殿様の碁の相手をするのよ、己は御近習ごきんじゆし

衆ゆと隣座敷へ退さがつて、一杯飲みなから折を見て寝た振ふりをして居お

る、やがて御近習が居眠りを始めたら、己がエヘンと咳せき払ばらいを

するから、それを合図に宜いか、旨くやつてくれ」

瀧「だって、そんな事は私には……」

蟠なん「何なんの出来ぬ事があるものか、遣やりそこなつたら斯こう斯こう」

とひそくさく囁やいて居ります処へ、

婆「只今往つてまいりました、さアお髪ぐしを解きましよう、まあ

好いい恰好こに出来ていますねえ、ほんに毀こわすのは勿体ないよ」

瀧「まだお前、昨日きのう結うたばかりだもの」

婆「椎茸鬘どは、何うしても始めて結う時は、油たんとつを沢山塗けない

と旨い恰好こに出来ませんからね、お心こころもち持もちは悪うございますが、

我慢して下さいまし、少しお痛うございましょう……さア出来ま

した、まあよく好よくお似合あい申ましますよ、全体お人柄じんがらでございま

すから、本当に好く似合いますねえ」

蟠「やア何時いつの間まにか出来上つてしまつたな、ウム、旨い、併しかし婆ア近所へも極内ごくない々くにしてくれえ」

婆「大丈夫でございますよ、序ついでに召物めしものもお着せ申しましょ  
うか」

蟠「宜よろしく頼む」

婆「まあすツぱり出来上りました、左様ならお暇いとま申します」

蟠「くれ／＼も内々うちうちにしてくれよ」

婆「はい、宜しゅうございますとも、左様なら」

蟠龍軒はお瀧たきを連れて松平某ぼうの中の口へまいりまして、

蟠「頼むく」

中小姓「どれ……これはく、大伴先生」

蟠「お殿様は御在邸でござるかな」

小姓「はいく、丁度御前様もお屋敷でござります、暫くお控  
え下さいまし」

暫くして近習きんじゆが出てまいりまして、

近習「これはく、先生、よくおいでになりました、さア何うぞ  
此方こちらへ、おうこれはく、予かねてお話しかの御婦人様でござりますか」

蟠「はい、左様にござります」

近「御前様もお待兼まちかねでいらせられます、直すぐお通り下さりま  
せ」

蟠「然しからば御免を蒙こうむります、さア何どうぞお先へ」

近「どう致しまして、先まずく先生、お通り下さいますよう」  
 蟠「これは恐入ります、仰せに従いまして失礼を致します」  
 と先立つて御殿へ上あがる其の様子は、如何いかにも事慣れたものであ  
 ります。

十九

このお瀧という女が、先に申上げました阿部忠五郎という碁打  
 の娘で、碁は初段の位くらゐでございます。諸家しよけへ奉公致して居りまし  
 た故、なか／＼多芸な娘でございますが、阿部の悪心から終ついに島  
 流しになるような不運な身になったのでございます。御殿女中と

いうものは苦勞のない割合に、身体を動かしますから、大概は栗くり虫むしのように太りかえつて、其の上着物に八やつ口くちがありませんから、帯が尻の先へ止つてヒヨコひよこくして、随分形の悪いものであります。お瀧は其れとは打つて變つて成程眉目形みめは美しゆうございますが、丈せい恰好かこうから襟えり元もとまでお尻の詰つつた細ほそり姿すがた、一目見ても氣味の悪くなるような婦人ふじんでございます。

殿「宜よう先生おいでたな」

蟠「これはく御前様、此方こなたは予かねて申上げました御殿女中瀧村様でございます」

殿「おゝ左様か」

とにこゝく御機嫌ごけんの態てい。

蟠「さア瀧村様此方へ、御当家の御前様であらせられます、お近附に」

瀧「はい左様でございますか、始めて拝顔を得まして辱けのう存じます、私は瀧村と申します不束者、何うか宜しゅう」

という挨拶振の芝居掛りなるに蟠龍軒は笑いを洩らして、

蟠「は、奥女中の御挨拶は些と芝居めきますな、さて御前、お約束のお碁でございますが、私は瀧村殿に二目置きますから、丁度御前様とはお相碁でございますよう」

殿「いや、それはく、なか／＼強いのだ」

蟠「何うも御前、世の中には種々の気性の方もあつたもので、瀧村殿には僅に三日や四日のお宿下りに芝居はお嫌い、花見遊

山などと騒々しいことは大嫌いで、只緩々と変つたお方と碁を打つのが何よりの楽みとは、お年若に似合わぬ御風流なことでござりますな」

殿「風流を好む女子には、時として然ういう者もあるの」

蟠「時に御前、始めてのお手合せでござりますから、何か勝ちました者に御褒美を出すとしては如何でございましょう」

殿「それも宜いの」

蟠「御前が万々お負けなさる氣遣いがありますまいが、万一お負けなすつたら、えゝ斯うと……金子……金子は些と失礼なようではございますが、外に是れという心付きもござりませんから、矢張金子がお宜しゆうござりましょう、また瀧村殿が負けました

時は、金子という訳にもまいりませず、はてな其の外の品々を差上ぐるも失礼、こうと、困りましたな、何か御前また御所望もござりましょうから、何なりお好みにお任せ申すとして、其の辺は取極めぬ方がお宜しゅうござりましょう」

殿様は婦人の珍客ですから余程悦に入つて居ります様子。

蟠「何うも御前様、毎度まいります度に御酒の馳走は恐入りま  
すな、これはくゝ千万辱けのう存じます、さアくゝ御近習衆、お  
側で御酒はお碁のお邪魔だ、ちよつとお次で戴くとしましよう、  
何れもさアくゝ」

近「さらばお次で」

蟠「え、御前一寸御免を蒙ります」

と其の場を外して次の間へ退り、胸に企みある蟠龍軒は、近習の者に連りと酒を侷めますので、何れも酪酊して居眠りをして居ります。蟠龍軒も少しくいびきを搔きながら、様子を窺つて居りますと、

瀧「おゝ昼の中に帰ろうと思ひましたら、図らず夜に入りまして恐入りました、御前様それはいけませんよ、いゝえ私は其処へ打ちましたのではございません、此方へ伸びたのでございます、お寄せなすツちやア御無理ではございませんか、御前様お止し遊ばせ、手前は碁のお相手に……」

頃合を計つて蟠龍軒、

「ウーイ、余り御酒を過したので御前をも憚らず、とろくと

睡ねむつて大きに失礼いたした、おや、お燈火あかりが消えましたな、御近習お燈火を」

と御前の座敷へ踏ふみこ込み、何やら難題を吹掛ふつかけましたので、松平の殿様も弱り果て、

殿「何事も内ないさい済に致せ、これ誰たそある、金子を遣つかわせ」

近「は、ッ」

とまごつまぎかずまくして居ります処へ、後うしろの襖ふすまを押開けて、当家の老臣妻木數馬つまぎかずまという者が入いり来きたりまして、

數「その金子は手前どもが遣わします、御前様にはお奥へく、これ御近習衆、御前をお奥へお連れなさい」

近「は、ア」

と殿様のお手を取つて奥へ連れ込んでしまいました。老臣數馬は容かたちを正し、

數「これ大伴氏うじ、いや先生もう少しお進みなされ、さて先生、この婦人は何れいずからお連れなすつた、御殿女中なら御宰ごさい（下供したども）を連れべき筈なるに、男一いちにん人同道するとは如何いかにも不審と承わりましたゆえ、御殿へまいり、篤とくと様子を取調べました処、左様な女はござらぬという、さア何処いずこの奥からお連れになりました、大伴氏如何いかゞでござるな」

と問詰められて、流石さすがの悪漢あつかんも返す言葉なく、

蟠「えゝゝこれはその何なんでござる、実は先日朋友ほうゆうがまいりまして、八丁堀辺の侍の娘で、御殿奉公を致して居おる者であるが、

至つて碁好すきな娘、折があつたら御前へとと取持とりもちを頼まれまし  
て」

と苦しまぎれの出鱈目でたらめを云つて居ります。

二十

時に妻木數馬は、

數「いやさ、御殿女中とは真赤まっかな偽りでござろう、尤も衣類かんざし簪かんざしの類るいは好よう似て居おるが、髪かみの風ふうが違ちがいますぞ、これはお旗はた下かか諸しよ役人衆しゆの女中の結むすい方、御城中並びに御三家とも少しづつ区別くべつがあると申す事故じゆえ、其の道の者に鑑定致たがせたる処、よく出来ては

居おるものゝ御殿風ではないという、察するところ、困碁の心得ある何者かの娘を御殿女中風に仕立て、御前を欺むさぼいて金銭を貪むさぼる手段でござろう、さればこそ衣類と髪の不似合な装いをしたのでござらぬか、さりとは不届至極な為され方、さア此の上は兩人とも当家を引立ひつたて、大目附衆へ差出さねば成らぬ、其の上当家に越度おちどあらば寺社奉行の裁判を受けるでござろう、とは申すものゝ罪ざいにん人を作るも本意ほんいでない、何も言わずに此の儘お帰りなさるか」とすつかり凶星を指されて何なんと言い紛まらす術すべもなく、

蟠「ウウツ、ウム、これは全く、へえ〜何も言わずに此の儘……」

數「然しからば免ゆるし遣つかわす、併しかし大伴氏、今日限きょうり当家へお出入は

御無用でござるぞ」

と追立おったてられました、蟠龍軒、お瀧の両人は目算がらりと外れ、  
 這ほうく々の体ていで其の儘逃歸りました。悪事千里とは好よう申したものの、  
 何時いつしか此の事がお上かみの耳に伝わりまして、お瀧は忽たちまめしち召捕とりとな  
 り、続いて遠島を申付けられました次第でございりますが、如何いかに  
 も島しま人びとに珍らしき美人でありますから、平林が勝手に引出して、  
 妾にいたして置きました処、前回に申上げた騒動が起つて、夫平  
 林は殺されてしまったのでございます。お話變つて町奉行石川土  
 佐守は、ある日御用があつて御老中松平右京殿のお役宅へまいり  
 ました。さて御用済の上右京殿は土佐守に向いまして、  
 右「いかに御奉行、唐土もろこしから種々いろくの薬種やくしゆが渡来いたして

居るが、その薬種を医者が病気の模様に依つて或は緩め、或は煮詰めて吞ませるといふのも、畢 竟 多くの病人を助ける為で、  
 結句御国の為じやの」

土「御意にござります」

右「日本の島々に居る者でも随分用いように依ると、国の為になる者もあるうの」

土佐守は御老中が突然の間に、はて奇妙なお尋ねも有るものかなど暫く考えて居りましたが、もとより奉行でも勤めるくらいのお方でありますから、それと心付きまして、

土「御尤もにござります、思召し通り取計らいましよう」

とお受を致しました。別段申上げませずとも、文治を赦免いた

せと云う思召であると云うことは皆様もお察しでございましょう。奉行は役宅へ帰りまして、「三宅島罪人小頭浪人浪島文治郎儀、流罪人扱い方宜しく且又当人島則を嚴重に相守り候段、神妙の至りに付、思召を以て流罪赦免致すもの也」という赦免状を認めまして、その赦免状の三宅島に着きましたのは、天明の前年即ち安永九年初夏の頃でございます。さてまた本所業平橋の文治留守宅におきましては、主人が流罪の身となりましたので、お町は家計を縮め、森松を相手に賃仕事などして、其の日々を煙を立て、居ります。松屋新兵衛を始めとして亥太郎、國藏も文治の恩誼を思い、日々夜々稼ぎましては幾許かの手助けをして居ります故、お町は存外困りませぬ、或日友之助が尋ねてまいりまし

て、

友「へえ、お頼み申します、友之助でござります」

森「やア友さん、よく来たなア、大分暑だいぶくなつたじやアねえか、さア上らつしやい」

友「時に御新造様は御機嫌宜しゆうござりますか」

森「あゝ別に變つた事もねえね」

友「それは何より結構、へえ御新造様、おや今日こんにちはお土用干どようぼしでござりますか、これは皆旦那様のお品々、思い出すも涙の種、御新造様世の中には神も仏もないのでございませうか…これも旦那様のお品でございませうな」

町「それに就ついていろいろお話があるのでございませう、丁度私わたくしが

当家へまいって二日目でございますが、亥太郎さんのお父とつさんが  
歿なくりました、其の時に亥太郎さんが葬式とむらいきん金にお困りなすつて、  
これを抵かた当に金を貸してくれと申してまいりました、旦那は彼あア  
いう気象ですから、金は貸すが品物は預からぬと云つて、暫く押  
問答して居りますと、亥太郎さんが何なんと云つても肯ききませんので、  
そんなら私わしも少し考える事があるから、兎も角も預かつて置く  
申しまして、その儘預かりました、ところが彼あアいう訳で良人やどが  
島流しになりましたから、何どういう仔細があつて預かつたかは知  
りませぬが、何時いつまでも人の物を預かつて置くのも不実と思いま  
して、今日にもお出いでがあつたらお返し申そうかと思つて居おるの  
でございますよ」

友之助は不審の眉まゆを顰ひそめまして、

友「はてな、亥太郎さんが此品これを持つていると云うのは不思議

でございますな、この煙草たばこ入いれは皮は高麗こうらいの青皮せいひ、趙ちよう雲うんの

まるがなまるがなもの、後藤宗乘ごとうそうじようの作わたくし、緒締根附おじめねつけはちぎれて有りませんが、

これは不思議な品で、私わたくしが銀座の店に居りました時、手掛けた事

のある品物でございますぜ」

と噂うわさをすれば影とやら、表かたの方から亥太郎がやってまいりまし

た。

亥太郎は門口に立ちて、

亥「え、お頼み申します、亥太郎で、滅相めつそうお暑くなりました」と云う声を聞付けまして、

友「これはく豊島町の棟梁、さアお上りあがなさいまし」

森「さアく棟梁お上んなせえな」

亥「御免よ」

友「いや棟梁、一寸ちよつとお聞き申しますが、此の煙草入は貴方あなたがお持ちなすつていたのですか」

亥「持ってたと云う訳じゃありませんが、実はこりやア桜の馬場の人殺しが持っていた品です、左様さ、御新造が此方こちらへ縁付かたづいてから二日目のこと、丁度三年以前の五月三十日の晩ですが、

水道町の仕事の帰りに勘定を取つて、相変らず一口やった揚句の  
 果、桜の馬場の葭簀張、明茶屋でうとく寝入ると、打ちま  
 けるような大夕立にふと気が付いて其処らを見ると、枕元でキャ  
 ツという叫び声、さては人殺しと寝ぼけ眼で曲者の腰の辺へ噛り  
 付いたが、その曲者も中々堪えた奴で、私へ一太刀浴せやがった、  
 やられたなと思つたが、幸いに仕事の帰りで、左官道具をどつさ  
 り麻布の袋に入れて背負つていたので、宜い塩梅に切られなか  
 った、振放す機に引断つた煙草入、其の儘土手下へ転がり落ち  
 た、こりや堪らぬと草へ掴まつて上つて見たら、何時の間にか曲  
 者は跡を晦ましてしまう。翌日聞けば殺された奴は盲目の侍だ  
 そうで、其の時図らず取つた煙草入だが、持つていちやア悪かる

うとぐずぐずしている中うちに親父の大病、医者いしやに掛けるにも錢はなし、脊せに腹は代えられねえから、一時の融通に旦那へお預け申しましたが、其の儘になつていたのでさア」

町「亥太郎さん、それは確かに五月三十日のことですね」

亥「えゝ、勘定取つた歸りがけで」

町「その殺された侍は盲目でございますか」

亥「いかにも」

友「もし棟梁、その煙草入わっちは私が銀座の店で蟠龍軒に売つた品、

御新造かたきの敵かたきは確かに蟠龍軒でございますぞ」

お町びつくは恟りして、

町「え、父の敵はあの蟠龍軒ツ」

亥「御新造、あなたのお父とつさんの敵かたきうちが蟠龍軒と知れて見れば、この敵かたきうち討うをせぎやなりませんよ」

友「そうともく、此品これこそ何よりの証拠、私わしが確かに証人しやうにんでござります」

と一同歯がみをなして居ります処へ、家守いえもりの吉右衛門きちえもんが悦よろこばしそうに駈けてまいりまして、

吉「皆みんなな悦よろこんで下せえ、今日お奉行所べいぎやうじよよりのお達とつしで、旦那様だんなさまが御赦免ごじえんになりました、もう直ぐにお帰かへりでございます」

亥「えッ、旦那だんなが赦免じえんだ、そりやア有ありがて難がたえ」

國藏くわんざうと森松もりまつは気も顛てん倒とうして、物をも云いわず躍おどり上あつて飛出とし、文治ぶんぢの顔かほを見るより、あッと腰こしを抜ぬかしてしまいました。

亥「そんな処で腰を抜かしてくれちやア困るじゃねえか」

と大騒ぎ。近所では火事と間違えて手桶ておけを持つて飛出すもあれ

ばとびぐち鳶口かつを担いで躍り出すもあると云う一方ひとかたならぬ騒動でござ

います。只見とると、文治は瘦やせおとろ衰ひげえて鬚ひげぼうく、葬式とむらいの打

扮でたちにて、袴かみしもこそ着ませぬが、昔に交らぬ黒の紋付、これは流罪

中上かみへお取上げになつていた衣類でございます。お町は嬉しさ余

つて途方に暮れ、手持無沙汰うろたに狼狽うろたえて居りましたが、文治の姿

を見るより玄関まで出迎えまして、両手を突き、

町「旦那様、御無事で……」

と云つたきり、後あとは口がきけません。文治は落着き払つて、

文「これは皆さん、ようこそお出で下さいました、流罪中は万

事お心に懸け、よくお世話下さいました、千万辱<sup>かたじ</sup>けのう存じます、おゝ町か、留守中さぞ苦勞しなすつたろう、よう達者でいてくれた、文治も皆さんの助<sup>おちから</sup>力と天の助けで、再びお前に逢うとは此の上の喜びはない、さア皆さん奥へお出で下さいまし、ゆるりとお礼を申しましよう、いや皆の衆、予<sup>かね</sup>て覚悟とは申しながら、何<sup>なん</sup>とも彼<sup>か</sup>とも申しようのなき心配をいたしました、いつそあの時死んだら此のような苦勞は致すまじきに、皆々様に余計な心配を掛けまして、飛んだことを仕<sup>し</sup>出<sup>で</sup>来<sup>か</sup>しましたなア、併<sup>しか</sup>しこれも男<sup>やく</sup>の役<sup>やく</sup>か知らんて」

亥「私<sup>わっし</sup>やア嬉しくつて〜」

森松も國藏も胸一杯になつて嬉し涙を流しては、文治の顔ばか

り見詰めて居ります。

喜「頼みます、藤原喜代之助でござる」

森「あッ、藤原様が来た……いや今日はこんにちは袴で」

喜「お喜びにまいりました、宜しくお取次ぎ下さい」

森「え、旦那様、藤原様が喜びにまいりました」

文「さア何どうぞ是れへお通り下さりませ、宜ようこそおいで下さ

いました、定めし其そこもとさま許様のお執成とりなしとは存じますが、何から何

まで御配慮下さいまして、千万辱のう存じます」

喜「どう致しまして、此の上の喜びはございません、お町様、

こんなお目出度めでたい事はござりません、お喜び申上げます」

町「はい、有難うございます、あなた様が万事にお執成し、何なん

ともお礼の申そうようもございませぬ」

とお町は気も軽く、取つときの茶を仕立て、親切に扱うて居ります。

## 二十二

この時亥太郎は、

亥「え、旦那、まことに面めんぼく目次第もござえせん、旦那が万年橋から島流しになりやす時、國藏と二三の奴らを頼み合い、飛んだ事をやろうと為しやしたところを、お前めえさんに叱り付けられて、思い直したお蔭で、旦那を始め私わっちらまで今日きょうの喜び、実に面目次

第もござんせぬ、有難う存じます」

喜「併しかしあの時は宜よくお止とまり下すつた、そのお蔭には此の通り文治殿にも表向きで、お目に懸れるような仕合せになりました」

文治はそれと悟りまして、

文「ハ、ア、それじゃア流罪になります時、あの万年橋で、多分そんな事だろうと思つて、それとなく叱りましたが、藤原氏何かに付けて穩おんびん便なおあつかい、有難う存じます」

亥「え、旦那、もつと目出度めでてえことが有りやすぜ、おい友さん、此方こつちへ来きねえ、あの桜の馬場の人殺し一件よ、あの時取つた煙草入を旦那に預けて置きました、ありやア友さんが蟠龍軒に売つた品だという、して見りやア御新造様のお父とつさんを殺した奴は、

あの蟠龍軒に相違ござんせぬ」

文「フーウム、友之助、ちよつと此処へ、今棟梁が申した通り、あの煙草入は確かにお前が蟠龍軒に売った品か」

友「えゝ、こりやア私が仕立てました、高麗青皮の胴乱、金

具は趙雲の円形、後藤宗乗の作、確かにもく外に二つとない

品でござります、口惜しい事をしましたな、それと知つたら早く

お上へ訴えて、敵を取つてやるのに、神ならぬ身の知るよすがも

なく、皆さんに苦勞を掛けたのは口惜しいなア」

森松と國藏は膝を叩いて

「こいつア話が面白くなつて来た」

喜「いや文治殿、その蟠龍軒なら少し聞込んだことがござる、

拙者<sup>しゆうか</sup>主家の御領分<sup>えちごたかた</sup>越後高田よりの便<sup>たより</sup>によれば、大伴蟠龍軒<sup>ににより</sup>似寄の人物が、御城下<sup>きた</sup>に來りし由、多分越後新瀨辺<sup>お</sup>に居るであらうと思われます」

文「さてく悪運というものは永く続かぬものじやなア、然<sup>しか</sup>らばお国表の様子を聞合せ、直ぐさま出立いたすでありますよう」  
喜「それなら此方<sup>こちら</sup>に伝手<sup>つて</sup>がありますから、早速屋敷へ歸り、お国表を調べた上、お知らせ申す事に致しましょう」

文「それは辱<sup>かたじけ</sup>ない、何分<sup>なにぶん</sup>宜しく」

一同「さア、いよく面白くなつて來たぞ」

と皆々腕<sup>さす</sup>を撫つて居ります。さて中山道<sup>なかせんどう</sup>高崎より渋川、金井、横堀、塚原、相<sup>あい</sup>俣<sup>また</sup>より猿が原の関所を越えて永井<sup>しゆく</sup>の宿、こ

れを俗にさんしゆく三宿と申しまして、そろ／＼なんじよ難所へかゝります。  
みくにとうげ三國峠へ差しかゝりました文治と妻お町の二人連れ、

文「ようよ漸うのことで國藏、森松、亥太郎の三人を言い伏せて出立

いたしたが、いや藤原は身内のこと、まして侍だが、町人三人の志、実に武士も及ばんなア、さぞ／＼あと後で怨んでいようが、かりそ苟めにも親の仇討あだうちに出立する者が、他人の助力を受けたとあつては、後日世間の物笑いになるからな」

町「はい、実にお留守中もあなた貴方がおいでの時と少しも変りなく、朝夕まいりましてひとかた一方ならぬお世話をして下さいました」

文「左様かな、併ししか今日は霜月しもつきの中ちゆうにち日、短日たんじつとは云いながらもう薄暗くなつたなア」

町「はい、少し雪ゆき催もよおしで曇りました」

文「山さんちゆう中は寧いっつそ人に逢わぬ方が心安い、眼前に大事を控えた身でなくば、さぞ此の景色も佳よいであろうがな」

町「左様でございます、併し今夜はお寒うございますから、早く泊りへまいり度たいものでございます」

文「そうく三国峠を越えれば浅あさがいしゆく貝宿、三里で泊るのは少し早い、浅貝宿へ泊るとしよう」

と話しながらまいりますと、二人の昇かごや夫が、

昇「えゝ、もしく旦わつち那え、私どもは三みつまた俣まで帰るものです

が、尤もつとも駕籠は一いっちよう挺しか有りませんが、お寒うござんすから、

奥様ばかりお召めしになつたら如何いかゞでござんす、二居ふたいまで二里八丁、

いくらでも宜しゆうございます、空荷からにで歩くと却かえつて寒くて堪たまりません、女中衆一人ぐらい何なんの空籠からかごより楽でござんす、ねえ旦那、乗つて下せえな」

文「いや、もう私わしは浅貝で泊る積りだ、折角だがいらんよ」

昇「えゝ、旦那え、今日は雪空のようでございませうが、此の峠ふゆむきは冬ふゆむき向むかは何時いつでも斯こん様な天気でござりやす、三里でお泊りも余りお早うござんす、二居までお供を致しやしよう、えゝ旦那、失礼ですが二百文もん下さいまし、後の宿あとしゆくで一口やつて最早もう一文なしでござりやす、えゝ、もう向うへ浅貝が見えます、それから只たつた二里八丁、今までのような山やま阪さかではござりませう、えゝ奥様え、お足から血が出ましたね」

と二人の昇夫は煩うるさく附纏つきまとうて勧めて居ります。

二十三

文治はお町の足から血が出ると聞きまして、

文「町、何どうした、足ひえが冷るから一寸躓ちよつといても怪我をする、大分血だいぶんが出るな、足袋たびを脱いで御覽」

町「いゝえ、少しも痛みはしません、何なんの貴方、長い旅に是しきの事で然そう御厄介ごやつかいになりましたは、思つたことが遂げられませぬ」

文「これく昇夫かごや、駄賃だちんは幾許いくらでもやるから浅貝しゆくの宿までやつ

て呉れ」

昇「へえく、なアに駄賃なんざア一合で宜しゆうござりやす、  
 さア奥様お召しなせえ、駕籠の中でお足を御覧なせえまし、大し  
 た疵きずじゃアございやせん」

と急いでまいりますと、程なく浅貝宿。

文「御苦労々々もう宿しゆくへ来たの、此処こゝで下おろしてくれ」

昇「旦那え、余りお早いじやアありませんか、此の通りの道で  
 只た二里八丁、二居宿ふたいじゆくまで遣やりましょう、それとも日うちのある中  
 にお泊りなせえますか、ねえ奥様、如何いかで」

町「旦那様、貴方あなたさえ宜しくば私わたくしは一宿も先へまいる方が宜し  
 ゆうございます」

昇「え、旦那え、二三日中ちうちに大雪かも知れませんぜ、雪の無ねえ中に峠を越した方が宜しゆうござんしよう」

文「左様か、二里三里思案したところで足しにもなるまい、昇夫、急いでやるかな」

昇「へえ、有難う存じます、さア此の肩で棒組しつ、確しつかりしろよ」  
 棒組「よし、どっこいさ、旦那少し急ぎましよう」

文治は二居までに峠はあるまいと思ひますと、此の二里八丁の路みちは山ばかりで中々登るに骨が折れます。さりとして途中ひつかえで引返すことも出来ず、駕籠うちに附いてまいります中に、吹雪が風にまじつて顔へ当ります。昇夫は慣れて居りますから、登るに従かえつて却かえつて足が早ひうちざかうございます。やがて火打坂ひうちざかと申す処へ来かゝりま

すと、向うから一人の旅人、物をも云わず摺れ違いました。文治は心にも懸けず遣り過しましたが、二三丁まいますと、一人の旅人が素ッ裸体で杉の樹に縛り付けられ、身体は凍えて口もきけず、がた／＼震え上つて居る体を見るより、昇夫は、

「やア大変だ、旦那く」

文治もこれを認めまして、

文「これく昇夫、その駕籠は二三間先へ置けよ」

昇「成程、女中衆にこんな物を見せては」

と云いながら五六間先へ駕籠を下しまして、一人が附添い、

一人が帰つて来まして手を合せ、

昇「旦那様、何うぞ助けてやって下さいまし」

文「山賊の仕業しわざと見えるな、何しろ恐ろしい奴もあるもんだな、これ昇夫、駕籠は何うした」

昇「へえ、直じき其処そこへ下しまして棒組ひとり一人を付けて置きました、御安心なせえまし」

文「そうか」

と文治は手早く差さし添ぞえを抜き、その繩を切きり解ほどきました、

文「おい昇夫、水はないか、そこらに水溜りがあるなら手拭しめを霑しめして来い」

昇「御覧の通り此処ここは山の上で、水は少しもありませんが、一体何どうしたんでしよう」

文「知れた事、追剥おいはぎよ、何なんとかして水を見付けてくれんか」

昇「地蔵様の前に水がありますが、凍り切<sup>こお</sup>って居りやす」

文「その氷を持って来い」

文治は懐中より薬を取出し、旅人の口へ入れて氷を含ませ、

文「旅人々々」

と呼ばれて漸<sup>ようや</sup>く気が付きました。

旅「ウ、ウ、ウーム」

文「旅人、気が付いたか、確<sup>しっ</sup>かりしろ」

旅「有難う存じます」

文「定めし山賊の仕業であらうな」

旅「ウ、ウ、ウ、お、苦しい」

文「金子も衣類も取られたか」

旅「皆取られてしまいました、今しがた二三の山賊が其処らに居りました」

文「山中とは申しながら、日にっちゆう中旅人の衣類金銭を剥ぐとは恐ろしい奴だなア」

旅「私もこんな目に遇あおうとは夢にも思いませんでした」

昇「これ旅人、その追剥は何方どっちへ逃げたか知らねえか」

文「いやさ昇夫、知れたところが己おれが追掛けて往つて捕まえるという訳にも往ゆかぬ、併しかし其方そちも素ツ裸で、嘸さぞ寒かろう、あの昇夫、其方はだかも裸体同様だが、今の駕籠の中に少しの包つみがあるから持つて来てくれんか」

昇「私も寒さが身に泌しみて、動けそうもござりやせん」

文「そうか、それじゃア気の毒だ、そんなら一寸ちよつと己が往つて来よう」

半丁ばかりまいりましたが、駕籠は何処どこに在あるのか影も形も見えませぬ。

文「お町や、お町」

と呼べども一向こた応えはありませぬ。

文「何処どこへ駕籠おろを下したのか知らん、あの昇夫に聞いたら分るだろう」

と氣遣いながら元の処へ引返ひっかえしてまいりますと、何れいずへ行つたか旅人も昇夫も居りませぬ。

文「さては奴らは山賊の同類か、して遣やられるとは浅いはかな、

汝おのれ、この分には棄置かぬぞ」

と又取つて返してお町の乗りました駕籠の跡を追掛けてまいりましたが、いくら往ゆきましても姿が見えませぬ。それも其の筈道が違いますので、駕籠は五六間先へ下おろすや否や、待まち伏ふせして居りました一いちにん人の盜賊が後あと棒ぼうを担かつぎまして、

昇「え、御新造さま、旦那様は泥坊おさを捕とらえると云つて後あとに残つておいでなさいます、駕籠は二居しゆくの宿やまで遣やつて置けと仰しやいましたぜ、さア棒組、急いげく、少し雪がやつて来たようだぜ」と頻しきりに急いいでまいりまする。

お町は昇夫のいうことが能く分りませぬから、

町「昇夫さん、旦那様は何う為されたと云うのです」

昇「あの、樹きに縛られて居た旅人の着物や金を取返してやると云つて、盗ぬすびと人の跡を追掛おつかけて行かした、もう今頃は浅貝あはいあたりへお帰りになりましたろう、旦那の云うにやア、奥様に斯こんな物を見せちやア悪いから、一足先へ二居までやってくれろと、こ  
う仰しやいました」

町「いえ、旦那より先へ往ゆくことはなりません、どうぞ後あとへ返して下さい」

昇「まア折角旦那が先へやれと仰しやつてたものを、後へ帰る

と泥坊が居りますよ」

町「いえ、何が居ても構いません、後へ、何故そう急ぐのです、私はもう飛降りますよ」

昇「やい女郎、静かにしろ、もう後へ往くも先へ往くもねえ、此処は道が違ひ、二居ヶ嶺の裏手の方だ、猪狼の外人の来る処じゃア無えや、これから貴様を新潟あたりへばらすのだぞ」

町「さては汝らは山賊か、無礼いたすな、たとい女であろうとも武士の女房、彼是いたすと棄置かんぞ」

と懐劍の柄に手を掛けるより早く、「どツこい、然うは」と後から抱締めました。

町「あいたゝ」

昇「虎藏とらぞう、其の手を確しつり押おえて居ゐろ」

と二人掛りでとうとうお町を押おえ付けました。最前やまびからの山冷えにて手足も凍こえ、其の儘うに打倒うちたおれましたが、女の一心しゅれん、がばと起い上り、一喝いつかつ叫こんでドンと入れしました手練しゅれんの柔術やわら、一人の昇夫かほそはウームと一ひとこ声こゑ、倒たれる機はずみに其の場を逃に出でしました。ところが一人の昇夫おつかが追掛おつかけて参まりますので、お町は女の織細かほそき足あしにて山へ登のぼるは適かないませぬから、転まげるように谷おへ下くだりました。続ついて後あとから追掛おつかけて来きました盗人はなは、よう／＼追付おつかいて、ドンとお町おの脊中せなかを突つきましたから、お町はのめる機はずみに熊くまの棲すんでいる穴あなの中へ落おちました。穴は雪ゆきの爲ために入口ふを塞ふがれて居ゐりますから、表うらからは見えませぬが、手てを突つくはずみに、土つちの盛もつてある処ところを

突つぎやぶ破り、其の儘穴の中へころ／＼／＼。熊の棲む穴にはいろ／種類がありまして、また国々によつて違いますが、多くは横穴でございます。縦に深く掘ろうと思ひましても土を出すことが出来ませぬから、横へ／＼と深くなりますので、或あるいは天然の穴を利用するのもあります、これは大きな井戸の如き穴を利用したのでございますから、深さは十四五間けんあります、底にはいろ／＼な柔かな物が敷いてありまして、其の上に熊の児こが三四匹居りました。親熊は其の物音に驚き、落ちた女に構わず、一いっさん散に飛上つて件くだんの盗人を噛かみ倒し、尚お驚いて逃出そうとする一賊うしろの後から両手を伸のばして噛かじり付き、あわや喰殺し兼まじき見幕けんまく、山賊も九き死ゆう一いっ生しょうの場合ですから、持合しましたお町の短刀、熊を目が

けて打付けましたが、短刀は外れて熊の穴へ落ちました。熊は二人の旅人を谷底まで打落しまして、子が気に懸ると見えて、すぐと穴の中へ飛んで帰りました。此方のお町は隅の方に蹲まり、両手を合せて一心に神仏を念じて居りますと、何か落ちて手の甲に当りました。何かしらんと取上げて見ますと、自分が所持の懐劍、幸いに柄の方が手に当りましたので怪我也致しませぬ。お町は胸中に

「こりや私が所持の短刀、これを持って熊か猪かは知らぬが殺して出よという、神様のお告か知らん、あゝ有難し有難し、いや併し此の穴の深さは何のくらいあるか知れぬ、殊に獣も沢山いる様子ではあり、迂濶な真似をして此の身を害つてはならぬ、いよ

く一命が危あやういという時にこそ、この短刀を持って突殺してくれよう、それまでは獣の様子を見ましよう」

と短刀を懐中に隠して、隅の方へ小さくなつて居りますところへ、熊が飛返つてまいりまして、正面からお町の顔を見て居おる其の物もの凄すごさ、両眼炯々けいけいとして身を射らるゝの思い、普通なみの婦人なら飛掛つて突くのでございましょうが、流石さすが文治の女房、胆力も据すわつて居りますから、じつと堪こらえて此方こなたも熊を見詰めて居ります。熊はだんく近づいて、今度はお町の顔となく手となく嗅ぎ始めました。お町はいよく氣味が悪くなつて突こうかと思いましたが、この時は日の暮くれ方がたで、穴の様子も確しかと分りませんから、じつと辛抱して、いよゝとなつたら突いてくれようと身構

えて居ります其の恐ろしきは何なんに喩たとえようもございませぬ。暫くして熊は後あとへ退さがり、しずくと兎この側へ往ゆきましたから、お町も少し心を落着けまして、人に物をいうような静かな声で、

町「これ、そちは私なんを何なんと思うぞ、くれ／＼も 獵かり人ゆうどではない、また悪人でもないぞよ、山賊のために追掛あやまけられ、過あやまつて此の穴へ落ちたのじゃ、決して其方そちに手出しはせぬ、どうぞ私を助けてくれ、これ熊よ、私は此の通りの扮装なりで居おるぞよ、夜よが明けたら穴の様子を見て、どうぞして此の穴を出るゆえ、心あらば助けてくれよ」

と両手を合せて頼みました。

## 二十五

無心の熊もお町の言葉を聞分けしか、兎こを抱いたまゝころりと  
 寝た様子でござります。お町は漸ようやく安堵あんどして、其の夜は神仏しんぶつへ願  
 掛けて、「八百万やおよろずの神々よ、何卒なにとぞ夫文治郎に逢おうて敵かたきを討つ  
 まで、此の命を全まうせしめ給たまはるようにな」と瞬またきもせず夜よの明あけく  
 るまで祈いのつて居ゐりました。其の中うちに冬ふゆの夜よの明あけ方がたと見え、穴あなの  
 口くちより少し日ひが映さして居ゐりますが、四辺あたりはまだ暗くらがりりで未まだ能なく  
 見えませぬ、まるで井戸の中へ這入はいりったようようでござります。恐おそる  
 く四方よつを捜たづねて見みましたが、少しも足掛あしかけりはなし、如何いかせばや  
 と胸騒むねさわぎぎいたしましたが、余あまり騒さわいで熊くまが目めを覚さまし、嚙か付けかれて

はならぬと思案に暮れて居ります中に、もう夜は明けたに相違ござりませんが、何処どこから上ろうという足掛りもございませぬ。

町「あゝ、世に私ほど不幸なものはあらし、凶らずも夫文治が赦免という有難き日に親の敵かたきを知り、多年の鬱憤うっぴんを霽はらさばやと夫と共に旅立ちして、敵かたきうち討たの旅路たびじを渡る山中にて、何なんの因果か神罰か、かゝる憂目うきめの身となりしぞ、たとい此の身は何どうなるとも夫に逢わで死すべきか」

と思わず独ひとりごと語ごした其の物音に熊は起上り、暫く四辺あたりを見廻して居りましたが、何思おもういけん、また穴の入口を目がけ、ひらりと飛上りました。

町「いや、熊が私に噛付かぬは神仏のお蔭か、但たゞしは友を呼び

に往ゆき、帰かへつて私を殺ころす気か、いよゝゝ嚙か付く様子なら、私が命のあらん限り突ついてゝ突殺つころしてくれる、それまでは何事も」

と少しも体たいを崩たふさぬよう身構みかまえて居ゐりました。文治は其の夜二居みねヶ峰の谷々まで根限こんり尋ねましたが、少しも足が付きませぬ。

その筈はずでございます、雪は益々降ふりしき頻しきり、いやが上に積たりまして、足跡あしあととても見えぬくらい、谷々は只真まつ白しろになつて少しも様子が分わりませぬ。其の中うちに長ながき夜の白しろ々々と明渡ありまして、身体からだがつかかり腹はらは減へる、如何いかせばやとぼんやり立たち縮ちぢんで居ゐりましたが、思い直ふして麓ふもとの方かたへ下くだりました。二居ヶ峰の中の峰より二里半みやうまた、三みつ俣またという処ところまで来きますると、宿しゆくはずれに少しばかり家はござりますが、いずれも門かどの戸かどを閉切たてきつて焚火たきびをして居ゐります様

子、文治はその家の前に立ちまして、

文「もしく、少々お願い申します、私は旅人でござるが、大雪に難儀を致します故、お助けを願います」

と戸を叩きますと、内より一人の老人、

「あゝ旅の衆か、この雪で御難渋なさるとは、そりや気の毒だ、さア明きますからお明けなせえ」

文「はい、有難う存じます」

老「やれく此のお寒いのに宜よくお一人で峠をお越しなさいましたな、さアく火の側へ其の儘お出でなせえまし、やア貴方はお武家様でござんすな、これは御無礼、御免下せえましよ」

文「何どうぞお構い下さるな」

と炉端に両手を出したまゝ、暫く口もきけませぬ様子。

文「当家には鉄砲が掛けてあるが、かりゆうど 獵人ではござらぬか」

老「はい、左様で、せがれ 忤が只今出掛けましたがな、此の辺では獵

人でなくても鉄砲が無くちやア一夜でも寝られやアしません」

文「何方をどちら向いても山ばかり、恐ろしいけもの獣でも来ますかな」

老「左様さ、おりふし 獣も折節来ますが、第一泥坊が多いので困るで

がす」

文「はゝア、そんなにぬすびと 盗人が来ますかな」

老「併ししかわたくし 私どもには金もきもの 衣物もないと知って居ますから、金を

取りに来やアしません、火打坂や二居ヶ峰あたりで、旅人を殺したり追剥をしたりしちやアこゝ 此処まで来て、真夜中に泊めてくれ

と云つて時々戸を叩くでがす、さア明けねえと打毀ぶちこわすぞなんて威おどしますからな、其の時にやア此の鉄砲を一発やるだね」

文「はゝア、して見ると此の辺は盗人の往来と見えますな」

老「時々女が担かつがれたり、旅人が裸はだか体で逃げて来るでがす」

思わず文治は、

文「さては其そいつ奴らにやられたか、えゝ残念」

と聞いて老人、

老「旦那様、お連れの方でもやられましたか」

文「はい婦人を一人」

老「道理で昨夜ゆうべ、曲者らしい奴が二三人、往つたり来たりして

居やした様子」

文「その人体にんていはどんな者でありました」

老「なアに戸を締めて置きやしたから分りやせんが、また何か仕事をしやがったと思ひました」

文「その曲者は何方どっちへ往つた様子ですか」

老「いやそれは確しかと分りやせんが、多分しもて下手の方へ往つたかと思ひやした」

文「然しからば長岡か新潟辺かな」

老「先まず六日町むいかまちから十六里、船に乗つて長岡か新潟あたりへ持つて往ゆきましたな、それから着物は故買屋けいずやへ売り、女は女郎町へ売るそうだが、早くお殿様から手を廻して捕まえて下されば宜よいが、時々取逃すので困るでがす」

文「此の辺は矢張やはり榊さかき原はら式部しきぶ殿の領分でござろうな」

老「いや此の辺はお代官持もちで、公方様くぼうさまから沙汰が無ねえば手え入れられねえでがす」

文「何なんと御無心だが飯はありますまいか、昨夜はまんじりともせず、食事いしじも致さぬ故、如何いかにも空腹で堪たまらぬが、一いっ飯助ばんけてくれまいか」

老「へえ、お安いことで有りやすが、飯を炊きかけて居ります、少し有った飯はな、悴せがが皆猫ねこに持つて往ったでな、少しも無ねえだ」

この時文治は、

文「御子息が獵師ならば、此の辺の山道やまみちは委くわしく存じて居りましような、今から御子息を尋ねて往つて、今一度此の辺を捜して見たいが、御子息は何方どちらの方へお出でか、分つて居りましような」

老「さアとても分りやせん、分つたにしたところで、この雪じやアとても尋ねて往ゆくことは出来ねえだ、雪解ゆきとけまで待たざアなりますめえ、幸いお女中が無事で居なさりやア、此の辺に居きる氣きづづけえ遣ねは無ねえね、越後か上州へ連れて往いかれたに違ちげえねえだ」

文「成程、それも尤もも、何なんしても腹が減つて堪たまらない、飯いが出來たら一いつつぱん飯い売つてはくれまいか」

老「え、旦那様、麦飯ですが宜うござりやすかね、とても不味くつて喰えるもんじゃア無えだ、それよりか此の先へ半里ほど往きやすと、三俣という町があつて、宿屋もあるし飯もあるべえから、我慢して其処まで往きなせえまし」

文「いや大事な、ひもじい時に不味い物なし、是非一飯売つて貰いたい、大分身体も暖まつて来た」

と御飯の出来るのを待つて居りますと、

老「旦那様、お飯が出来やしたが、菜は何もありませんぜ、只玉味噌の汁と大根のどぶ漬があるばかりだ」

文「何でも苦しゆうない、そんなら一飯頂かして下さい」

と文治は漸う飢を凌ぎまして、

文「これく親父殿、これは些かであるが、ほんのお礼の印だ」

老「やア旦那様、こんなに頂いちやア済まねえな」

文「どうか受納して貰いたい」

老「はいく恐入ります、有難う存じます」

文治は支度そこく獵師の家を立去りまして、三俣へ二里半、  
 やぎさわ 八木沢の関所、あらどとうげ 荒戸峠の上下二十五丁、湯沢、  
 おざわ 関宿、塩

沢より二十八丁を経て、六日町へ着しました。其の間凡そ九里

何丁、道々も手掛りの様子を聞きつゝまいりますこと故、なか／

＼はかど撈取りませぬ。夕景漸くようや六日町に着しますと、まつやせんじろう松屋仙次郎と

いう商人宿がございます、尋ね物をするには斯うこいう宿に若くは

ないと考えて、宿の表に立ちかゝりますと、

下女「お早うござりやす、お寒うござりやす、只今お湯を上げやす、えゝ内の旦那どん、お客あはアお侍様だが、此こねえだ間見たよ  
うに座敷が無ねえとつて、グザラしつても困りやすのう」

文「いやゝ、皆々と同席でも大事ない」

女「はアそうけえ、お湯へ這へえ入りますけえ」

文「都合で何どうでも宜よい」

女「さア此こけ処えお上んなせえまし、お荷物を持ってめえりやし  
よう」

文「もう宜いゝ……これは皆さん御免下さい、御一同お早い  
お着きですな」

旅人「これはく、旦那様、さア上座へお坐りなせえ」

文「何う致して、後からまいって上座は恐入る、私は何分に

も此の寒さに耐えられないから、なるたけ囲炉裏の側へ坐らして貰いたい、今日の寒気は又別段ですなア」

旅「旦那様、お一人でござえますか」

文「はい、連れがありました、途中ではぐれて誠に心配して居ります、もしや貴方がたは女を一人お見掛けなさいませんか」

旅「へえ旦那様もお女中連れかね、やっぱり女ア連れて逃げてござらしたのけえ」

文「これは怪しからぬ、連れと申すは私の女房でござります」

旅「あゝ左様かね、その女あ泥坊に勾引されて新潟へ売られ

てしまいましたよ」

文「さては貴方は其の女を御覧になりましたか」

旅「知つてますとも、年の頃二十五六で……」

文「左様々々」

旅「江戸つ子で色の白い、好いい女でありやした、だんく話を聞いたところが、今こそ斯様《こん》な零落おちぶれているが、昔は侍の娘だと云つて大變溢こぼしていやした、余あんまり氣の毒だから、私わつちやア別に百文氣張つて来ました」

文「それは何時いつのことですか」

旅「先月十日頃、新潟で遊んだ女です」

文「いや、それは違います、私の申すのは昨日きのうのことです」

旅「はゝあ昨日、また其様な事がありましたかね、何方の方へ連れて行つて何処へ売つたのでしょうか」

文「これはしたり、それが知れぬからお前さんに尋ねるので：  
…」

旅「はア左様けえ」

文「外ほかのお客様にお尋ねしますが、此の辺では左様なことが度々びくあるのでござりましようか」

乙「どうも此の辺は物騒な処で、冬向女ふゆむき おんなづれ連れや一人旅では歩かせぬ、折々かどわか勾引かどわかしや追剥おしが出来ます」

文「成程、その品物や女は何処へ売捌うりさばくのですか、御存じありませんまいか」

旅「まア重おもに新潟へ捌くそうで、何しろ新潟は広いから、  
一寸と気が付きませんか」  
一ちよつ

丙「此の間新潟の者の話に、海賊の大将が沖にいて、その子分  
達が女や金を奪つて持ち運ぶとかいうことで、それで此の頃御領  
主様から船頭の達者なものと剣術の先生を欲しいと云つて、江戸  
屋敷へ御沙汰になつたそうでございます」

文「成程、これから新潟へ往ゆくには船で往く方が便利でしょう  
な」

旅「はい、これから船で十六里、長岡へ着きまして、それから  
又船で十五里、信濃川しなのがわを下くだつて新潟へ着くのでございます」

文「左様か、それは千万辱かたじけない」

と翌あくるひ日は意を決して新潟へ往ゆく支度をして居ります。御案内でもございませうが、十六里、十五里とも川舟かわふねで、夜に掛つて往くのでございます。

二十七

さて文治は漸ようやく新潟に着きまして、古手町ふるてまち 秋田屋清六方へ泊り、早速主人を呼びまして、

文「御主人外ほかの事ではないが、自分は仔細あつて当地の海辺を見物したいと思うが、船の都合は何どういうものであろうな、それに就つて途中で様子を聞くと、海賊が船中に忍んで居つて此の辺を

荒すということだが、そんな事もあるものかな」

主「左様さまでしけえ、そんな噂をしやすもんな有りやすが、誰も是だアと云うものを見たもんが無えすけに、まア分りやしねえ」

文「併し、そんな噂をいたす者もあるかなア」

主「いえはアえらく有りやす、お上様でもえれい船頭と劍術遣いが有らば宜いと、尋ね居るだてえ話がありやした」

文「噂があれば尚更のこと、海辺見物の船を出して貰いたいが、何うじやな」

主「いえ、それが往けやしねえ、二三日沖は荒れ通していやす、まア一降り降りやすか風が変らねえば、とても沖へ出ることはな

りやせん」

文「はゝア、然しからば舟子ふなこが出ぬのかな」

主「いくら銭を出しても命にやア替えられねえと云つて、往いく者がありやせん、まア二三日 逗とまり留ゆるなさるが宜よいね、また海でなくともへえ見物場けんぶつばアえらく有りやすでえ」

文「そういう訳では何どうも致し方がない、事によると二三日厄介になるかも知れぬ、兎も角も御飯の支度をしてくれんか」

主人はにこ〜笑いながら、

主「へえ御機嫌宜しゆう、こりやアお客様に飯を上げろえ」

後うしろの襖ふすまを開けまして、年の頃四十前後の飛脚ひきやくてい体の者、旅慣こしられた拵こしらえにて、

旅「え、御免下せえまし、只今隣で聞いて居りますと、海辺を御見物なさりてえと亭主へお頼みなさりましたが、宿屋てえもなアいやはや狡ずるいもんでしてね、三四日御逗留ねげを願ねげえてえもんだから、あんな事を申しやす、私は此の辺を歩きます旅商人たびあきんどで、こゝらの船頭に幾干いくらも知った者がありやすから、直すぐに頼んで上げましょう、併しかし旦那ア、こりやア亭主に云わねえ方が宜ようござりやすよ」

文「それは御親切な事で、併し今も亭主から聞きましたが大分此辺こゝらに盗ぬすびと人が居つて、婦人などを勾かどわか引すとか申しますが、全く左様な事があるのでございませうか」

旅「専もっぱら然そういう評判を致す者がありません、併し私は年来此処こゝ

らを歩いて居りやして、大抵の事は知って居りやすが、まア新潟には無えねようでございますね、尤も海岸は広うござんすから、確しかとお請うけあい合は出来ませぬが、まア此辺こゝらは天領でござんしてな、存外御政治も行ゆきとゞ届いて居りやすから、そんな事アありそうもござんせぬ、何なら舟なん ふなびと人を頼んで上げましょうかね」

文「併し見ず知らずのお前様に、御苦勞を掛けるも氣の毒でござるな」

旅「なアに直じき其処そこでございます、ちよつくら序ついででもありませんから、じゃア往つてまいりましょう」

文「それはお氣の毒な、宜しくお頼み申します」

出て往ゆく後うしろすがた姿を見送つて、文治は手を鳴らし、

文「これく亭主」

亭「へえ、何御用で」

文「今出て行つた客は当家へ折々泊る客か」

亭「よく見掛ける人でござりやす」

文「ふうむ、聞けば旅商人たびあきんどということじやが、渡世とせいは何なんだか

知つておるか」

亭「左様、どうも能よう分りませんね、旦那何かお頼みなら、ま

ア止すが宜ようござりやす」

文「ふうむ、分らぬか」

亭「へえ、どうも世間じやア余あんまり好よく申しやせんが、お客様ゆ

え断る訳にも往ゆきやせん、お泊め申して置くとは云うものゝ、

実は持<sup>もて</sup>余<sup>あま</sup>して居<sup>お</sup>るんでやす、後<sup>あと</sup>が恐<sup>こ</sup>うござりやすからなア」

文「なに、後<sup>あと</sup>が恐<sup>こ</sup>い、ふうむ何<sup>なん</sup>だ、恐<sup>こ</sup>いというのは」

亭「意趣返<sup>いそへん</sup>しが……はア今<sup>いま</sup>に帰<sup>かへ</sup>るべえに、私<sup>わし</sup>が此<sup>こ</sup>処<sup>こ</sup>にいたら、

又<sup>また</sup>酷<sup>ひで</sup>え目に逢<sup>あ</sup>わねえとも云<sup>い</sup>われやせん、まアお氣<sup>いき</sup>をお付<sup>つけ</sup>けなせえ

まし」

文「はゝア、彼<sup>あいつ</sup>奴<sup>やつ</sup>は譬<sup>たと</sup>えにいう護<sup>ご</sup>摩<sup>ま</sup>の灰<sup>はい</sup>か、よしゝ承<sup>しょう</sup>知<sup>ち</sup>した」

と心<sup>こころ</sup>の中<sup>うち</sup>に領<sup>うりやう</sup>いて思<sup>し</sup>案<sup>あん</sup>して居<sup>ゐ</sup>ります処<sup>ところ</sup>へ、例<sup>れい</sup>の旅<sup>りょ</sup>商<sup>しょう</sup>人<sup>にん</sup>が帰<sup>かへ</sup>りま

して、何<sup>なに</sup>か主人<sup>しゅじん</sup>と話<sup>わ</sup>をして居<sup>ゐ</sup>りましたが、それから直<sup>ただ</sup>ぐ奥<sup>おく</sup>へま

りまして、

商「旦那<sup>だんな</sup>え、舟<sup>ふなびと</sup>人<sup>びと</sup>たち<sup>たち</sup>に聞<sup>き</sup>合<sup>あ</sup>せますと、陸<sup>おか</sup>と沖<sup>おき</sup>とは余<sup>あま</sup>程<sup>ほど</sup>違<sup>ちが</sup>

つたものだそうです、二人<sup>ふたり</sup>頼<sup>たの</sup>んでまいりました」

文「違うと申して幾ら呉れというのか」

商「一日一貫文、いっかんもん其の代り御祝儀には及びません」ごしゅうぎ

文「それはく、千万お手数であつた、これく亭主」てかず

亭「へえ」

文「いよく、明日は見物に出掛ける所存だ、これは誠に少々だ

が、お茶代じや」

亭「へえ、有難う存じます、併し旦那、明日はまだ沖合が何う

でございましょうかな」

商「あ、これく主人、旦那が往こうと仰しやるのに何だ、入

らざるお世話をして、引込んで居れ」ひっこ

亭「へえく、旦那お支度をなさいまし、随分お支度を……」

と心ありげに立ち去りました。文治はそれと悟り、蛇じゃの道へびは蛇とやら、此こいつ奴はしごを楷はしご子こにしたらお町の様子が分らぬ事もあるまい、また敵かたきの様子も知れるであろうと十分に心を用いて、翌日船に乗込む事に取極めました、これぞ文治が大難に逢うの基もとでござい  
ます。

二十八

さて文治は船頭を二人雇うて乗出しますると、

舟子「旦那、心配しなさるな、私わしらが二人附いていりやアどんな風でも大丈夫ですが、陸おかを行くよりも沖の方が宜いいくらいで、

やい吉きちい確しつかりしろ」

吉「よし、やツ、どっこいさア」

だん／＼漕こいでまいりますと、俄にわかに空そら合あが悪わるくなりまして、ど／＼／＼と打寄する浪は山岳の如く、舟は天に捲ま上あげられるかと思ふ間もなく、ご／＼／＼ごうと奈落ならくの底へ沈むかと怪あしまるゝばかり、風はいよ／＼烈はげしく、雨さえまじりてザア／＼／＼ドドドウという音の凄すさまじさ、大抵の者なら氣絶するくらいでござい  
ます。

文「もう斯こうなつたら仕方がない、二人とも確しつかりやれ」

と文治も一生懸命であかを搔か出きして居ります。烈風ますます／＼猛たげり狂つて、黒雲くろくもの彼方かなた此方こなたは朱しゆをそゝいだようになりました。

船頭はこれを赤じまと申します。何方どっちが西か東か一向見分けも付かぬくらいで、そこらに船でもあれば、船は微塵みじんと碎けるは必ひつじ定よう、實げに三人の命は風前の燈火ともしびの如くであります。流石さすがに鉄てつち腸強胆ようごうたんな文治も、思わず声を挙げまして、

「不幸なる我が運命、何なにとぞ卒敵そたきを討つまでは、文治が命をお助けあれ、神々よ武士の一分いちぶん分立てさせ給え」

もう斯こうなつては何なにびと人も神仏を頼むより外ほかに道はございませぬ。二人の船頭も大声を挙げて思いくの神々を祈つて居ります。が、風雨は一向歇やむ模様はございませぬ。

吉「もう兎とてもいけやせん、日頃悪事の報いか、魚うおの餌食えじきとなるは予かねての覚悟だ、仕方が無ねえ、南無阿弥陀仏く」

庄「え、縁起の悪い奴だ、何を云つてやがる、手前てめえや己おらア生れ  
て此方こつち悪事を働いた覚えは無ねえ、確しつかりしろえ、舟ふなのり乗稼かぎよう業は  
御年ごねんぐ貢だ、旦那アまだ宜しゆうござえやす、どうぞ神様をお頼み  
申して下せえやし」

と三人とも手に手を尽して漕いだ甲斐もなく、とうとう日は暮  
れて四方八方黑白あやめも分らぬ真の闇、併しかし海は陸おかと違ちがひまして、ど  
のような闇でも水の上は分りますが、最早もはや三人とも根絶こんえ力尽き  
て如何いかんとも為せん術すべなく、舟一ぱいに水の入った其の中へどツかり  
坐つて、互に顔を見合せ、只夜よの明けるのを待つのみでございま  
すが、そうなると又長いもので、中々夜が明けませぬ。運を天に  
まかして船の漂うまゝに彼方あちらへ揺られ、此方こちらへ流されて居ります

内に、東の方がぼんやりと糸を引いたように明るくなりました。

さては彼方が東か知らん、夜が明けたら少しは風も静まるであろうと思いの外、ほか明るくなつても風は止まず、益々烈しく吹いて居りまする。三人とも心付いて見ると、櫓ろかいも皆吹流されてしまいました。

船頭「やア、これじゃア風が止んだつて何処どこへも往ゆかれることじゃねえ、情なさけねえな、吉、もう是までの運命と諦めろ」

文「まあく待て、決して短気な事をしては成らんぞ、今にもおおぶね大船が通らぬとも限らぬ、又異国の船でも此の難儀を見れば助けてくれるは人情だ」

と云つて居ります中に、風は漸ようやく凪ないでまいりました。

文「やア大分風が静かになつて来た、これで天気になつたらば、また助ける風も吹くであろう、死ぬも生きるも約束だ、各々おの／＼しつ確しつかりしろよ」

船「有難うござりやす、旦那の方が気が丈夫だ、こうなつちやア人間業わざで助かる訳にやア往いかねえ、どうか旦那、神様を信心して下せえ」

文「そち達も信心が肝要だぞ」

吉「なアに此方こちとらア信心したつて神様が……」

庄「やい何を云うんだ、確しつかりしろよ、気が違つたか、心を改めて信心するが肝心だ、ねえ旦那」

文「そうともく、それ天気になつた、風も止んだぞ」

庄「やア、こりやア有ありがて難え、これと云うのも信心のお蔭だ、何なんしろあかを搔かぎアなるめえ」

吉「だって、あか搔かきも何も流されてしまったじゃアねえか」  
時に文治は、

文「よし、こゝに宜よい物がある」

吉「へえ、宜なんい物って何ですか」

文「宿屋から持って来た弁当箱がある」

吉「何どこ処に」

文「此の通り腰にぶら下げて居おる、飯も菜さいも沢山あるが、これを明けてから氣長に搔い出そうじゃないか」

吉「旦那、飯をお棄てなせえますか、そりやア勿体ねえ、これ

から何日食わずに居るか知れやしねえ、旦那、勿体ねえじや有りませんか」

文「いや私は食べとうない」

吉「旦那、棄てるのなら私に下せえまし、弁当も何も此の暴風で残らず流してしまったア、旦那が上らねえなら私どもに下せえな」

文「いや〜これは食わぬ方が宜かろう」

兩人「なアに勿体ねえ、少しぐらい汐が入っても此の場合だ、飯と聞いちやア食わずには居られねえ、何うか下せえな」

文「そんなら上げもしようが、中てられるなよ」

吉「大丈夫、さア庄、あかは後にして先ず二人で遣付けようじ

やねえか、成程こいつア中々旨えうめ」

と二人とも十箇とおばかりの握飯むすびと菜さいまで残らず食しょくしてしまいました。

二十九

吉「さア重箱が殻からになった、これから気長にあか搔かをするんだ」

文「これく重箱の毀こわれぬよう静かにやってくれよ」

暫くすると船の底の見えるように搔い干しました。

吉「さア、これから船を動かす道具だ、何も彼かも皆みんなな流して始

末いに往いかねえな、え、旦那え、此の木をお刀で割つて下せえな、

少し柄えの方を細く削って下さいまし」

文「權をこしらえるのか、成程手頃の棒だ」

と文治は脇差を抜きまして、

文「こうか、これで宜よいかな、これく手を出しては危い、さ  
アこれで宜よいだろう」

庄「旦那ア、貴方あなたア些ちつたア道具道具ごしらせをやった事があると見  
えますな、それで結構でござりやす」

文「これく船頭、遙か向うに黒く見えるものがあるが、あり  
や国か島か」

両人は飛上って、

「やア有ありがて難え、島だく」

文「あの島は何処どこだろう」

庄「昨夜ゆうべから大分暖かになりましたから、余程南へ流されて来たに違ちがえねえ、何しろ新潟の河岸かしを離れてから昼夜三日目、事に依よつたら唐からまで流されて来たかも知れねえなア」

文「ウム、そうかも知れぬ、併しかし何処どこの国でも人鬼ひとおには居らぬ、こういう訳で難渋するからと頼んだら助けてくれぬ事もあるまい。さア一生懸命でやれ〜」

文治も手伝って船を漕ぎますが、どうも手ごしらえの櫂といえ  
ば櫂、棒同然な物で大海たいかいを乗切のつきるのでありますから、虫の匍はう  
より遅く、そうかと思うと風の為に追返されますので、なか〜  
抄はかど取りませぬ。其の内に何処どこかの岸へ近づきました。

文「やれく信心のお蔭でいよく命が助かったぞ、おい船頭、何うぞしたか」

庄「ウムくウム、旦那々々……旦那……苦しい、薬があるなら早くく」

吉「これ庄藏、確しつかりしろえ」

文「これ、庄藏とやら、気を確かり持てよ」

と云いながら、手早く印籠いんろうより薬を取出して、汐水しおみずで庄藏の口に含ませましたが、もう口がきけませぬ、其処そこら辺あたりへ取付きまして苦しむ途端に、固まったような血をカツと吐きまして、其の儘息が絶えた様子。

文「吉公、可愛相なことをしたの、とうとう死んでしまった、

折角骨を折つて此処まで漕付けて、もう一丁も行けば国か島かへ上れるものを、一体何うしたのか知らん」

吉「今、私どもが喰つた弁当は宿屋から呉れましたか、それとも小頭か、いやさ彼の相宿の者がくれたのですか」

文「飛脚体の旅人が折角くれると云うから貰つて来た」

吉「えッ、あの相宿の飛脚から……やアしまった、秋田屋の印の重箱だから、腹の減つたまぎれに油断して喰つたのが……」

文「なに、油断して喰つた、それじゃア相宿の飛脚は怪しい者か」

吉「旦那、これが因果応報というのでござんしよう、何だか私も腹が痛くなりました、済まねえが旦那氣付を一服下せえまし」

文「やア其方も腹痛か」

吉「旦那、大變な事をいたしました、真ツ平御免下せえまし、  
 実は私らは海賊の手下でござんす、あの旅人に姿を扮していたな  
 ア小頭の八十松という者で、貴方を親船へ連れて往つて、懷中に  
 ある百兩余りの金と大小衣服を剥ぎ取つて、事に依つたら貴方を  
 ば手下にするか、殺すかしてと相談しましたが、一昨日宿屋を出  
 る時に手強い奴と思つたかして、弁当の中へ毒を入れたのでござ  
 んしよう、それとも知らず自分の弁当は流してしまい、旦那の持  
 つて居なさる弁当箱には秋田屋の印がござんすから、二日二夜さ  
 の飢じさに浮かり喰つたのが天道様の罰でござんしよう、旦那、  
 宥して下せえまし」

文「成程、分つた、新潟を出る時に怪しい奴と思わぬでもないが、それ程の奴とは心付かなんだ、そう貴様が懺悔するからは其方の罪は宥して遣わす、さア今少し薬を吞んで助かれ、庄藏とやらはとても助からんぞ」

吉「旦那ア、私も最早いけません、眼が眩んで旦那の顔さえ見えなくなりまして」

文「これ、吉とやら宜く聞けよ、生前に何の様な悪事を働いても、臨終の際に其の罪を懺悔すれば、慈悲深き神様は其方の未来を加護し給うぞ、さらりと悪心を去つて静かに命数の尽るを待て」

吉「あ、あ、有難うがす、私も今更発心しました、死ぬる命は惜みませぬ、何うか楽に成仏の出来ますよう、念仏の一つ

も唱えて下せえまし」

文「ウーム、殊しゆしやう勝こゝろがけな心掛かけじや、時に吉とやら、そちの

親方という新潟の沖にて親船に乗つて居おる奴は何なんという名で何処どこの国の者か」

吉「私わつちも根からの海賊じやアござんせぬ、新潟在の堅かたぎ気の舟ふなの

乗りでござんしたが、友達の勧めに従ふつて不ふ図とした事から海賊の

手下となり、女でござれ金品でござれ、見付け次第だまに欺たしたり剥は

取ぎとつたりして親船へ持運びして、女の好いいなア頭かしらの妾、また頭の

気に入らぬ女は寄たかつて群たかつて勝手にした其の上に、新潟くわの廓わへ売

飛ばすという寸法で、悪事に悪事を重ねうちる中、去年の秋から一人

の劍術遣つかいが来て、頭を毒殺して其の子分を手下に従え、以前に

優まさる 悪あく業ぎよう、今じやア其の侍が頭でござりやす、悪事に悪事を重ねた私わっちども、此の苦しみを受けるのは天道様の罰ばちでござりやす、おゝ苦しい、旦那様早く殺して下さいまし」

と両手を合せたまゝ悶もだえ苦くるんで居ります。

三十

文治は吉藏が懺悔話を聞いて、そゞろに愛あい憐れんの情を起し、共に涙に暮れて居りましたが、二度目に来た剣術遣いと聞いて、

文「待てゝ確しつかりしろよ、今いう二度目に来た剣術遣いの名は何なんというのだ、また幾人ばかりでまいったのか」

吉「確か、今頭になっているのは大伴蟠龍軒といいました、今一人はもと医者だそうですね」

文「その名は何と申したぞ、これ／＼今一人の名は何と……」

吉「あゝ苦しい、いゝゝゝ今一人は確か秋田……」

文「これ吉藏、吉藏」

と呼べども答えはございませぬ。

文「はて、これも締切れたか、自業自得とは云いながら二人の舟人に死別れ、何処とも知れぬ海中に櫓櫂もなく、一人にて取残されしは何たる不運ぞ、今この吉藏が臨終の一言、海賊の頭を殺して再び其の跡を受継ぎしは大伴蟠龍軒、医者は秋田と聞くからは、こりや滅多には死なれぬわい、何処の島かは知らねど

も最早岸には一二丁、夜の明けるのを待った上、命限りに助けを得て、新潟沖の親船に賊窟ぞくくつを構えたる敵大伴蟠龍軒かたき、秋田穗すいあ庵あんの兩人、やわか討たずに置くべきか、此の日本に神あらば武士たる者の一分いちぶんをお立てさせなされて下されまし」

と其の夜一夜を祈り明かし、夜の白々と明くるを幸い、板子いたごを割さいたる道具にて船を漕ぎ寄せようと致しますると、一二丁は遠浅で、水へ入れば腰のあたり、

文「いよく、神の助け給うか、有難し、辱かたじけなし」

と漸ようよう陸おかへ上りまして、船を引上げ、二人の死骸は人目にかゝ

らぬようにして、島の入口二三丁往ゆけどもく、人家はなし、只荒れ果てたる草木くさきのみ、人の通りし跡だになければ、流石さすがの文治も

暫ししば呆氣あつけに取られて、ぼんやりかなた彼方こなた此方を眺めて居りましたが、小首ひねを捻ひねつて、

文「いや、これほどの島に人の上らぬ事はあるまい、何処どこにか住居すまいがあるに違ちがいない」

と心を励あまして或あるは上あり或くだは下くだり、彼は一里余も捜たしましたが、人の居いそうな模様はございませぬ。もとより用意の食事は無し、腹は減る、力は抜ける、進退きわこゝに谷きわまつて、どつかと尻すを据すえまして、兎とやせん角かくやと思案しに暮れて居ります。

文「最早十二月の中旬なかば、妻は何処どこに何どうしている事やら、定めし今頃は雪中うすに埋うもれて死しんだであろう、さなくば色里いろに売うられて難儀なんぎをして居おるか、救すいたきは山々なれども、此の身みさえ儘まな

らぬ無人島の主、思えば我が身ほど不運な者はない、いや／＼愚痴を溢すところでない、海上にて彼の難風に出会い、幸に船は覆りもせず、此の島に漂い着いたというのは……そののみか海賊の口から敵の在処の知れしは是ぞ神の助けであろう、あゝ無分別な事をしては第一神様に対しても相済まぬ」

と心を取直して又々一里ほど行けども／＼人の足跡さえござりませぬ。

文「はて変だな、此の通り草木の生い立って居る処を見ると、余程暖かい島に相違ない、何処にか人里があるであろう」

と一番高い樹に登って四辺を見廻しましたが、眼に遮るは草木ばかりで人家のあるべき様もござりませぬ。

文「さては愈々いよく話に聞いていた無人島か」

と力なく樹を降り、根こん尽きて其の儘そこ其処へ気絶いたしました。

お話分れて、此方こちらは信州二居ヶ峰、中ノ峰の谷たにあい間の熊の穴に落ちましたお町が成行なりゆきでございませす。前に申上げました通り、お町は隅の方に小さくなつて居りますと、穴の外へ飛出した親熊が帰つて、我子わがこの寝て居ります側に蹲うづくまつて居ります様子、お町は薄気味悪く、熊の正面に向いまして、人間に物いうように、

町「これお前、先刻さつきも申す通り私は決して悪人ではない、賊の為に災難に逢おうて逃げる機はずみに此の穴へ落ちた者、其の時お前が追お掛けて出た彼あの二人の者こそ泥坊じゃぞえ、私は仔細あつて夫と共に此の山へ来かゝりしに、山賊共に欺だまされての此の災難、今頃

夫は何処いずこへまいられしか、定めし所々しょく／＼方々ほう／＼とお尋ねであ  
ろう、どうぞ夫に逢うまでは不憫ふびんと思つて助けて下さいよ」

と後あとへ退さがつて小さくなつて居りますと、件くだんの親熊はのそりく  
とお町の前へまいりました。

町「さては是ほど頼んでも聞分けなく、私に噛付く了簡か、そ  
んなら斯こうよ」

と懐劍に手を掛けながらも、心うちの中に業平天神を祈り、どうぞ  
夫に逢うまではお町の一命をお助け下さいますようと、油断なく  
熊を見詰めて居りますと、熊は何やらお町の前へ持つて来まして、  
又元の通り子の寝ている処へ帰りました。お町も少しは安心いた  
しましたが、さりとて眠ることもならず、其の儘にして居おること

一日二日、いよく熊も嚙かみつ付く様子がありませんので大分気も落  
着きました。さア腹が減つて堪たまりませぬ、ふと心付いて見ると、  
毎日熊が持つて来ましたのは胡桃くるみの実やら榧かやの実やら、乃至芋ないしの  
ような物であります。

## 三十一

お町は余り腹が空すきましたから、前に積すんである胡桃を取上げ  
ましたが、さア割ることが出来ませぬ、懐剣を出して割ろうかと  
も思いましたが、いよく熊が見て自分を殺すと思ひ違い、万一  
の怪我でもあつては成らぬと気遣きづかいまして、齒に掛けて見ますけ

れども頓とんと割れませぬ、二つ持ってカチ／＼叩いて居りますると、熊はむつくり起き上つて、のそり／＼とお町の前へまいりまして、その胡桃を取ろうとする様子でありますから、お町は震え上つて、思わず持つていた胡桃を投出しました。熊は一向騒ぐ気色もなく、静かに其の胡桃を取上げて二つ三つ口へ入れましたが、忽たちまちぽり／＼と二つに割つて、それを両手に乗せてお町の前に出しました。さては私に食べろということかと、そつと一つ取りまして熊の顔を見ながら食べました。又二つ三つと其の通りにして食べますると、熊も安心の様子にて我子の側にころりと寝転んで、兎こに乳を吞まして居ります。お町は漸ようやく胸を撫でおろして、

町「この猛獸までが私を助けてくれるか、あゝ有難い、これと

云うのも日頃念ずる神様が此の熊に乗り移つて我身を守護して下さるのでありましよう、此の上ともに首尾好く穴を脱け出で、夫文治殿に逢わして下さいますよう祈り奉ります」

と一心不乱に祈りまして、

町「どうしたら此の穴を出ることが出来るか知らぬ」

と足掛りのする処へ足を掛けて立上つては見ますが、前にも申す如く此の穴は熊が自身に掘つたのではなく、天然の穴を用いたので有りまして、さながら井戸の如き切立て、深さも二三丈はありまして、其の穴からまた横に掘つたのでございます。熊は慣れて居りますから自由に出入でいりいたしますが、人間殊ことに女子じよしの身では熊のように自在に飛上つたり飛下りたりする事が出来ませぬ。居おる

ともなしに此の穴の中で余程のひかず日数をついや費しました。熊は折々雪の塊かたまりを持って来ては兎にも食はませ、自分にも喰い、またお町の前へも持ってまいります。ところが段々その雪も解なくけて失る時分になりますと、穴の隅からたら／＼と清水が垂れてまいります。さう然そうなると一日々々とだん／＼寒くなつてまいります、もう穴の中に居いた耐まらぬ位になりました。獸類とは申しながら熊は誠に感心なもので、清水が滴したるようになったので、熊の兎を穴の途中まで出しました様子、お町の心配は何程か知れませぬ。さては神様が我身を見殺しにする思召おぼしめしか、情ないと思つて居りますと、親熊しきが頻りにお町の前へ来て、後うしろむき向に脊中を出して居ります。お町も始めの内は心付きませぬが、

町「はて是れは、熊が私の脊に取付けというのか知らん」

と恐々熊の脊中を撫でて見ますと、いかにも温順しくジツ

として居りますから、思い切つて熊の脊中へ確かり取付き、一生

懸命神々を念じながら目を瞑つて居りますと、件の熊は一飛びで

穴の入口へ飛上りました。お町はホツと一息、四辺を見れば谷間

々に少しずつ花が咲いて居ります。始めて蘇生の思いをなして、

町「あゝ辱けない、夢ではないか、それとも今までのが夢であ

つたか知らん」

と心を定めて四辺を見廻しますと、後の方に例の熊がジツと守

つて居ります。

町「まだお前は私を守護してくれるのか、人と見たら嚙付くべ

き猛獸が、私の命を助けるとは此の上の恩誼おんぎはない、辱けない、  
 \、さア熊よ、お前はもう宜よいから早く元の穴へお戻り、うか／  
 \して居るとお 獵かり 人ゆうど のために撃たれるぞよ、必ず／お前の恩  
 誼は忘れませぬ、早くお帰りなさい」

と熊の頭かしらを撫で／、「さア／」と熊を後うしろに向けて促します  
 と、のそり／歩き出しましたから、其の後姿を見送り、手を合  
 せて、

町「あゝ有難い、辱けない」

と熊の影の見えなくなるまで暫く休みまして、又々一丁登つ  
 て後うしろを見ますと、横に熊が来て居ります。

町「えゝ、まだお前は安心せぬか、此処こゝまで来れば大丈夫じゃ、

何うぞ帰つて下さいよ」

と頭を撫でて居りますと、

猫「やア女郎、脇へ寄れ、その熊を撃つのだ、早くく」

と声掛けられてお町は恟り驚き、

町「なゝゝゝなゝゝ何と仰しやいます、この熊をお撃ちなさると、

そりやアまあ惨たらしい」

と熊の惣身に抱付きました。此の体を見るより猫人は益

々大音に、

「汝え其処退かねえか、そんな真似をして居ると共に打放す

ぞ」

町「いゝえ、この熊は私が命の恩人でございます、何うぞ助け

て下さいませ、今頃熊をお取りなさいましても、左程のお徳にも  
 なりますまい、どうぞく助けて下さい」

と熊の前に立塞たちふさがり、両手を合せて拜んで居ります。

三十二

一人の獵かり人ゆうどは他の獵人ほかに向いまして、

甲「おい、あの女め、熊に抱付いたぞ、ありやア只たゞ者ものじゃア  
 あるめえ、魔法使か化物だろう、いつそ人ぐるみ撃殺してしまお  
 うじゃアねえか」

と鉄砲を向けますと、

乙「これく人間を撃つと又名主殿へ呼付けられて酷い目に遇うぞ、まア待てく」

甲「それもそうだな、やい女郎め、其の熊ア汝え縛つて引いて来いやア」

乙「おいくそんな無理な事を云うなつてば……女郎に熊ア連れて来られるもんか、何か仔細があるに違えねえだ、汝ア此処に只鉄砲を向けて見張っているが宜い、己ア名主殿へ往つて話して来べえ」

甲「そんなら早く往つて来いよ、これ女郎、その熊ア逃がすと汝え撃つぞ」

と暫く山と山、谷を隔て、睨み合つて居りました。

町「それ見なさい、お前は今更逃げる事も出来ない、あの獵人が万一お前を撃つならば、私も共に命を棄てましょう、必ずくお前ばかり撃たせはせぬ、世にまします神々よ、たとい獸類なればとて、命を助けし大恩あるもの何うぞ助けて給われかし」

と熊の傍そばに寄り添いまして、

町「さア穴の方へ往ゆけよ、さアく」

と追いやる如く引立つれば、熊は頷うなずく様子にてお町の顔を一度見て、一散走いっさんぽしりに谷間の方へ駈け出します。

町「それ撃たれなよ」

と云う間まもあらばこそ、一発ズドンと打放うちはなしました。お町は熊を見返りまして、

町「やれ撃たれしか」

と云う間にまた一発放ちました。さてお話變つて、文治の漂い着きました無人島は、佐渡を離れること南へ何百里でございますか、島の大きさも確しかとは分りませぬが、白鳥、鸚鵡おうむ、阿呆鳥などいう種々しゆ／＼の鳥が沢山居ります。文治は尋ねあぐみて殆どほとん氣絶ていの体でございましたが、暫くして我に返り、

文「あゝ天何故なにゆえに我を斯かくまで懲らしめ給うか、身に悪事をなしたる覚えなきに、如何いかなれば斯く我を苦しめ給うぞ、世にある時は人を助け、人のために人を懲こらしもし、また彼の友あ之助を助けるために蟠龍軒の屋敷へ踏入り、悪事加担の奴ばらを切殺したりとは云いながら、これ私慾のためならず、世のため人のため、天

に代つて誅戮ちゆうりくを加えたるに過ぎざれど、其の職其の身にもあらぬため却かえつて罪となりつるか、かゝる無人島に彷徨うろついて徒いたずらに乾殺され、後世人の笑いを受けるより、寧いっそ此の場に切腹いさぎよして潔く相果て申さん」

と覚悟いたしましたが、また思い直して、

文「いや、見すく蟠龍軒により似寄の者が、新瀉の沖なる親船に忍んで居おると聞きながら、武士と生れて一太刀怨ひとたちみもせず、此の儘死ぬるも残念至極、また女房とても生死の程も分らぬ中うちに、空しく無人島の鬼と化したる其ののち後に、それと知つたなら嘸さぞかし我身を恨むであらう、さぞや蟠龍軒が笑うであらう、こりや土を喰つても死なれぬわい、よし／＼二人の舟子ふなこの衣類はを剥いで、船の修し

覆ゆふくの材料となし、獸類魚類さては木の実を搜して命を繋つなぐ工夫が肝腎かんじん、ウム、向うに見えるは鳥なるべし」

とやおら身を起して腕に覚えのひとつぶて一礫、見事に中あたつて白鳥一羽撃留うちとめました。やれ嬉しやと切きりいし石を拾うて脇差の柄つかに打付け、袂たもとにあり合う綿に火を移し、枯枝にその火を掛けて焚火たきびをなし、また樹きの枝を折つて樹から樹を柱に、屋根をこしらえて雨露あめつゆを凌しのぐの棲家すみかとなし、先ず其の日暮しの用意は出来ました。

文「これで先ず露命つなを繋ぐ趣向が出来たというもの、此の上はいちじつ一日も早く此の島を脱ぬけ出いでて、再び蟠龍軒めぐに廻り合あひ、武士の嗜たしなみ思しう存分かたきに敵を討たなければならぬ、あゝ、我わは斯かかる無人の島に漂うて辛うじて命を継つなぎ居おるに、仇あだは日々夜ひつよ々に歡樂

を極めて居ることであろう、實に浮世とは申しながら、天はさま  
 /＼に人を操るものかな、蟠龍軒よ、此の方が再び廻り合うま  
 では達者で居れよ、我妻もまた此の世に居らば何うぞ無事で居  
 てくれよ」

と心の中に祈らぬ日とはござりませぬ。別に話し相手という  
 もなく、只だ船を繕うことにのみ屈托して居ります。折々  
 木を切り魚を捕りますごとに、思わず、

文「汝おのれ蟠龍軒、切つてく切殺してくれん」

と大声たいせいに呼よばわりましては又我に返り、

文「これで思いが届かねば、人と生れた甲斐もなし、蟠龍軒達  
 者で居れよ」

と云う折しも、木蔭こかげに怪しき声ありて、「達者で居れ」という。文治は暫く四辺あたりを見廻しまして、

文「さては何者か、我が哀れ果敢はかなき境涯を見て笑うものと見えるわい」

と体たいを潜めて様子を窺うかがつて居りましたが、別に怪しい様子もござりませぬ。

文「はて、不思議なこともあるものだ、達者で居れと己おれの口真似をしたのは何者か知らん、まさか夢ではあるまい」

と段々山深く入いりこ込んで、彼方あちら此方こちらを尋ね廻りますると、高き樹の上に一筋の矢が刺さつて居ります。

三十三

文治は端なくも樹の上に征矢を認め、

文「はて、彼処に矢の刺さっている処を見れば、今は人が居な

いにしても、我のように漂うて来た者があるに違いない」

と独語をいいながら其の樹に攀登り、矢を抜いて見ます

と、最早竹の性は脱けて枯枝同然、三四年も前から雨曝しにな

っていたものと見えて、ぽきくと折れます。文治は窃ツとこ

れを抜取りまして、

文「チエ：有難や、これこそ確かに人の造りし征矢、案に違わ

ず此の島は折々四辺の島人の訪い来る島に相違ない、たとい其

の島人が鬼であろうが蛇じやであろうが、事を分けて話したら、よもや頼みにならぬ事もあるまじ、やれ嬉しや、やツ……それく、今達者でおれと口真似をしたのは其の島人にはあらざるか、但し心の迷いかは知らぬが、かゝる矢種やだねのあるからには、何時いつしか人の来るに相違ない、あゝ有難いく〜」

また木蔭に声ありて、

「あゝ有難いく〜」

文「いや、今のは確かに……」

と四辺あたりを見ますと、一羽の鸚鵡おうむがつくねんと樹の叉またに蹲うずくまつて居ります。文治は心中に、「さては鸚鵡でありしか」と我ながら可笑おかしさに耐えず、

文「達者で居れ」

鸚「達者で居れ」

文「馬鹿野郎」

鸚「馬鹿野郎」

なか／＼よく人の真似を致します。

文「やツ、これは面白い」

と其の鳥を押えますと、平生人の居りませぬ鳥でありますから、少しも人を恐がる様子もなく、馴々しく手の上へも止ります。

文「これは好よい鳥を見付けたわい」

とそれから二三の鸚鵡を押えて、住居すまいへ持帰りまして、「旦那

様か、お町でございます」などと口真似をさせるのが何たのしの楽

み。日々鸚鵡を話相手同様にして其の日々を送つて居りました  
が、何分にも島には虫が多く居りまして、少しも火を絶やすこと  
が出来ませぬ、昼夜とも焚火をして其の側に寝起して居ります。  
虫が多いくらいですから、夏は随分暑うございますが、冬は案外  
暖かく、寒中でも四月頃の陽気であります。月日の絶つのは早い  
もので、早くも一箇年を過ぎました。待てど暮せど人も来ず、  
身の上にも別に變りたる事もなく、食物を漁るの外は日々船  
繕いに余念なく、無事に大海へ乗出すことの出来るようにと工  
夫する外には何の考えもございませぬ。此の島へ上つてから最早  
一年余になりますから、着物は切れ、髯はぼうくとして、何う  
見ても人間とは思われませぬ。今日も船繕いに疲れて、夜に入り

木の实などを食べて、例の通り焚火の端に打倒れて一寝入りいた  
 しますると、何者にや枕元に立つて揺り起すものがあります。文  
 治はがばと撥起はねおき、

文「いや、其の方は何人なにびとじゃ、おゝ、お町ではないか」

町「はい旦那様、ようお達者でおいで下さいました、お懐かし  
 ゆうございます」

文「ウム、町や、そちも達者でいてくれたか、まア何うして斯か  
 様な処ようへまいりしぞ、して能く私わたしの居おる処が知れたの」

町「はい、あの峠で端なくも貴方にお別れ申してから、さま／＼  
 の艱難かんなん辛苦しんくをいたしました、それでも神様のお助けで、  
 虎あぎとの顎あぎとを遁のがれまして、再び貴方にお目に懸ることが出来ました、

これと云うのも矢張神様のお助けでございますやつぱり

文「まあ何は扱置きさてお、明暮其方あけくれそちのことを案じぬ日とはなかつた、宜く達者よでいてくれた、人も通わぬ無人島、再び其方に逢うというのは斯こんな嬉しいことはない」

町「はい、貴方もお達者で」

と後は涙あとに物云わせ、暫しばし文治の顔を見詰めて居りますと、文治も堪こえ兼て熱い涙を流しながら、お町の手を握くちなわつて引寄せますると、足もとから長さ三尺にも余ります蛇くちなわがのたりを打うつてずるくく。お町は驚いて、「あれツ」と夫もたに凭もたれかゝりますと、文「町や、こんな事は毎日の事じゃ、何どうも致いたしはせぬ、お町

々々」

と呼べども答えはございませぬ。文治は眼をこすりながら、

文「えゝ、また夢か、馬鹿々々しい」

総身の汗を拭いまして、

文「もう夜よが明けたのか、誠や聖人に夢なしとか、心の清らかなる人に夢のあるべき筈はない、我は夜よるとなく昼となく夢ゆめ現うつに心を痛め、さながら五臓を搔きむしらるゝの思い、武士の家に生れながら腑ふ甲が斐いなし」

と我と我が心に愧はじて、焚火の辺ほとりにてほつと息を吐く折しもあれ、怪しや弦げんおん音高く一枝の征矢は羽呻はうなりをなして、文治が顔のあたりを掠かすめて、向うの立木たちきに刺さりました。

文「やア今の夢といい、また矢の飛び来きたりしは此の身の助かる

前兆か知らん、此の身が彼のまゝ寝ていたら、或は此の矢のためにあたら命を失ったかも知れぬ、妻の夢のため眼を覚せしところを見れば、定めしお町がやおよろず八百万の神々に此の身の無難を祈つているのであろう、あゝかたじけ辱ない」

人情の常として、何なんに付けても思い出すのは女房子でございませぬ。

文「あゝあぶな危かつた」

と思う間もなく、また二の矢がブウンと羽響きをなして飛んで来ました。文治はハツと身を拵ひねり、矢の来た辺あたりへ眼を付けて、

文「やアゝ拙者は決して怪しい者ではないぞ、漂流いたして難儀の者、助けたまえ」

と声を限りに手を合せて助けを乞いました。が、弓取る人は、つんぼ 聾か但しは言葉の通ぜぬためか、何程手を合わして頼み入つても肯き入れず、又も飛び来る矢勢やせい鋭く、殊ことに矢頃近くなりましたから、あわ 憫れむべし、文治は胸のあたりを射通されて其の儘打倒れました。

三十四

文治は凶らずも二の矢を射られて倒れたまゝ、身動きもせず様子を窺うかがつて居りますと、弓を提さげたる島人しまびとが、小石を拾つて打付けましたけれども、文治は少しも動かぬものですから、死んだと思つてか、いよく側に寄りまして、文治の胸元に刺さりま

した矢に手を掛け、引起そうと致します其の手をむんずと掴んで起き上りますと、島人は恟りして、

島人「あゝ、あゝ」

文治は手を取った儘、胸元に刺したと見せた矢を片手に持ち、

文「これ島人、最前から怪しい者ではない、助けてくれと申した言葉は其許そのもとの耳に通じないか、我は難船した者でござる、頼りなき漂流人でござるぞ、お聞入れなすつたか、宜しいか」

と手を放しますると、又々腰に差したる木刀よう様の物を持つて文治に打つてかゝる。その小手下こてしたを搔潜かいくぐつて又も其の手を確しかと押え、

文「はて、此奴こいつは言葉が通ぜぬと見えるわい、何時いつまで問答し

ても無益なり」

と考へ直して、手真似口真似して「己おれは決してお前に仇あだをなす者ではない、漂流人で難儀して居おる者である」ということを知らせますと、少しは分つたものと見えまして、強しいて手向いする様子もございませぬ。

文「あなたは何処どこからお出いでになりました、何なんと申すお国のお方かたでございます」

島人「これ、己おれえ島だ」

文「成程、何なんと申す処ところからお出でかな」

島人「これ、己おれえ島だ、彼方あつちからカノーで来ただ」

文「左様でござるか、どうぞ貴方の島へ御同道して下さいまし」

と手真似かた／＼申しますると、

島人「己え此の島で鳥を捕るだ」

文「左様ならば私も同道して鳥を捕るお手伝いをいたしましよ  
う」

文治はもう此の島人を逃がしては此の島を出る機会がないと思  
いまして、いろ／＼上手を使つて、話も確と分りませぬが、片  
言まじりで交際いながら、彼方此方を経廻つて、さま／＼の  
鳥を撃取りました。最早日暮になりましたが、島人は夜に入つて  
も帰る気色がございませぬ。勿論無人島は虫や獣が沢山居りまし  
て、慣れぬ身には安心して泊ることが出来ませぬから、島人は夜  
に入つて一夜を明かす所存と見えます。併しこう何か思案して居

りますから、文治は、

文「さア〜」

と急せき立て、海岸へ出て見ますと、舟がございます。只今申上

げましたカノウと申しまするは舟のことでありませぬ。これは丸木

で彫ほり上げました物で、長さは凡およそ三さん間げん、幅は二尺五寸ぐらいあ

ります。只今考えて見ますと、大阪の博物館にあります、古風の

独まる木き舟ふねのようなもので、何なんの木か一向分りませぬ。舟といえ

舟、人の二人も乗りますと、外ほかに何も置く処はございませぬ。

さア何どうか此の舟へ乗せて連れて往つてくれと申しますと、島人

は何なんだか未まだ文治を疑うたぐつて居ります様子、飛乗る途端に文治を陸おか

へ突き放し、自分一人が飛乗りまして漕こぎ出そうと致します。併しか

し海岸は遠浅で、岩角が沢山有りますから思うように舟が出ませぬ。是幸いに文治は突いきなり然海へ飛込み、カノこべりの小縁に取付きました。その手を件くだんの島人が木刀を振上げて打とうと致しますから、文治は手早く其の手を取つて押え、其の儘舟へ飛上りまして、

文「やい最前から是ほど申しても分らぬか、いかに言葉が碌ろくろく々々通ぜずとも、あれ程手を合あわして頼んだじゃないか、いよ／＼肯きかずば打殺うちころすぞ、さア何どうだ、これでもか」

と手を振ねじあ上げますと、

島「ウーム、負けろく」

文「分つたか」

島「おおすみあきら大隅明へ……」

文「その大隅明と申すのは其許そのもとの名か」

と指さし致しますると、

島「えツく」

と親指を出しましたので、

文「さては此の島人の居おる島に大隅明という島しまつかさ司しが居おると

見えるわい、其の人ならば必ず分るであろう、召使同様な此奴こいつが

分らぬのも無理はない我が舟われに乗るのを拒んで手向いしたという

のも、我が同類を殺しはせぬかと疑うたぐつての事であろう、尤も千万もつと、

併しかし我が強われ力ごうりきに恐れてか、温順おとなしくなつたとは云うものゝ、油

断はならぬわい」

と文治は不図ふと思い付きまして、提物さげものを取出して島人に遣つかわし

ますると、島人は嬉しそうに繰返し／＼見て居ります。又文治が胴巻の中より金を取り出し、一分銀一枚を与えますると、島人は然も嬉しそうに之を押し戴きました。掌の上に乗せて、ためつすがめつ見る様は、始めて手にしたものは思われませぬ。

文「こう喜ぶところを見ると、金ということを知つて居るものと見え。併し島司が有つて見れば、この金を遣つたところで、自分の物にするという訳には行かまい」

と感付きましたから、又々銭を出してやりますと、島人は両手を支き、頭を下げて喜んで居ります。

さて文治は島人の喜ぶ様子を見まして、

文「漸ようやく心が解けたと見えるわい、さア舟を漕ぐように」

と手真似で知らせますと、島人は頷うなずき、篋へらのような物を出し

まして、ギユウくと漕ぎ始めました。只今の短艇たんていのようなも

のと見えます。始めの内は風もなく、誠に穩おだやかな海上であります

たが、夜よの更ふけるに従つて浪はますます烈はげしく、ざぶりくと舟の

中に汐水が入りますのみか、最早小縁こべりと摩すれくになりまして、

今にも覆くつがえりそうな有様でございます。文治は心うちの中に、

「又も難船か、何なんたる不幸の身ぞ、八百万やおよろずの神々よ、どうぞ

一命を助けたまいて、一度蟠龍軒めくに遯あり返りますよう、又二つに

は女房お町に逢いまして、共々に敵討の出来まするよう、助けたまえ護らせたまえ」

と思わず声を放ちて祈りますると、島人は不思議そうに文治の顔を見ては、何うかされるのかと怪あやしんで居ります。文治はそれと心付きて、島人を励まし、自分も力を添あやつえて舟を操りましたが、文「いや待てよ、何処どこの島へ往くのか知らぬが、磁石も無ければま的ともない、何方どっちの方へ往く所存か知らん、困ったものだ」と思ひまして、

文「これ／＼島人、何処まで往つても見当が知れぬではないか」と真似をして見せますと、

島「風暑い」

と申します。さては南の方へ往くのかと少しは安心いたしました。たが、兎角する内に東の方が糸を引いたように明るくなりました。文「はゝア、東は彼方の方だな、途方もない見当違いをして居るものだ、大分浪も静かになつたようだが、こうして居る内には何れかの島へ着くであろう」

と夜の明けるに従つていよく安心いたしました。よう／＼其の日の巳刻頃になりますと、嬉しや遙か彼方に当り微かに一つの島が見えます。これぞ当時は八九分通り開けて居りますが、小笠原島でございます。文治は盲亀の浮木に有附きたる心地して、「正直の頭に神宿るとは宜く申した、我は生れて此の方、不正不義の振舞をした例はない、天我を憐みたまいてお救い下さるか、

あゝ有難し辱けなし」

と喜んで居りますると、俄然一陣の猛風吹き起つて、忽ち荒

浪と変じました。見る／＼中に逆捲く浪に舟は笹の葉を流した

る如く、波上に弄ばれて居る様は真に危機一発でございます。

取付く島の見えぬ内は案外胆も据つておるものでございますが、

微かなりとも島が見えますると、頼りに想う心が出ますので、何

うしても気が焦るものでございます。文治も島人も一生懸命にな

つて居りますが、何分櫓一挺しかござりませぬから、何うす

ることも出来ませぬ。浪のまに／＼揺られて居ります折しもあれ、

大きな岩と岩との間に打込まれました。其の儘にして風の止むの

を待つて居れば宜しいのでございますが、其処が気が焦つて居る

ものですから、

文「やツ、こりや大変、もし此処こゝに斯こうして居て、今に波が被かぶつて来ると、岩間いわまの鬼と消えなければ成らぬ、それツ」

と島人を励まして、岩と岩との間に櫓はさを挟んで舟をこじり出そうと致しましたのが運つぎの尽、すわと云う間に櫓まは中程よりポツキと折れてしまう。その機はずみに舟は再び海上に飛出しました。もう如何いかんともする事が出来ませぬ。どう／＼と寄せ来る波上に車輪の如く廻りながら、彼是二三十丁も押流されましたが、又も大きな岩角へ打付けられて、無慙むざんや兩人とも打ち処ところが悪かつたと見えて、其の儘絶息いたしました。不思議にも文治が命の助かります次第のちは後のお話といたしまして、扱さて此方こなたは二居ヶ峰ふもとの麓、こんも

り樹茅きかやの茂れる山間やまあいには珍らしき立派な離家はなれやがあります。多分かりゆうど獵人うちの中の親方でございましょう。

獵人「やア喜右衛門きえもんどん、今なア二居ヶ峰にえれえ事がありやしたア、己おらアとな彌右衛門やえもんと二人での、帰けえるべえと思つたら、えれえ熊ア出やした、撃ぶつべえと思うと、側に女めさア附ついているだて撃つことが出来ねえだ、己でけア大え声で、女郎退めろうどけやアと喚がなつても退かねえでな、手を合せて助けてくれちツて泣くでえ、女郎退かねえば撃ぶつ殺すぞと云つても逃げねえだ、彌右衛門め腹ア立つて、彼奴あいつは化物だんべえから熊と一緒に撃つべえと云うだ、そんなだから己あとア後あとでまたお前めえにおつ叱ちかられると詰つまんねえだから、一ひとツ走ばしり往つて喜右衛門どんに聞いて来くべえと云つて、此処こゝへ来る

途中で鉄砲が鳴りやした、多分彌右衛門め、己おらの歸けえりを待たねえで撃つたんだんべえ、何なんぼ何なんでも喜右衛門どん、人間を撃つちやア悪かんべえな」

喜「悪いともく、たとい間違いでも人を撃ぶつ殺すと、自分の首さアおつ飛ぶぞ」

獵「やア、そりや困つた事が出来たな」

と兩人ふたりは顔をしかめて居ります。

三十六

獵かりゆうど 二人が案じて居りますところへ、見馴れぬ女が尋ねて

まいりまして、

女「はい、御免下さいまし」

一人の獵人は消魂けたましく、

獵「やアあの化物がやって来た」

喜「馬鹿野郎、そんなに騒ぐもんじやア無ねえ」

流石さすがに獵師の親方だけあつて落着いたもの。言葉静かに、

喜「一体お前めえさん様は何なんでがすえ」

女「はい、私は仔細あつて昨年夫婦連ふうふづれにて旅行の途中、二三

里あとの山中にて山賊に逢つれあひまして、連つれあ合の者は行方知れず、

私は二人の山賊に追われます途端、幸か不幸か、思いがけなく熊

の穴へ落ちまして、其の熊に噛み殺されることかと思ひの外ほか、却かえ

つて熊のために助けられまして、今まで命をながら存えて居りました、  
不憫ふびんと思召して何どうぞお助け下さいまし」

喜「何しろ怖おっかねえ姿なりだなア、化物じやアあるめえなア」

女「決して怪しい者ではござりません」

喜「はア、そんじやアお前めえは何処どこの国の者で、名なんア何ちゆうの  
か其処そこえ書つけて見なせえ」

猫「成程、喜右衛門どんが云わっしやる通り、字イ書くが一番  
宜いいだ、さア化物、字イ書けやア」

喜「紙イ無ねえが、六郎どんが置いて往った筆えあるから、これ  
で書かつせえ」

女「私は江戸の者で」

喜「まあそんな事は後あとで宜いいいから早く字を書かつせえ」

女「はい」

と筆を執とりまして古今集の中の

我が恋は行方も知らず果はてもなし

逢ふを限りと思ふばかりぞ

本所業平橋際某ぎわほうと書きました。

猫「それが汝われが名なけえ、馬鹿に長ながえ名なだなア」

女「いゝえ、これは私が子供の時習いおぼえました古い歌でございます」

猫「やア歌きやア、そんなら汝われえ唄うたえ、己おらア踊るべえ」

喜「馬鹿野郎、汝われが踊るような歌とは違ちがわア、汝われイえれえ字イ

書くだなア、これじゃアはア人間だんべえ、こんな字イ書くもな  
ア己おらが村に無ねえだ、名主どんに見せべえ」

喜右衛門が其の書いた物を持参しまして、其の村の名主に見せ  
ますと、

名主「やアこりやア能い書てじやア、喜右衛門、なぜ其の女を連  
れて来ねえか」

喜「己おれはア連れて来くべえと思つただが、出し抜けに連れて来て  
ほざかれると詰らねえだから、連れて来きねえだ」

これからお町を同道致しまして名主の宅へ連れてまいります  
と、

名「さア此方こちらへお上りなせえ、さぞ難儀しなすつたんべえ」

町「これは御丁寧な御挨拶で恐入ります」

喜「ひやアこれ女子おなご、こりや此の村の名主の紋もんざえもん左衛門様で、よく頼まつしやい」

町「有難うございます」

紋「お前めえらが熊くまおんな女先生でがすかねえ、何処どこの者にしろ、金  
がねえば仕様がねえで、村でも何どうかしべえから心しんべえ配しねえで  
居おるが宜いいだ、此の村の奥へ十丁べえ参めえりやすと寺があるだ、此  
の頃尼が死しにやして子供らア字イ書くことがなんねえで、手におえ  
ねえが、淋しかんべえが旅たび金かねの出来るまで子供らに字イ書くこ  
とを教おせえてくんろ」

町「御親切に有難うございますが、人さまに字を教えるなどと

いう手前ではございません」

紋「そうでねえ、この界限かいわいにお前めえぐれえ書くものはねえだ、  
 まアその形なりじやア仕様がねえだ、これ婆ばアどん、女の着るもんが  
 有るなら出してくんろ、さア熊女、この着物を着るが宜いいだ」

町「はい、有難う存じます、そのお寺と申すは余程山奥でござ  
 いましょうか」

紋「なアに、山ア一つ越すべえで、そうさ、これから十丁もあ  
 るかな」

町「そうでございますか、私は其の山奥が大好だいすきでございます」

喜「ひやア山奥が好きだてえぞ、それい〜化物だんべえ」

町「なるたけ人の目に掛らんのが宜しいのでございます」

田舎殊ことに山間の僻村へきそんでは別に手習師匠もござりませんので、寺の住持が片手間に教えて居ります。その住持も近頃居りませんので、お町は日々にちく子供を相手にして、せい／＼かなづくし仮名尽や名頭らぐらいを指南して居ります。偶たまには歌などを書くことも有ります。何しろ熊女が書いたというので土地では大評判おお、新潟あたりへ聞えることもござります。一いちじつ日名主紋左衛門が寺へやつてまいりまして、

紋「ひやア御免下せえまし」

町「これはく名主様、ようお出でなさいました、さア何どうか此方こちらへお通り下さいまし」

名「夕方ゆうかた、人の家うちへ来るでもねえが、急用あつてめえりまし

た」

町「急用とは何事でございましょう」

紋「先ず話をしねえば分らねえだ、此の間中新潟の沖に親船が居りやしたが、それが海賊だという事でな、その船の側に来る船は矢鱈に鉄砲を撃掛けたり、新潟あたりの旅人を欺だましちやア親船に連れだつて、素すツ裸ばだか体に剥はぎ取とつて、海うみに投ほうり込こむてえ話だ、さア御領主様も容易ならねえ海賊だてえんで、御人数ごにんずを出しても、海の中から飛道具で手向てむかいするもんだに依よつて、何どうにも手に負えねえてんだ、そこで御領主様から誰か船の中へ忍しのび込んで討取る者へは褒美を出してえ触ふれが出ただ、すると此の頃江戸から武者修行だと云つて来ていた二人の侍が、その親船へ乗込んで海賊の

親方を叩ツ切つて、船へ火イ掛けやして、泥坊を根絶ねだやしにしたが、何と強つええ侍じやねえか、大層お役所から御褒美を貰つたそうだが、その剣術の先生が今日わざく己おらア処へやつて来ただ

町「へえ、江戸表の剣術の先生でございますか」  
と首を傾けました。

### 三十七

紋左衛門は一服吸つて煙草盆を叩きながら、

紋「その剣術の先生様がな、お前めえさま様の字イ書くのを見て、此の女たゞものア只者じやア無ねえちゆうて、わざ／＼越後からお前様に会

いにござらして、私が家わしうちにいるだ、悪い事アあんめえから、ちよツくら私が家へござらつしやい」

お町は暫く考えて居りましたが、

町「えゝ其の先生と申すのは、まったく江戸のお方でございませうか」

紋「言葉の様子では全く江戸のお方に相違ねえだ」

時にお町は、

「その剣術の先生というのは若もしや蟠龍軒ではないか知らん、まこと蟠龍軒にしたところが、夫いましの誠めもあるゆえ我身一人で手出しはならぬ、また蟠龍軒にあらずとも、江戸のお侍に此の今の姿を見られるのも心苦しい」

と思ひまして、

町「はい、あなたの御親切はまことに辱かたじけのうございませぬが、零お落ちぶれ果てたる此の姿、誰方どなたかは存じませぬが、江戸のお侍に会いますのは心苦しゅうございませぬ、何卒どうぞお断り下さいまし」

紋「いや、それは宜よくあんめえ、たとえ昔は何様どんな身分だつても今は今じゃねえか、海賊を退治して御領主様から莫ばくだい大の御褒美を頂きなすつた位の大先生だ、会つて悪いこともあんめえから、会ようが宜よいじゃねえか、事に依よつて金でも呉れさしつたら、その金で路用も出来るてえもんだ、二つにはまた我わが亭主の居所も知れるかも知れねえだ、そんな因いんごう業なことを云わねえで、私わしと一緒に往いかつせえ」

町「いゝえ、おぼしめし思召は有難う存じますが、お断り申します」

紋「まあ然そう云わねえでござらっしゃい」

町「此の儀ばかりは何どうぞお免ゆるし下さいまし」

と押問答して居りますると、表の方ほうにて大伴蟠龍軒外二人ほかににんが、  
「えゝ、そんな事であろうと思つて、表に立つて聞いていた、

御免よ」

と押取おつとりがたな刀で入つてまいりました。お町は素もとより顔を知らぬ

ものですから、蟠龍軒とは心付かず、

町「いゝえ、お恥かしゆうござんす」

と裏口から逃出しました。

大「それッ」

と云うより早く、遠見とおみに張つて居りました門弟いちにん一人、一筋道たちふさに立塞たちふさがり、

門人「どツこい、そう肯うまくはいかんぞ」

と取押うしろえる後から追きたい来りし蟠龍軒、お町を取つて引据ひきすえ、と見ると心の迷うちいか、小野庄左衛門の娘の顔だちと少しも違ちがひませぬ、心の中に、

大「はて、よく似た女子おなごもあるものだ、併しかし彼がこんな山奥に  
来よう訳もない、寧いっそ打明けて蟠龍軒と云おうか、いや／＼桜の  
馬場でお町の親父庄左衛門を殺し、脛すねに疵きず持つ此の身、迂濶うかつなこ  
とは云えぬわい、他人の空似そらにということはあるが、眞実庄左衛門  
の娘かも知れぬ」

と思ひました故、さあらぬ体にて、

蟠「これ／＼女中、お前は何処どこの者だか知らんがな、拙者の眼には都の者としか見えぬ、拙者も元は江戸の者だ、難儀なことがあるならば何処までもお貢みつぎ申そう、これ／＼女中、そんなに力を出しても……これ門弟、えゝ氣の利かぬ奴らだな、手てづた伝えというのではない、何をまご／＼して居おるのだ、予かねて貴様たちに言付けて置いたではないか」

門弟二人は領うなずきまして、

「左様々々、まア名主、そなたも我らと一緒にまいれ」

と無理に連立こなたつて此方へまいりました後あとで、

蟠「これ女中、もう其許そこもとが何程一もが※いても逃すもんじゃアな

い

町「あなた、何うぞ御免下さいまし」

蟠「分らん奴だな、えゝ面倒な、じたばたすると斯様かよういたすぞ」とお町を其の場に押倒し、其の上に乗し掛つて、

蟠「さア何うだ、今更何うも斯うこもねえ」

今はお町も一生懸命、用意の懐剣を取出そうと致しますると、

蟠「やア此こいつ奴め、刃物を持って居やがるな」

ぎゅツと其の手を押え付けました。

町「あいたゝゝ」

蟠「さアこれでもか、何うだゝ」

と無理強談ごうだん、折柄おりからくれかた暮方の木蔭よりむっくり黒山の如き大熊

が現われ出で、蟠龍軒が振上げた手首をむんずと引ツ掴み、ど  
うと傍かたえに引倒しました。思いがけなき熊の助勢にお町は九死きゆうしの  
境さかいのがを遁れ、熊の脊に負われて山奥深く逃げ延びました。何時いつまで  
経つても先生が帰つて来る様子をございませんから、二人の門人  
は氣遣いながら、名主同道にて引返してまいりますと、こは如  
何いかに、先生が樹きの根方ねがたに倒れて居ります。恟びつくり驚いて、

門「やア先生が倒れて居る、先生々々、何どうなすつた、やツこ  
りや大変、先生が氣絶して居る、これ名主、水を、早くく」  
二人の介抱で蟠龍軒は漸ようやく心付きました。

門「先生、お氣が付きましたか」

蟠「いや何どうも飛んだ目に逢おうた」

門 「何うなさいました彼の女は」

蟠 「とうとう逃げられてしまった」

門 「馬鹿々々しいなア、併し<sup>しか</sup>先生、あの婦人は全く船中でお話のあつた庄左衛門の娘お町と申す者でございましょう」

蟠 「まったくお町に相違ない、相違ないが、何う<sup>ど</sup>して斯<sup>こん</sup>様な山奥へ来て居<sup>お</sup>るか、それが分らぬ、併し筆蹟と云い顔<sup>かお</sup>形<sup>かたち</sup>といい、確かにお町に相違ない」

門 「そりやア惜<sup>おし</sup>いことをしましたなア、やア先生、大層お手から血が出ているじゃア有りませんか」

蟠 「実はこれがために氣絶したのじゃ」

門 「あのお町が喰付いたのですか」

蟠「いや／＼何か其処そこらに居りはせぬか」

と云われて門人二人は、「何が／＼」と云いつゝ五六間けん先へま  
いりますと、山のような真ツ黒な物がむず／＼／＼。

門「やゝツ／＼……やゝツ……熊だ」

と叫びながら一同其の場を逃去りました。

三十八

お町は熊に助けられて山深く逃げ延びましたが、身を寄せる処  
は勿論、食物くいものもございませんから、進退いよく／＼谷きわまりました。

その辺あたりを打見ますと、樵夫きこりの小屋か但しは僧侶が坐禅でもいたし

たのか、家の形をなして、漸く雨露を凌ぐぐらいの小屋がありま  
す。

町「たとえ此の山奥で餓死するとも野天で自殺は後日の物笑  
い、何者の住いかは知らぬが、少々お椽を拝借いたします、南無  
阿弥陀仏く」

と静かに坐を占めまして、何方が江戸か分りませぬが、

町「亡き御両親様、此の身が此の世に出でし幼き時より、朝夕  
の艱難苦勞あそばしてお育て下さりました甲斐もなく、無事で  
亡き魂をお弔い申すことも適いませず、人も通わぬ山奥でむざ／＼  
相果るとは、何たる不孝でございましょう、くれ／＼もお  
許し下さいまし、たま／＼御両親のお鑑識にて、末頼もしき夫を

持ちましても、運拙つたなくして重なる不幸、今頃何処どこに何うどしておいでなされるやら、但しは山賊のためにお果てなされしか、私わたくしは不幸にも斯かかる深山みやまに流浪の身、一粒の米もなければ居所もなし、此の儘うえじに餓死うえじにいたすでございましょう、不孝な娘とお叱りなきよう、くれ／＼も願いまする、先程無法な振舞をした劍客けんかくしや者しやというは、面おもてもとは素もとより知りませぬが、江戸の者しやといい、又大伴おほとも……万一敵かたきではないか知らん……たとえ敵であればとて、先程の手並ではとて、迎むかも及ばぬ女の悲しさ、寧いっそ辱はずかしめられぬ其の内に、おゝ左様そうじや左様じや、此の身を汚けがしては其れこそ自害にまさる不孝不義、旦那様だんなさまお免ゆるし下さいまし」

と覚悟の折柄、がさ／＼音がしまするので、瞳を定めて見ます

ると、例の大熊でございます。

町「おゝ、そちは何時いつぞやの熊であつたか、先程は宜よう加勢をしてくれやった、其方そちと私わたしと何どういう因縁か知らぬが、去年こぞの冬から我身を助け、今又此処こゝに来合あわして、既すでのこと辱はずしめを受けようとする危急を救うてくれるとは辱かたじけない、有難い、よう聞分けてくれよ、かく申す私は親の代から浪人の身とは云いながら、武士の娘で武士へ縁付き、夫の出世大事と身を粉こに砕くだきて辛しん勞ろうの甲斐もなく、又我が夫とても数多あまたの人を助けた事こそあれ、塵ちりほども我が心に愧はずるような行いをした事はない、それに如何いかなる因果めぐの廻り合せか、重ね／＼の不幸続き、いよ／＼今日こんにちという今日は死なねばならぬ事に成り果てました、今までの恩誼おんぎはた

とえ彼の世へ往こうとも決してく忘れはせぬ、此の上は其方も  
 山奥へ帰り、くれ／＼も用心して 獵 人や無法者に出会わぬ  
 よう、無事で達者で 長 生 してくれよ、思えばく、人間を助け  
 るほどの情深きお前をば、何故天は人にしなんだか、世はさま／  
 〃＼とは申しながら、甲斐なく思うぞよ」

と熊の頭を撫でて暫く 有 難 涙 にくれて居りますると、熊も  
 聞分けてか、 悄 然 と 萎 れ 返 っ て 居 り ます。お町は涙を払い  
 ながら、

町「さアく、もう覚悟の我が身、何の怖いこともない、早く  
 帰ってくれ、さゝ帰ってくれ、まだ私を慕っていますか」

と思わず熊の首のあたりに飛付きまして、よゝとばかりに泣き

沈んで居りましたが、暫くして我に返り、

町「さゝ、夜よでも明けて獵人に見付けられては其方そちが危あぶない、早  
う帰つてくれ」

と両手を合せて伏し拝み、懐中より取出したる夫文治より譲り  
の懐剣を抜放ち、

町「旦那様、御免遊ばせ」

とあわや喉のどぶえ笛へ突き立てようと身構えました。さて文治が再  
度の難船に舟人諸もろとも共氣絶きぜついたしました次第は前回に申上げまし  
た。天義士を棄てず、あたりの船頭がこれを見付けまして、

「やア、彼処あそこに旅人が倒れてらア、それ難船なんせん人々々々しつか、確  
りしろよ、おゝ気が付いたか」

文「これはく何処どこのお方か存じませぬが、お助け下さりまして有難う存じます」

船頭「とても駄目だと思つたが、よく気が付いたなア」

文「有難う存じます、今一いちにん人の舟人は如何いかゞ致したか、御存じありませんか」

船「此処こゝにいるじゃねえか、見なせえ、此の通りの打傷、いろく介抱もしたが、とても駄目だ、諦めなせえ」

と聞いて文治は舟人の亡なきがら骸すがに縫り。

文「これ島人、これ島人」

もう冷え切つて居りますから、いくら呼んでも甦よみがえりは致しませ

ぬ。

文「さてく不憫なことを致したわい」

船「どうも仕方がねえだ、諦めなざるが宜い」

文治は夢を見たような心地、

文「一体こゝは何処でござりましょう」

船「何処ツて大変な処だ、己ア新潟通いの船頭だが、昨日の難風で、さしもの大船も南の方へ吹付けられ、漸う此処まで帰る途中、毀れた小舟に二人の死骸、やれ不憫なことをした、定めし昨日の風で難船したのだろうと、幸いに風も静かになったから、

手数を掛けてお前がたを助けてやったのだ」

文「何ともお礼の申そうようもございませぬ、こゝは越後の新

潟近所でございますような」

船「どうしてく、これから新潟までは何百里という海路、三日や五日で往いかれるもんじやアねえ」

と聞いて文治は今更あっけ呆気あに取られて居ります。

三十九

文治は暫しばし呆気あに取られて居りましたが、

文「新潟通いの船とあれば、定めし此の船は新潟へまいるのでございましょうな」

船「へえ、新潟へ往いく船でがす、見受けるところお前めえさん様はお武家様のようだが、一体何処どこのお方かね」

文「私は江戸の者でござります、故あつて越後新潟へまいりま  
す途中、信州二居ヶ峰、中の峠にて山賊に出会い追ひ往く<sup>うち</sup>中、女  
房を見失い、彼方<sup>あちらこちら</sup>此方と尋ねますと、新潟沖に大船<sup>たいせん</sup>があつて、其  
の船に海賊が……」

と云いかけて四辺<sup>あたり</sup>を見廻し、

文「多分その大船に居る<sup>お</sup>であらうと人々のいうにまかせ、取急  
ぎ新潟へまいりまして、旅<sup>りよしゆく</sup>宿<sup>しゆく</sup>にて船の様子を尋ねて居る<sup>お</sup>と、  
こうくういう奴の勧めに従い、二人の舟人<sup>ににん</sup>を雇うて沖へ乗出した  
ところが、凶らずも難風に出会い、その二人の舟人は途中に於<sup>おい</sup>て  
相果てました、一人<sup>いちにん</sup>の舟人が死<sup>しにぎわ</sup>際の懺悔<sup>ざんげばなし</sup>話を聞きますると、  
旅宿<sup>あきんど</sup>で船の世話をしてくれた商人も其の二人の舟人も同じ穴の

貂むじな、やはり海賊の手下であつたそうでございます、察するところ  
 私わたくしの女房も同じ仲間の奴かどわかに勾引され、海賊船かいぞくぶねに取押えられて  
 居りはせぬかと案じて居おる折柄、こゝに死んで居る島人が、私の  
 漂うて居つた無人島きたへ来りしゆえ、辛うじて其の舟に乗込み、一  
 度新潟沖ちやくに着いたし、女房ありかの在所を尋ねようと思つて小舟を乗出  
 したところが、又も難船して此の始末、お救い下さいまして有難  
 う存じます、只今貴所あなたがた方より此の船は新潟行ゆきと承わつて、恟びつくり  
 するほど喜びました、此の上の御親切どに何うか私を新潟までお連  
 れ下さいまし、此の御恩は死すとも忘れませぬ」

船「まあ、お前めえさん、安心して目でも眩まわすといかねえ、薬で  
 も飲まつせえ」

文「何から何まで辱かたじけのう存じます」

船「お前めえらが連つれの死んだ人ア何どうすべえ」

文「ほんに心付かなかつた、只今まで船の中で死んだ者は何う  
いう扱あつかいを致すものでしよう」

船「陸おかが近けりやア伝馬てんまへ積んで陸へ埋うめるだが、何処どこだか知ん  
ねえ海中じゃア石ウ付けて海へ打投ぶっぽり込むだ」

文「左様ですか、永く置いては船の汚けがれ、此の儘何どうぞ」

船「おが合点がってんだ、客人成じょうぶつ 仏ぶつさつせえ、それく江戸の客人  
危ねえぞ」

文「はい、有難う存じます、南無阿弥陀仏く」

さて文治は船頭の介抱にて身体も以前に復し、それ／＼金を

出して礼をいたし、日を経て無事に新潟沖へ着船いたしましたして、  
 伝馬で陸おかへ上りあが、一同無事を祝して別れを告げました。これより  
 文治は彼方あなたこなた此方と尋ね廻りまして、漸ようやく此の前泊りました旅籠屋  
 へまいりました。

文「はい、御免下さい」

女「入つしやいまし」

文「一昨年中はいろいろお世話になりました」

と云われて主人は暫く文治の顔を見詰めて居りましたが、漸く  
 思いついたと見えまして、

主「やア旦那様、よくまあ……ほんにマア宜よく御無事でお帰り  
 なさいましたなあ、何どうして助かりやしたえ、あの時私わしがあれ程

お前様めえさまに、ありやア海賊の手下だと申しやしたのに、何でもお前なん様ア見物に往いくだつてお出でなさりやしたが、それきりお歸りが無ねえから、いくらお侍でも殺されたんべえと思つていやしたが、宜くまア歸つてござらした、お目出度めでとう存じます」

文「いや、あの二人の舟人と親船までまいらぬ内に難船してな」

主「へえー難船しなすつたかえ」

文「どうせ魚の餌食えじきと覚悟して船の漂うまゝに任したのが、却かえつて幸いとなつて無人島むにんとうへ着きましたな」

主「へえ、無人島、それから何どうしなすつた」

文「いやはや無人島でさん／＼難儀いたしました」

主「まア、そりやア飛んだ事でござりやした、お同伴の船頭二

人は何<sup>ど</sup>う為<sup>な</sup>せえましたね」

文「お前のいう通りあの二人も海賊の手下であつた」

主「それ御覧なせえ、それだから私<sup>わし</sup>があんなに止めたのに到<sup>とうと</sup>

頭<sup>う</sup>強情をお張りなさつて」

文「今更そんな事を云つても追付<sup>おつ</sup>かない」

主「その二人は何<sup>ど</sup>うしやした」

文「天罰は恐ろしいもので到頭船の中で死にました」

主「旦那様がお殺しなすつたのでやすかえ」

文「いや左様ではない、彼ら二人は毒を喰つて死にました」

主「へゝえ成程、因果ちゆうものは恐ろしいもんでやすなア」

文「御主人、話は変わるが、この貼付<sup>はりつけ</sup>の中<sup>うち</sup>にある短冊<sup>たんざく</sup>は何者

の筆蹟でござるな」

主「へえ、こりや熊女が書きやした」

文「その熊女と申すのは誰でござるな」

主「何だなんか知りましねえが、信州の山の中で熊に助けられたとかいう女でござりやす」

文「はてな、この歌といい筆蹟といい好よく似た者もあるものだ  
な」

と暫く首を拈ひねつて居りましたが、

文「こりやア正まさしくお町の筆蹟に相違ない……この女はまだ生きて居おりますか」

主「生きて居おるにも何も此の通り字を書きます」

文「何処どこに此の女は居りますか」

主「此の間まで二居峠、中の峰の寺に居りやしたそうで、これを其の先せん頃ころ当所で海賊を退治しやした江戸の剣術の先生が聞付けやしてな、美人だてえので態わざ々逢いに往いきやしたところが、その熊女が逃出したそうで、けれども先生だから免ゆるさねえ、山中へ追ッ掛けてまいりやすと、何処どこを何どう嗅付けたか、大きな熊がむく／＼と出て来やして、先生様の腕を押えておっぽり出しやした、それきりさア、誰もその熊が怖おっかねえツて其の山へ往ゆく者もなアありやせんよ」

と伝聞の儘を物語りました。

## 四十

文「御亭主、それは何時頃いつごろの事ですか」

主「なアに直先月じきのことでありやす」

文「左様か、どうも有難い、就つては御亭主中ちゅうじき食じきの用意をして下さい、今から夜へ掛け、その二居峠中の峰まで往ゆかにやアならぬ」

主「へえ、あなたも熊女に逢いたいのでがすかえ、兎角剣術の先生は熊女が好きと見えますな」

文「そんな事は何どうでも宜よい、早く中食を」

主「今から何いうでも往いかつしやるか、十里べえありやすぜ」

文「次第に依よつては一晩ぐらい途中へ泊よつても苦しゆうない」

主「さア駄目ですが、雨え降ふつてまいりやした」

文「ウーム、何処どこまで天道様は此の文治をお憎にくみなさるか、これしきの雨、何程のことやある、それッ」

と身軽いに打扮いでち、夜よに入るも厭いとわず出立いたしますると、途中

から愈いよく々雨はげが烈はげしくなりましたので、余儀なく一泊いいたしまし

て、翌日二居峠の三俣村という処ところへまいります。日はとつぷりと

暮くれて足元も分らぬくらいになりました。地の理ことは宜よく聞いてま

いりましたから、岐わか路れみちに迷まいもせず、足元を見ては歩ほ一歩山

深く入いつてまいりますと、大樹だいじゆの蔭かげからのつそりと大熊おほくまが現

われ出いでました。流石さすがの文治ぶんぢも悔びりして、思おもわず二三歩あと後さへ退さがり、

刀の柄つかに手を掛けて寄らば突かんと身構えましたが、更に飛付く様子もなく、先に立つて後うしろを振向きく心ありげに奥深くまいります。

文「さては噂に聞いたお町を助けし熊はこれなるか、併しかし遥はる々、越後から雨を冒おかして此の山奥まで尋ね来て、お町で無かつた日にやア馬鹿々々しいな、何どうかお町であつてくれ、ば宜いいが」と心中に神々を祈りながら熊に尾ついてまいります。やがて半はん道みちも来たかと思ひますと、少し小高き処ひときわに一ひと際きり繁ひらりました樹こ蔭かげがあります。何か知らんと透すかして見れば、樵夫きんりが立てましたか、但たゞしは旅僧たびそうが勤ごんぎ行ようでもせし処か、家と云えば家、ほんの雨露うろを凌しのぐだけの小屋があります。文治は立止つて表から大声

に、

文「えゝ、お小屋に何方どなたかおいでなさるか、はて、人のいそくな家だが、御免下さい」

と中へ入つて見ましたが、暗がりでも少しも分りませぬ。懐中から用意の火打道具を取出しまして、附木つけぎに移し、四辺あたりを見ますと、何時いつか熊は何処どこへか往つてしまいました。

文「何どうも人の住んだような跡があるが」

と又附木を出して隈くまなく見廻しますと、柱とおぼしき処に何か書いてあります。それも木の燃えさしで書きましたのですから、はつきり分り兼ます。その内に附木は燃え切つてしまふ。

文「やア、こりや困つたわい」

と其<sup>そこ</sup>処<sup>こ</sup>らの木屑<sup>きくず</sup>に火を移して読みますと、「我が恋は行方<sup>ゆくえ</sup>も知らず果てもなし」までは読めましたが、後<sup>あと</sup>は確<sup>しか</sup>と分りませぬ。これは古今集の恋歌<sup>こいか</sup>でございませぬが、筆蹟は消し炭で書いたのですから確と分りませぬ。

文「全くお町の成れの果ではないか知らん、旅<sup>りよしゆく</sup>宿<sup>しゆく</sup>で見た短<sup>た</sup>冊<sup>んさく</sup>といい、今また此の歌といい、何<sup>ど</sup>うもお町らしい、お町であつてくれ、ば何<sup>ど</sup>れ程嬉しかりう、神よ仏よ、早く此<sup>こゝ</sup>処<sup>ち</sup>に居合す人に逢わせ給え」

と祈つて居りますと、積<sup>こ</sup>る木の葉を踏<sup>また</sup>分け来<sup>きた</sup>るは正<sup>まさ</sup>に人の足音でございませぬ。

文「はてな、今其<sup>そこ</sup>処<sup>こ</sup>へ人が立止つた様子、もしやお町では無い

か知らん」

と燈火あかりを翳かざして見ようとする途端に火は消えてしまいました。

何か口くちの中で云うて居おる言葉は確かに女の声であります。もう文

治たまは耐り兼たて、「やアお町か」と駈出かけだそうと致いたしましたが、心を

静しずめ、

文「待てよ、先刻せんこくから表うらに佇たんだまゝ近寄ちからぬ処ところを見れば、日

頃女房にようぼうに恋こい焦これている我が心に附つけ入いつて、狐狸こりのたぐいが我

を誑たぶらかすのではないか知らん、いやゝ全く人ひとかも知れぬ、兎うさぎも

角かども声をかけて見よう」

と度胸どきょうを据すえて、

文「表うらにおいてでなさるのは何方どなたでござる、私わたくしは此こゝの山中やまなかに迷まよう

て居る女子おなごを尋ぬる者でござるが……」

と云いながら静かに立つて女の側に立寄ろうと致しますと、件くだんの女は二三歩後あとへ退りさがまして、

女「おのづから涙ほす間まも我が袖に」

文「露やは置かぬ秋の夕暮」

町「えッ、そんなら貴方は旦那様か」

文「おゝ、お町であつたか」

町「旦那様ア、御免遊ばせ、おゝ嬉しい、おゝ嬉しい」

と馳はせ寄つて文治に抱き付き、胸に顔当てゝ、よゝとばかりに泣きかなし悲んで居ります。文治も拳こぶしにて涙を払いながら、左手ゆんでに確しつかりとお町の首を抱えて、

文「町や、よう達者でいてくれた、よもや此の世の人ではあるまいと思つた、よう達者でいてくれた、こんな嬉しい事はないぞ、さぞ難儀したであろう、さぞ困苦艱難こんくかんなんしたであろう、この文治もの、そちに劣らぬ難儀はしたが、天日てんぴに消ゆる日向ひなたの雪同前、胸も晴はれ々／＼したわい、おゝ斯様こんな悦ばしい事は……」

と鬼あざむを欺く文治もそゞろに愛憐あいれんの涙に暮れて、お町を抱かえたまゝ暫く立竦たちすくんで居ります。お町は漸ようやく気も落着いたと見えまして、

町「旦那様わたぐし、私は……」

文「もう宜いい、もう宜いい、何も云うてくれるな、敵かたきの手掛りも薄々知れて居おるゆえ、今に満足させるぞよ」

町「はい、旦那様、あの蟠龍軒めは……」

文「よし、左様に心配してくれるな、おゝ悦ばしい」

とお町の手を取って小屋の内に一休み、言わず語らず涙にくれている、互いの心の中うちは思いやられて不憫ふびんでござりまする。

#### 四十一

文治夫婦は深山みやまの小屋にて、島に一年蟄居ちつきよの話、穴に一年難儀の話、積る話に実いが入りまして、思わず秋の夜長を語り明しました。

文「もう夜よが明けたの」

町「おや、もう夜が明けたのですか」

と云つて居りますところへ一人の男がやつてまいりまして、

「やア旦那様」

文「おゝ、そちは國藏ではないか」

國「旦那様、漸ようようのことで尋ね当てました、これは御新造様御無事で」

町「おや、國藏さんですか」

國「まア何どうしてお二人が斯こん様な処に、夢じやアありますまいなア、私わっちやア嬉たしくつて耐たまらねえ」

文「まア其そち方は何どうして斯こん様な処へ来たのか」

國藏は涙を払い、

國「話しやア長えなげことですが、一昨年あきじゆうの秋中、旦那が越後へお出でなすつたと聞きやして、後あとを慕したつて参りめえやして、散々こ此処いらあたりを捜しましたが、さつぱり行方が分りませんので、到頭こぎつ越後まで漕付けやした、だんく尋ねたところが、斯こうくいう方が何処どこ其処そこへ泊つたと云いやすから、其処へ往つて聞きますと、二三日ぜん前に沖見物をすると云つて船に乗り出したと聞いて、私わっちアどの位くれえがっかりしたか知れやせん、まごごくくしている内に生あ憎いにく病氣かに罹りやして、さるお方の厄介うちになつて居ります中に、江戸の侍が海賊を退治したという噂、幸い病氣なほも癒りやしたから、もしや旦那ではないかと様子を聞きやしたところが、確かに大伴蟠龍軒、どうか旦那方を捜してお知らせ申したいと思つてゐる内

に、その手柄か何か知らねえが、江戸においでなさる御領主様がお抱かえになるとか云う事で、先月末に蟠龍軒めは江戸を指して出立しやした」

文「それは宜よい事を聞いた、それにしてもお前は何どうして此こ処いへ」

國「さア、その御不審は御ごもつとも尤もですが、越後にいる時分この山中に迷っている美人があると云うことを風の便りに聞きましたから、江戸に帰る途中、もしやと思つて昨日きのうから搜した甲斐あつて、此処でお二人にお目に懸るとは神様のお手引でござんしよう、私わっちアこんな嬉しい事はござりやせん」

文「あゝ、つい話に紛れて忘れて居つたが、お前は何どうして蟠

龍軒の顔を知つて居るか」

國「私わっち一向存じやせんが、女房にようぼのお浪なみが浅草の茶屋にいる頃よから宜く知つて居りました」

文「左様か、お前は女房まで連れて私わしの跡を慕つて来たのか」

國「へえ、ところが今いう通り、越後で病氣かに罹りやしたが、私わっち一文も銭がねえから可愛想だとは思つたが、お浪を稼かせぎに……」

文「なに、お浪を勤めに出したと」

國「へえ、旦那の為にやア命を助けられた私わっちども夫婦でござんす、身を売るくれえは当り前めえの事です、さア今からお支度なさいまし、江戸へお供を致しやしよう」

文「そうするとお前は、お浪を越後へ置去りにして来たのだな」  
 國「そんな事は何うでも宜いじや有りやせんか」

文「いや左様でない、幸いに文治は二度も難船して、九死一生の難儀をしたが、肌身離さず持っていた金は失わぬ、さアこの金子でお浪を請出し、そちは後からまいれ、礼は江戸で致すぞよ」

國「そんなら旦那様、折角の御親切を無にするも如何、このお金は有難く頂戴いたします、御新造様、随分危険な山路ですからお気をお付けなせえまし」

町「有難うございます、早くお浪さんを連れて江戸へお帰り下さいまし」

文「國藏、心置なく緩りと後からまいれ、さアお町、もう

斯こうなつたら一刻も早く里へ出て支度をせねばならぬ」

と衣類其の他たの支度をなし、江戸表をさして出立しまして、先まず本所業平を志して立花屋へまいりますと、何時いつか表は貸長屋になつて、奥おやしに親父が隠居して居ります。

文「御免下さい、立花屋の御主人は御在宅かね」

主「はい何方どなたさま様で、いや、これはくゝ旦那様、よくお達者でおいでなさいました」

という言葉も涙ぐんで居ります。

主「よくまあ旦那様、おや、これはくゝ御新造様でございますか、ようまあお揃そろいで、何方どちらからおいでになりました」

文「いや永なが々御心配をかけまして有難う存じます、何から申

して宜しいやら、何うも江戸を經つて後はさま／＼な難儀に逢  
 いました」

町「伯父さん、あなたも宜うお達者で」

主「さアくお上りなさいまし……おい、婆さん、お茶を持  
 て」

婆「これはまア旦那様、御新造様、何うしてまア」

主「婆や、御挨拶は後にしろ」

主「え、旦那様、私も御覽の通りの老人、料理屋を止めまして、  
 只今では表長屋を人に貸しまして、悴は向島の武藏屋へ番頭と料  
 理人兼帯で頼まれて往つて居ります、旦那様はお宅をお払いに  
 なりまして、差当り御当惑なさいましょう、実は婆さんと二人で

淋しく思っているところでございますから、おいで下さいますれば却かえつて好都合でございます」

と老人夫婦は下へも置かず懇ねんごろにもてなして居ります。

## 四十二

文治も悦んで、

文「実は差当り居所いどころに当惑いたしましたので、お頼みにまいりました、何分よろしく、お町丁度宜よかつたなア」

町「まア何より有難う存じます」

文「友之助や森松は相変らず折々遊びにまいりましょうか」

主「えゝ、もう皆さんが代り〜お尋ね下さいます、いつも森松さんが来なさると、貴方のお話をしちやア帰りには泣別れを致します、それからつい十日ばかり以前でございませうが、友之助と豊島町の亥太郎さんが落合いまして、旦那様方が無事に蟠龍軒を討つて来れば宜よいかと、大層心配しておいでなさいました」

文「はい、手前どもゝ其の決心で江戸表を立つてまいつたのでござりませうが、行ゆき違ちがいまして、又ぞろ江戸へ引ひ返かえしてまいるような事になりました、此の上は松平公の御家中藤原氏しを頼み、手続きをもつて尋ねましたなら、蟠龍軒の居所いどころの知れぬことも無かろうと思ひます」

主「それは〜、何どうかまア此この老翁おやじの生きて居うちります中に、

敵かたきが討てますれば、もう私わたくしは外ほかに思い残すことは有りませぬ、何うか一刻もお早く」

町「他人の貴方様までそう思召して下さるのは誠に有難う存じます」

ところへ亥太郎がぶらりと遣やつてまいりました。文治夫婦を認むるより狂氣の如く飛上つて、

亥「やツ旦那、よくお帰りなせんした、御新造嬉わしい、私わア亥太郎でござんす」

と互の挨拶も済んで、それから主客数人、久々の逢瀬おうせに語り尽つきせぬ其の夜よを明しまして、一日二日と過ぎます内にはや三月の花見時、向島の引ける頃、混雑の人を掻退かきのけく一人の婦人が立花

屋へ駈付けてまいりまして、

女「はい御免下さいまし、此方こちらは立花屋の隠居でござりますか」

主「何方どなたでございますえ」

女「はい私わたくしは向島の權三郎方ごんざぶろうかたから」

主「あゝ忤つがいがまいって居りますから其の使つかいにでもおいで下さい

ましたか、それとも忤つがいめが何か馬鹿な事でも致いたしましたか」

女「いえわたくし私わたくしはそんな忌いやらしいことことで参まゐつたのではありません

ぬ」

主「へえ、これは失礼な事を申しました、貴方は年を取つてお

いでいでもお美しいから、万一忤つがいが夫婦約束でも致いたしはせぬかと

邪推して失礼を申しました、へえ御免下さいまし、へえなんく何なんの

御用でござりまするか」

女「ちよつと貴方の息子さんにお聞き申したい事がありました」

主「それいよく、いえ悴は一寸ちよつと」

女「いゝえ、そんな事ではござりません、此方こちらに文治様がおい

でなさいましようか、ちよつとお伺い申します」

主「一体あなたは何方どちらからおいでになりました」

女「私わたくしは当時權三郎方に居ります下女でござりますが、何なんと申

したら宜ようござりましようね、あの何なんでござんすよ、三宅島から

と申して下さいまし」

主「えッ、島から、さア大変、且那樣ア女嫌いだとばかり思っ

ていたが、島おいでなすつたらお氣が變つたと見えて、飛んだ

事をやらかきなさいましたなア」

女「御老人様、あなたは何を仰しやるのでございます、わたくし私はそんな浮気なことで参つたのじやア有りません、ちよつとお目に懸つて大事な事を」

主「大事な事とは何事で」

女「まア取次いで下さいまし」

主「え、旦那様、島から女が来ました」

文「はてな、むにんとう無人島から来る訳はないから定めし三宅島でありましょう、どなた何方か知らんがお通し下さい」

女「これはく、旦那様、暫く」

文「さア此方こちらへ、ど何うも見覚えはございませんが何方でござい

ましたらう」

女「はい、お忘れは御ごもつとも尤もでございます、私わたくしは三宅島に居りまして、いろいろお世話どころではございませぬ、一命をお助け下さいました八丁堀阿部忠五郎の娘お瀧でございます」

文「やアお瀧さんでしたか、まるで見違いました、赦免のちの後は此の辺へまいって居おるのですか」

女「はい、向島の權三郎というお家うちに下女奉公を致して居ります、旦那様が島においでの時分、折々お話のございました大伴蟠龍軒」

文「えッ」

女「その大伴がまいりました」

文「えッ、そゝそゝそれは何方どちらへ」

女「花見がてら權三郎方へまいりました」

文「それは何時いつの事で」

女「今日のご事でございます、此の十四日かに松平様とかのお役人様方をお連れ申すから、八九人前の膳部ぜんぶを整えて置くようにと  
 いうお頼みでございます」

文「ウム」

女「私わたくしは他事ひとごととは云いながら、命の恩人の敵かたき、すぐに飛びかゝ  
 ろうかと思いましたが、先は劍術遣いつか、女の瘦腕やせうででなまじいな  
 事を仕出来しでかして取逃すような事がありましたは、御恩を仇あだで返す  
 ようなものだと思ひ直しまして、何どうしようかと案じて居ります

矢先、御当家の御息さんから、近頃私の家のうち隠居所に島から帰ったおとこ侠客がいると聞いたことを思い出しまして、それとなくかまを掛けて聞きますと、確かに旦那様のようにでございますから、直すぐとは存じましたが、ひよつと途中で蟠龍軒にけど気取られるといかぬと思ひまして、日の暮くれ々々に出かけてまいったのでござい  
「す」

という知らせ、情は人の為ならずとは宜よう申したものでござい  
ます。

四十三

文治はお瀧の注進を聞きまして、飛立つばかり打悦び、

文「フーム、この十四日に蟠龍軒が權三郎方へ来るとな、辱かたじけない、その大伴は十四日の何時なんどき頃来ますか、定めし御存じでしょうな」

女「多分昼前からまいるように申して居つたように聞きました、お歸りは確かに夕方ゆうかたと申しました」

文「この御親切は決して忘わすれず、さゝ、お前さんは人に心付かれぬように早くお歸り下さい、お礼は後あとで致します」

女「何どう致しまして、そんなお心遣こころづかいには及びません、左様なら旦那様、追つてまた私わたくしからお礼をいたします」

文「それこそ無用、これが何よりの礼だ、この文治は生れてよ

り是れ程悦ばしいお礼を受けた事はござらぬ、千万辱けのう存じます」

と両手を支ついて居ります。

女「旦那様、それでは恐入ります、何どうぞお手をお上げ下さいまし」

文「御主人……御主人」

主「はいく、すっかり聞きました、さアお使つかいなら何処どこへでもまいらす」

文「御老人を使うは心ないようでござるが、大切の使、外ほかの者に頼むわけにまいらぬから、御苦勞でも一ちよつと寸松平右京殿のお屋敷まで」

主「はい、あの藤原喜代之助様のお屋敷」

文「左様、この手紙を御持参下さい」

主「へえかしこまく、畏りました」

ところへまた亥太郎が参りまして、

亥「へえ、亥太郎でございます」

文「おゝ、亥太郎殿か、さアこちらく此方へ」

亥「まア御機嫌ようござんす」

文「亥太郎殿、一寸奥へちよつと……さて亥太郎殿、文治が改めて申

入れる」

亥「へえ、何事でございますか」

文「これまで永らく兄弟同様の縁を結びまして何から何までお

世話にあずかりましたが、此の後この文治の頼むことを屹度お聞  
 濟み下さるか」

亥「さりとは又改まつた御口上、へえ旦那のいう事なら何で  
 も聞きましよう、命に懸けても」

文「千万辱けのう存じます、さて亥太郎殿、かく申す文治は此  
 の度一生に一度の悦ばしい事が出来ました」

亥「そいつア有難え」

文「その悦びと申すは外ではない、敵蟠龍軒が壮健で居ります  
 ぞ」

亥「へえ、それはく」

文「一両日中に此の近辺で対面致します」

亥「あの蟠龍軒に、そいつア有難え、野郎め、其の時こそなぶり殺しに」

文「それでござる、其の時お助太刀は誓つて御無用でござりますぞ」

亥「やツ、それ計りは旦那聞かれませんが、今まで彼奴の為に何の位苦勞をしたか知れやしねえ」

文「いやさ、其処がお頼みだ、武士の敵討に他人の力を借りたとあつては後世の物笑いになります、今まで文治が苦勞をした甲斐がありません、さア此の道理を聞分けて、御心情はお察し申すが必らず助太刀して下さるな」

亥「へえく分りやした、そんなら宜うござんす、併し唯見て

いるだけなら宜うござんしょう」

文「それは御勝手、成るべく遠くへ離れて御覧下さい」

亥「併し先方に助太刀があれば」

文「いや、それも御無用」

亥「それじゃア旦那あんな余りじやアねえか」

文「はい、瘦やせても枯れても文治は侍でござります」

亥「そりやア云わずと分つて居ます、それじゃア皆みんなに断らずばなるまい」

文「どうぞ宜しく頼む、なるたけ人に知れぬよう、万一逃がしたら百日の何なんとやら、そう事が分つたら一いっぱい盃ばいやりましょう、これ町や」

亥「いや、私わっちア酒は絶つて居りますから」

文「はて、それは又何なぜ故に」

亥「それだから少しやア手伝わして下さいと云うんです」

文「いや、それ程に思つてくれる御親切は辱けないが、武士の面目めんぼくに関わるから」

亥「え、宜ようがす、御機嫌宜う、十四日にやア一生に一度の楽たのしみ、早朝から見物にまいりやしよう」

文「左様なら」

亥太郎は表へ出まして、

亥「あゝ、いつに変わらぬ武士の魂、当世に二人とねえ男だなア」  
入れ違いに藤原喜代之助が入って参りまして、

喜「文治殿、藤原でござります、先程から亥太郎殿がおいでの様子ゆえ少々控えて居りました、数年御苦勞の甲斐あつて此度こんどの悦び、お察し申上げます」

文「ようこそお出で下さいました、是に過ぎたる悦びはござりません、今日までの御助力有難うぞんじます」

喜「時に文治殿、予かねてお話の小野うじ氏の脇差、中身は確か彦四郎定宗と覚え居りますが、拵こしらえは何なんでござりますか」

文「縁ふちかしら頭づばは赤銅魚子、金にて三羽の千鳥、目貫めぬきは後藤宗乗の作、鐔つばは伏見の金家の作であります」

喜「承知いたしました、様子に依よつたら御主人へ申上げて置きましょう」

文「いや、それは余り大<sup>おおぎ</sup>業<sup>よう</sup>です、時の御老役のお耳に入れ  
るまでの事はございませぬ」

喜「併<sup>しか</sup>し御前へ上<sup>あが</sup>りますと折々文治は何方<sup>どちら</sup>に居<sup>お</sup>るのであろうと  
いうお尋ねがござりますゆえ」

文「いつに変わらぬお情、切腹を御免になり、又流罪を御赦免下  
さいましたのも、皆<sup>そこもと</sup>其<sup>とりなし</sup>許<sup>り</sup>のお執成と右京殿の御仁心<sup>ごじんしん</sup>による事、  
文治は神仏より尊<sup>とうと</sup>く思<sup>う</sup>て居<sup>り</sup>ます」

喜「いや、それと申すも、其許の日頃の行状が宜<sup>よ</sup>ければこそ、  
我らは真に世の中の鑑<sup>かぐみ</sup>と信<sup>ま</sup>じて居<sup>り</sup>ます、時に御家内様、敵<sup>かたき</sup>の行  
方が知<sup>れ</sup>まして嘸<sup>さぞ</sup>々お悦<sup>え</sup>びでござりましょう」

と一通りの挨拶をして、大分夜<sup>よ</sup>も更<sup>か</sup>えましたゆえ藤原喜代之助

は暇いとまを告げて、一先ひとまず我家へ帰りました。

#### 四十四

喜代之助は一旦我家へ帰りましたが、夜よの明くるを待兼て、其の夜うちの中に奥の女中に、

喜「夜更よふけにて恐入りますが、文治夫婦のお物語を申上げとうござる」

と取次を願いました。右京殿はお側の者を相手に一口召上つておいでの所へ、女中のお取次、早速御面会、喜代之助が

喜「予かねてお話のござりました文治事こと、来きたる十四日夕申刻頃な、つ、向

島に於て舅しゅうかたきの敵大伴蟠龍軒を討ちます」

と申上げますと、

右京「本来ならば早速町奉行を呼んで取鎮め方を申付くべき筈であるが、予て義侠の心に富みたる業平文治が、舅の敵を討つとあつては棄置く訳にも行くゆまい、承まわれれば蟠龍軒とやらは宜よからぬ奴じやそうな、討たせるが宜い」

と仰せられて、其の夜密書を藤原に持たせ、「文治の身の上に万一の事なきよう忍びやかに警固致し候うように」と御老中お月番松平右京殿より南町奉行石川土佐守殿へ御内達になりました。委細承知おもひきの趣を申上げて、それ／＼手配りを致しました。此方こなた文治は其の夜から湯を沸かさして身体を浄め、ゆる／＼十四日を

待つて居ります。またお町も例いづになく磨き立て、立派に髪を結上げまして、当日は別して美しく化粧を致しました。只さえ人並勝れた美人、髪が出来たて、化粧のしたて、衣類も極ごく々上品な物を選びましたので、いや綺麗なんの何の眼さめが覚さめるような美人であります。殊ことに貞女で、女の業わざは何でも出来るといふのでありますから、文治とは好こう一対いつつの美夫婦であります。頃は向島の花見時、一いっぽ方口うぐちの枕橋近辺に其れとなく見張みはりつて居りますので、往來ゆきの人ひとは立止りますくらい、文治は遙か離れて向島より知らせの来るのを待受けて居ります。そこら辺あたりに八丁堀の同心がちら／＼見えるは、余よ所そながら文治夫婦を警固けいこして居おるのでござります。それから又權三郎の入汐いりしおから三囲みめぐり渡わたし、竹屋の渡しは森松、國藏が

持切りで見張つて居ります。其の頃は今と違ひまして花見の風俗は随分下卑げびたもので、鼻先の円まるくなつた百眼ひやくまなこを掛け、一升樽なかんを提さげて双肌もろはだ脱だぎの若い衆しゅも多く、長屋中総出の花見連、就なかん中裏なかつら店の内儀かみさん達は、これでも昔は内芸者うちげいしやぐらいやつたと云うを鼻に掛けて、臆面おくめんもなく三味線を腰に結び付け、片肌脱だぎで大きな口を開あいて唄う其あとの後から、茶碗を叩く薬缶頭やかんあたまは、赤手拭あかぢの振り鉢卷ねじ、一群ひとむれ大込おおごみの後うしろから、脊割羽織せわりばおりに無反むぞりの大おほ小を差し、水口みなくち或は八丈の深い饅頭まんじゅう笠がさを被かぶつて顔を隠したる四五人の侍がまいりました。確かにそれと思ひましたが、顔は少しも見えませぬ。文治は扱さてはと身固めをして、件くだんの侍の近寄るを待つて居ります後うしろから、立花屋たてはなやの忤せがれが予かねての約束に従い、洩しぼう

団扇ちわをもつて合図を致しました。ところが、ずぶろく酔うた亥太郎が横合からひよろ／＼出かけまして、突いきなり然侍の笠に手を掛け、力まかせに引きますと、二人の侍は笠を取られて輪ばかり被り、真ツ赤になつて、

侍「やい待て、無礼だ」

亥「やア人ひとちげ違えだ、そんなら此こいつ奴か」

とまた側に居おる侍の笠を取ろうと手を掛けますと、一人は其の場を外はずして逃げようとする後うしろから、立花屋の忪こわが怖こわ々ながら渋団扇で合図をいたしました。

亥「それッ」

と亥太郎は飛び掛つて笠へ手をかける、其の手を取つて振ねじあ上げ

ようと致しましたが、仮にも十人力と噂のある左官の亥太郎、只今でも浅草代地の左官某が保存して居るおようですが、亥太郎が常に用いましたこていた鋤板は、ぎつと一尺五六寸、軽子かるこが片荷程かたにの土を其の板の上に載せますと、それを左に持ちまして、右の手で仕事をすると申します。斯程かほどの大力だいきある亥太郎、なか／＼一人や二人の力で腕を振上げるなどという事の出来るものではござりませぬ。

亥「この三さん一びんめ、生意気なことをするな」

と忽たちまち其の手を振返しました。ところへ文治が駈はせ寄つて亥太郎の腕を押え、

文「亥太郎殿、こんな事があると思えばこそ、あれ程頼んだ

ではないか、お控えなさい」

亥「へえ〜」

文「御免」

と其の侍の笠に手をかけ、ぽんと※<sup>むし</sup>り取りました。

文「いや大伴蟠龍軒、久々で逢いましたな」

はたと睨<sup>にら</sup>み付けますと、後<sup>うしろ</sup>に笠の輪ばかり被<sup>か</sup>つて居りました

四人の侍、「汝<sup>おのれ</sup>、無礼者」と刀に手をかける其の横合より、八丁

堀の同心<sup>てい</sup>体の人、

「これ〜お控えなさい、舅の敵討でござるぞ、それとも尊<sup>そんこ</sup>

公達<sup>こうたう</sup>はお助太刀なさる思召<sup>おぼしめし</sup>か」

侍「いや、助太刀ではござらぬ」

同心「左様ならお控えなさい」

亥「やい三一、ぐずくしやがると豊島町の亥太郎が打殺す

ぞ」

同「其の方の出るところではない、お控えなさい」

亥「何だなんと」

文「おい亥太郎殿、お役人様だぞ、控えろ、さア大伴、もう斯うなつたら致し方はござらぬ、侍らしく名告なのつて尋常に勝負なさい」

侍「何事かは知らぬが、人違いではござらぬか、よし又拙者が大伴にもせよ、敵といわれる訳はござらぬ」

文「卑怯なことを云うな、過ぐる年三十みそか日の夜よ、お茶の水にて

小野庄左衛門を切殺し、定宗のしょうとう小刀を奪い取りし覚えがある  
 う、論より証拠、その差添さしぞえは正まさしく庄左衛門の差添さしぞえ、然しからずと  
 云うならば出して見せえ、小野の娘お町は今は斯かく申す文治の妻  
 なり、お町く、これへ参れ」  
 と云われて大伴蟠龍軒は顔がんしよく色土の如く、ぶるく震だまえて居  
 ります。

#### 四十五

お町は敵討の支度かい／＼しく現われ出で、

町「おのれ蟠龍軒、眼さえも見えぬ父上様を、よくも欺だまして引

出し、無慚むざんにも切殺したなア、さア汝おのれも武士の端くれ、名告なのつて尋常に勝負せい、さア〜悪党、いかに〜」

時に友之助、

友「やい蟠龍め、この煙草入は覚えが有ろう、この友之助が其そ方ちへ売った煙草入、お茶の水の人殺しの時、亥太郎さんに取られたであろう、さア何どうじゃ、えゝ、この意い気く地じ無なしめが」

いかに卑怯な蟠龍軒でも、もう斯こうなつては逃げる訳に参りませぬ。

蟠「ウーム、かく申す大伴の道場へ夜やちゆう中切込んで、泥坊同様なことをしたのは其の方ちもだな、よし、片ツ端から切伏せくれん、さア支度いたせ」

と言いながら四辺あたりにを見ますると人一ぱい。國藏、森松、亥太郎始め、皆々手にく獲物を携たずさえ、中にも亥太郎は躍起やつきとなつて、亥「さア人面獸心にんめんじゆうしん、逃げるなら逃げて見ろ、五体を微塵みじんに打碎うちくだくぞ」

文「大伴氏、最早逃げようとて逃すものでない、積る罪業ざいごうの報いと諦めて尋常に勝負せい、お町、其方そち少し下さがつて居れよ」

相手は大勢おおぜい、蟠龍軒は隙すきあらば逃げたいのは山々でござりますが、四辺あたりは一面土手を築ついたる如く立錐りつすいの余地もなく、石川土佐守殿は忍び姿で御出馬に相成り、与力は其の近辺を警戒して居ります。尚お右京殿の使者も忍び姿にて人込みの中に紛れ込みまぎ、藤原其の他二三の侍も固唾かたすを呑んで見張つて居ります。文治は

静かに太刀を抜放ち、

文「さア大伴氏、其そこもと許は舅の敵の其の上に、よくも此の文治が面部に疵きずを負わし、痰たんつば唾まで吐き掛けたな、今日こそ晴れて一騎討の勝負、疾とくく打つて来い」

蟠龍軒はぶるく総身そうみに震いを生じ、すらりと大刀抜くより早くお町の方を目かけて一太刀打込みました。

文「何をするツ」

と文治は横合より打込む太刀を受け止め、

文「女を相手にしようとは卑怯な奴じやな、さア此の文治が相手だ」

時に見物一同声を挙げて、

「馬鹿野郎、卑怯な奴だ、叩たツ切つてしまえ」

乙「どうだえ、女が切られなくつて宜よかつたなア」

丙「どうも美いい女だなア、あの後姿の好いいこと、桜の花より美  
くしいや、ちよつと姉ねえさん、此方こちらを向いて顔を見せておくれ」

丁「気樂なことを云うな」

同心「これ黙れツ、やかましい」

甲「見ろくく八丁堀が見張つているぞ、併しかし今日の花見は宜いい  
日だったなア、雨が降出さねえと好いいかな」

乙「馬鹿野郎、こんな日に日が当つて居いるじゃねえか」

甲「でも己おれの頭へ露が垂れたぞ、やア今日の雨は腐つていと  
見えて馬鹿に臭いなア」

と後うしろを振向いて見ますと、糞柄杓くそびしやくを担かついだ男が居ります。

甲「この野郎め、途方もねえ野郎だ」

同心「これ百姓、静かにしろ」

見物「何なんだ篋べらぼう棒め、糞の掛けられ損か、それ打込むぞ、やア

御新造あぶね危えく、此方こつちへお出でなせえ、やアレ危えッてば」

こゝぞと文治は打込もうと隙うかぎを窺うかがつて居りますと、蟠龍軒は其

の切っ先に怖おそれてか、じりり後あとへ退さがります。

見物「やア親爺おやじ、後うしろは川だぞ、もう一ひと足あしで川だ、馬鹿野郎」

と口々に吠鳴どなり立てられて、元来卑怯未練な蟠龍軒、眼くらが眩くらん

だと思おもえまして、五分ごぶの隙ひまもないのに滅茶苦茶に打込みました。

文治はチャリンと受流し、返す刀で蟠龍軒の二の腕を打落しました

た。やれ敵かなわぬと逸いちあし足出して逃うしろ出す後から、然そうはさせじと文治たぶさは髻つかを引ツ掴つかみ、ずる／＼と引摺うづらり出して、

文「さアお町、親の敵存分に怨うらめ」

町「はい……おのれ蟠龍軒、よくも我が父を殺せしよな、汝おのれ如おのれき畜生のために永い月日の艱難苦勞、旦那様は入牢じゆるうまで致したぞよ」

と胸元目がけて一太刀打込みますると、

文「お町待て、これ蟠龍軒、よくも今まで達者で居てくれたの、斯こうなるからは最早怨みはないぞ、静かに往生しろよ、死後には必こらず香華こうげを手向たむけて遣つかわすぞ」

と申し聞けまして、お町に向い、

文「さアお町、十分に止めを刺せ」

町「はい、大伴、親の敵思い知れツ」

とずぶりと突き通されて息は絶えました。見物一同、山の崩れる如くわツ／＼という人声、文治は取急ぎ血刀を拭い、お町に支度を改めさせて与力に向い、

文「いずれお役人様が御出役になりましたようが、市中を騒がし御法を犯せし我ら夫婦、お繩を頂戴いたします」

と大小を投出しました。

与力「いや御浪士、繩には及ばぬ、併し大小はお預かり申す、ゆる／＼お支度なさい」

文「有難う存じます、お町支度は宜いか」

同心「大分お疲れの様子、こゝに葉が有りますが、同役、水を」  
 文「何から何までお手数をかけまして恐入ります、私は気付には及びませぬ」

法は法、ま枉げる訳になりませぬから、文治お町の兩人を駕籠に乗せて奉行所へ引立てひったました。花時の向島、敵討があると云うので土手の上は浪を打ちますよう、どや／＼押掛けてまいりまして、蟠龍軒の死骸を見ては唾つばを吐くやら蹴け飛ばすやら弥次馬連が大騒ぎをして居ります。此方こなたは奉行所、一応吟味の上、

奉行「悪漢無頼の曲くせもの者、殊に舅あだの仇を討つは武士の嗜たしなみ、天晴つばれな手柄」

というお誉ほめ言葉がありました、早速帰宅を許されました。此

の事がパツと世間に広まりました、さア諸家から召抱めしかえにまいること何人という数知れず、なれど文治は、

文「手前は主しゅうと取りの望みはござらぬ、折を見て出家いたす心んてい底でござる」

と一々断りましたが、旧主堀丹波守殿よりの仰せは拒むに拒ま  
れず、余儀なく隠居同様として親の元もとだか高三百八十石にてお抱え  
になりました。近頃まで御藩中に浪島という名みょうせき跡が残つて居  
りました。又女房のお町は長命でありまして、文政年間の人でお  
町と知しりあ合の者も大分あつたそうでござります。後の業平文治の  
敵討、これにて終局といたします。

(扱時事新報社員速記)





## 青空文庫情報

底本：「圓朝全集 卷の四」近代文芸・資料複製叢書、世界文庫  
1963（昭和38）年9月10日発行

底本の親本：「圓朝全集 卷の四」春陽堂

1927（昭和2）年6月28日発行

※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、底本の表記をあらためました。

ただし、話芸の速記を元にした底本の特徴を残すために、繰り返し記号はそのまま用いました。

また、総ルビの底本から、振り仮名の一部を省きました。

底本中ではばらばらに用いられている、「其の」と「其」、「此の」と「此」は、それぞれ「其の」と「此の」に統一しました。また、底本中では改行されていませんが、会話文の前後で段落をあらため、会話文の終わりを示す句読点は、受けのかぎ括弧にかえました。

※誤記等の確認に、「三遊亭円朝全集 第三卷」（角川書店、1975（昭和50）年7月31日発行）を参照しました。

※本作品中には、身体的・精神的資質、職業、地域、階層、民族などに関する不適切な表現が見られます。しかし、作品の時代背景と価値、加えて、作者の抱えた限界を読者自身が認識することの意義を考慮し、底本のままとしました。

入力：小林 繁雄

校正：かとうかおり

2000年2月25日公開

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 後の業平文治

三遊亭圓朝

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

著者 鈴木行三校訂編纂

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>